

お伺ひ致さうと存じてみました。(口) お伺ひ致しませう。(口) 近日お伺ひ致すつもりです。(口)
次の「致す」は獨立の動詞として使はれてゐるのであるから補助動詞ではない。

きつと應援致しますよ。(口) 事情は十分斟酌致しませう。(口)

従つて「應援」「斟酌」は名詞であつて動詞の語幹ではない譯である。

(三) 仕る

これは「爲す」「行ふ」といふ意味をもつた文語の敬語の動詞「つかうまつる」の轉じたものを、口語の謙讓の補助動詞として用ひるのである。「申す」「致す」と同じく自分の動作を表す動詞の下につけて用ひる。その附く動詞の上に「お」を冠らせることも「申す」「致す」と同じである。(尤も「お」はつけぬ場合もある。)現代での用法は「申す」「致す」に比べてはるかに範圍が狭い。活用はラ行四段活用と同じで動詞の連用形に連る。

大慶に存じ仕ります。(口) 明日お伺ひ仕る豫定です。(口) では御別れ仕ります。(口)

但し次の「仕る」は獨立の動詞として使はれてゐるのであるから補助動詞ではない。

御喜捨仕りませう。(口) 拜見仕りました。(口) 承知仕る。(口)

従つて「御喜捨」「拜見」「承知」等は名詞であつて動詞の語幹ではない。

(四) 上げる

これは「進呈する」といふ意味の敬語の動詞(ガ行下一段活用)が、自分より仕向ける動作を謙遜していふ補助動詞に轉用されたものである。自分の動作を表す動詞の下につくことは「申す」と同じであるが、總べての動詞の下に在るといふ事はない。使用の範圍が限られてゐる。活用はガ行下一段活用と同じで、動詞の連用形に連る。

挨拶を申し上げます。(口)

多分さうだらうと存じ上げてをりました。(口)

待ち上げてをりますからどうぞお越し下さいませ。(口)

次の例は動詞の下に助詞「て」を連ね更にその下に「上げる」をつけたものであるが、「上げる」が補助動詞であることに變りはない。

三十分位なら待つて上げないこともない。(口)

分らないことは教へて上げる。(口)

よい本を買つて上げよう。(口)

次回に連れて行つて上げる事にしよう。(口)

敬語の助動詞の中には、尊敬及び謙讓の外に鄭重の意を表すものがある。所謂鄭重語といふものである。人によつては謙言の助動詞等と呼んでゐるものである。これに屬するのは「ます」の一語である。この語はあらゆる動作を鄭重にいふのであるから、その附く動詞は誰の動作であつても構はないのである。即ち尊敬の助動詞及び補助動詞は、その附屬してゐる陳述語に對する主語たるものに敬意を表し、謙讓の補助動詞は對して自己を卑下するのであるから、その附く動詞の表す動作が誰の動作であるといふことは重大な問題であつたのであるが、この鄭重語の「ます」は目下談話を交してゐる當の對手を敬ふのが本義であるから、動作主の誰であるかは問はないのである。

あなたも入らつしやいますか。(口)

私も參ります。(口)

父も行くと言つて居ります。(口)

雨が降つて來ました。(口)

私の宅には犬が三匹飼つてあります。(口)

右の文の主語は「あなた」「私」「父」「雨」「犬」である。かくの如く文の主語は何れであつても、この話をしかけてゐる対手をさへ敬へばよいのである。だから話の対手に依つてき程尊敬する必要のない人に話しかけてゐる場合には、文中の主語に對する尊敬の語は附けても、鄭重の「ます」は用ひないのである。これで以て見ても「ます」の本義と用法がよく分るだらうと思ふ。

殿下が大島に行啓遊ばすといふことだ。(口)

先生は今日休んで入らつしやるさうだ。(口)

故に次の文は、文の主語の「叔父」や「父」を身内のものと考えて敬はないで、話をしかけてゐる対手を敬つたことになるのである。

叔父はまだ二三日歸らないさうで御座います。(口)

母の健康は中々恢復しないので、父も困まつてゐます。(口)

又「ます」の鄭重を表す語であるといふことは、尊敬や謙讓の語を附ける必要のない目下のものに話してゐる場合にでも、之を用ひることで知れる。

お前は用事がすんだらすぐ歸りますか。(口)

太郎、私が読みますからよく聞いてゐなさい。(口)

「ます」の活用と連続は次の通りである。

未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形	連	續
-----	-----	-----	-----	-----	-----	---	---

ます	ませ	まし	ます	ます	ますれ	ませ	總べての動詞の連用形
ます	ませぬ	ませう	まする	まする	ますれ	ませ	

右の如く「ます」の活用は四段活用とサ行變格活用とが互に混じてゐる。

まだ花は咲きません。(口)

併し、やがて咲かせう。(口)

たうとう花が咲きました。(口)

春には花が咲きます。(口)

出發します時にはお知らせいたします。(口)

使が歸つてまゐりますればさう申しませう。(口)

どうぞ入らして下さいませ。(まし)(口)

未然形の「ませ」は「ませぬ」「ませう」とのみ言つて「ませない」とも「ませよう」とも言はない。又「られる」「させる」等の助動詞にも續かない。連用形の「まし」は「て」「た」「たら」に續くばかりである。終止形及び連體形の「まする」は「ます」に比べて鄭重の度が強く、謹嚴な語調が加はつて來る。足利時代の「狂言記」には「ます」と「まする」の兩方が使つてゐる。

醉狂を爲られて迷惑致します。(貫掣)

身共も上ります。(宗論)

今日では改まつた演説口調か、餘程謹嚴を要する場合かでなければ「まする」は普通の談話には用ひない。命令形の「まし」は「入らつしやい」「仰つしやい」「下さい」「なさい」に續けて用ひる。又、命令形の「ませ」は「入ら

つしやり」「入らつしやり」「仰つしやり」「仰つしやり」「下さり」「下さり」「なさり」「なさい」につく。命令形はこの四語以外には連らないのである。

「ます」の語源に就いては諸説がある。

(一)「ます」より来たとする説

「ます」は「有り」「在り」「居る」の意味を表す四段活用の敬語動詞であるが、それが「在り」の意味でなくて動詞にそへて「出でます」の様に單なる敬語の助動詞として用ひられ、後に下二段のやうな活用がまぎつて、一つの變格活用となつて、純粹の助動詞となつたものとするのである。國語調査委員會編纂の「口語法別記」(二八二頁)、松下大三郎氏著「標準日本語法」(一七四頁—一七五頁)、小林好日氏論文「足利期言語の待遇法」(國語と國文學)昭和三年十二月號所載)などの説である。

(二)「申す」より来たとする説

古言にも「申す」を「ます」といつた例

あな心憂などまし騒げど、(榮花物語)

播磨なる所にあらんとて罷るよしましければ、(後葉)

があり、徳川時代にも

ひだるくてなり申さない。(膝栗毛)

こなたのいふことがあたり申さない。(同)

はたご十六文づゝ出し申さう。(同)

の様な用例が澤山ある。又、現代でも南九州の方言では「行き申す」「讀み申した」のやうに言つて「ます」とい

ふ語は用ひない。三矢博士をはじめはこの説だつたといふことだし、「言泉」等この説に依る者は少くない。

(三)「おはす」より来たとする説

「申す」説には(一)活用から考へて「申す」は四段であるのに「ます」はサ變である。(二)意義の上から考へて「申す」は主語に對するものを尊敬すること「參らす」「奉る」「聞ゆ」などと同様であるのに、「ます」は文のある成分を尊敬するのではなくて、その文を讀む人を尊敬すること「侍り」「候ふ」などと同義である。(三)「申す」から「ます」が出たとすれば「これは鹿相申しました」。(膝栗毛)「少しはおまけ申しませう」(同)の様に重複の説明が出来ない。——の三點の難がある。故にこれは「御座す」から来たものである。その理由は、(一)「御座す」の「は」を「ま」に轉じて、「おます」「おす」「やす」又は「ます」と轉化したものである。音讀すれば「御座る」となる。(二)「おはす」は元來主語を尊敬する語であるが單に丁寧と言ふ意にも用ひられる。(三)「は」が「ま」に轉ずる傍例もある。(四)「やす」も「おはす」から出たものと思はれる。以上は松尾捨治郎氏著「國文法論纂」(二一七頁—二二〇頁)の説であるが、同氏は「國語法論攷」(八八四頁—八八九頁)に於ても同様の立場をとり最後に「要するにますは申す參らす(まらす、まつす)おはす三語の混同と見るのが妥當であらう。」といつてをられる。

(四)「まらす」より来たとする説

「文祿舊譯伊曾保物語」(文祿二年刊行)「天草平家物語」(文祿元年刊)等に表れてゐる「マラスル」といふ語を調べてみると給與・謙讓の助動詞として使はれてゐるもの、單なる謙讓の助動詞として使はれてゐるもの、單なる丁寧の助動詞として使はれてゐるものがある。而して、その用法の最後である單なる丁寧の助動詞としての使はれ方は、現今の「マス」と同様である。原本平家物語と譯本平家物語とを比較して譯本の「マラスル」が原本の如何なる語に當てられてゐるかを見る時、やはり給與・謙讓の意義を有つてゐたことは確であるが、最後は丁寧の義まで成下つてゐることは事實である。つまり「マラスル」といふ語は、

その用ひられた時代（全盛は桃山時代）には、現代の「マス」とは異なつて、場合によつて、給與・謙讓となり、單なる謙讓となり、又單なる丁寧となつたと言ひ得るのである。而してその活用はサ行變格活用で、

マ ラ	セ	未然形	連用形	終止形	已然形	命令形
		シ	スル (ス)	スレ	セイ	

而して、この語は「マキラス」といふ下二段活用から來てゐるので、連用形の「シ」は「セ」の轉訛音らしく、「吉利支丹文學斷片」（新村博士輯集）にも、

なほ明かに思ひ出しまらせた。（豊後物語）

一切舟が延びぬやうに思ひまらせた。（加津佐物語）

と見えてゐる。

又當時下二段活用の「ス」「サス」の連用形の「セ」が「シ」に變じてサ行變格活用になつてゐることは「狂言記」にも見えてゐる所である。

行かしませ。 持たしておく。 烏帽子を着さしませ。 るさしますか。 飲ましをろ。

要するにこの時代に極めて近く「マラスル」は下二段活用からサ行變格活用に轉じたのである。而して「マラスル」はもと給與を表す謙讓動詞「マキラス」から來てゐることは疑ふべからざる事實である。

右は春日政治氏の論文「敬讓動詞マラスルについて」（國語國文の研究）昭和三年十二月號所載の要旨であるが、安田喜代門氏著「國語法概説」（二二八頁―二二九頁）の説もこれに近い。即ち「申す」も「ます」「在り」の敬語も活用の方から「ます」と一致しない。助動詞の「ます」は「マキラス」のくづれたものである。この「マキラス」を「ます」につなぐものとして「天草本平家物語」には「マキラス」と同義の「マラスル」といふ語がいくつもあ

る。且つこの「マラスル」の約まつたと見える「マツス」が「狂言記」などに見える。「はてさて好うこそおやりやつたれ。をすへてまつせう。」今も福岡の方言にはこの「マツス」が行はれてゐる。「お手引いてパンく〜に行きまつせう。」といふ意味のことが述べてある。

なほ「まらする」の行はれたと同じ頃「まいする」といふ語が行はれてゐる實例は抄物に散見する。活用は「せ、し、する、する、すれ、せよ」とはたらいてゐる。この語に就いては、同じく春日政治氏は「マイル」といふ語（『九大國文學』第一號―昭和六年九月―號所載）に於て詳論を試み「マイル」は「マラスル」よりも文献上やや先に表れたらしく、已に早く活用をも變じてゐるが、さして速くない後に「マラスル」が表れた爲、或時代を之と竝存したが、劃然使用の社會を別にしてゐたやうである。マイルは初から佛者の社會に使用せられたらしく、俗衆の社會に起り廣く用ゐられたマラスルの方が之に打勝つたものと見え、後には影を潜めて了つた。かくてマイルは音形から言つても活用から言つても今日の丁寧助動詞マスに、マラスルよりも近かつたにかかはらず、一時の存在が認められるだけであつて、マスへの關係は絶えて見出されない。マスの直接前身はやはりマラスルの方であるらしい。」と結論でをられる。

(五)「ます」と「まらする」とより來たとする説

湯澤幸吉郎氏は「口語マスの起原について」（『教育』昭和四年六月號所載）に於て、「マス」といふ助動詞は全部「マラス」から出たのではなく、書紀・萬葉集以來の「マス」と「參ラス」から出た「マラス」の轉との二元的要素が混入してゐると論じてをられる。その説の要旨は次の通りである。

マセ	マシ	マスル	マスル	マセ	マセ
	マシ	マス	マス	マセ	

(サ變)

の如くサ行變格活用と四段活用との混淆がある。これを次の如く考へるのである。

(一)被敬者の動作状態に付き、四段活用に變化する點は書紀・萬葉以來の「マス」の流である。「狂言記」を見ると、「マス」が他の場合にはサ變の様にも、四段活用の様にも用ひられて、何等統一した趣のないにも拘らず、「セ(シ)マス」「サセ(サシ)マス」の場合に限つて嚴重に四段活用として表れて、殆ど一の例外をも發見し得ない。これは「マス」の原始的形式を保つてゐるものだと思はれる。而してこの「マス」は鎌倉以後足利末期に入つて急に對話語として優勢になるまで殆ど文獻に現れてゐない。その現れてゐないものが足利末期に復活したのは、延慶本平家物語に見える、敬意を表す「マス」の敬語動詞につゞけられた「セマシマス」「サセマシマス」等から考へて、「マシマス」に促されたに因るのではあるまいか。即ち「狂言」にでも極めてまれに見える。

夫は今時めく嚴達を頼みませ。(大藏流、比丘貞)

の「マシマス」が短くなつて古形に復したと見得られる。

(二)被敬者に對する者の動作につき佐行變格活用に活用する點は「マラス」の流である。

「マキラス」は動詞としても助動詞としても、文語には普通に現れる語で、下二段に活用し、丁寧語中口語の「上ゲル」「差上ゲル」などと同じく、他人に仕向ける意の關係謙語である。然るにその「キ」の略された「マラス」が天草版の「伊曾保物語」や「平家物語」及び「抄物」に盛に用ひられて居る。但し「抄物」の「マラス」は未だ下二段活用でしかも「マラス」意のものに限られてゐる。もつとも下二段活用と言つても、終止・連體兩形の別を失つて居ることはこの時代の特徴で、名は同じでも文語のと全然等しくはない。これが天草版の「伊曾保物語」や「平家物語」になると用法すこぶる自由になつて、今日の「マス」と殆ど擇ぶ所なく、活用もその連用形が「マラシ」となり佐行變格に變つてしまふ。

右の如く論じ、氏は更に「オマラスル」——「オマツスル」——「オマスル」と明かに變化の跡を示す實例をあげて、「マラス」の前身を「マラスル」と推斷し、なほ「マキラスル」から「マラスル」に至るに「マラスル」を假りるよりも、「マイスル」を通過

する方が穩當であるかの様に思はれる。何れにせよ「マス(ル)」には「マラスル」からの流を認め得るが、それが全部だと思はれないことは、前に述べた通り活用の状態が示して居る。併し下二段活用が四段的になることは、「狂言」などでも珍しくないから、「マラスル」の未然・連用・終止・連體の活用形がそれごとく「マサ、マシ、マス、マス」となることは怪しむに足らずとして、尙「マキラスル」一元説を擁護するかも知れぬが、それには他に弱點がある。既に引いた「抄物」や「狂言記」の「マス」の説明に無理が生ずるのである。今便宜上「抄物」中の二例

宰相ニナラシマサウトハ……

高祖ノ我レハ誰レホトノ天子ソト問ハシマス。

を取つて見るに、何人が解しても「成ラセラレン」「問ハセ給フ」と言替へ得る意味で、一動詞に二敬語助動詞が同時についた言方である。一體敬語助動詞としての「ス、サス」は、平安朝以來ほとんど單獨の形で動詞につく事なく、必ず他の敬語に連るを例とする事を思ひ合せても、右の「マサ、サス」は敬語たるに疑がないのである。然るにこれを「マラス——マラス」から説かうとすれば、敬意は「シ」だけに譲つて、「マサ、マス」は單に丁寧の意を表す爲に添へ用ひたと説明するより外なくなつて、「ス、サス」の沿革を顧みぬ説となる。さうかと言つて「マラス」の一元説から、「マス」に敬意を認めようなどは思ひも寄らぬことである。次に若し「抄物」の「マス(ル)」に丁寧語としての用例が出来て居たら、「シ、サス」と連合せぬ他の場合にも現れさうであるし、またその一階古きにあると見られる「マラスル」に、既に發生して居たかも知れぬと言ふ事も考へ得る。(既に天草物の「マラスル」には多くの用例がある。)所が「抄物」における「マラスル」は用例極めて少き上に、さういふ意のものはかつて見當らず、「マラスル」には尙更丁寧助動詞としての例は見えないのである。これは單なる偶然の事とは見得ないし、また余の淺學の致す所とのみ斷する事も出来ない様である。この點から言つても丁寧語とするには弱みがある。思ふに「マラスル」や「マラス」は、假りに民間には既に丁寧語として行はれて居たにはしても、用法の新しきが爲に言葉としての品位なく、随つて「抄物」作者の如き知識階級には、平素用ひられなかつたものであらうと考へられる。尙未然形「マサ」に對して「マラ

「サ」の用例を見出しさうなものであるが、「抄物」を始めとして天草物にも所見がない様である。故にこれを「抄物」について言へば、「マラセ」から一足飛びに「マサ」になつた事になる。よし今後の研究によつて「抄物」で未然形「マセ」の用例を發見し得ても、短日月の餘りに急激な變化の様である。此の如く「マラスル」の一元説は事實を輕視した——少くとも一面を考慮の中に入れぬ見方の様に考へられるのである。

以上を要約すれば、「マス(ル)」には二つの源があつて、一は話相手、または第三者の動作状態に敬意を添へる古代からの「マス」で、一は他に仕向ける動作をへり下つて言ふ意の「マラス」である。しかもこの二が合流するまでには、前者は一旦「マシ」となり、後者は「マラスル(或はマイルル)」となつて居る。かく「狂言」に入ると、両者が互に混合交錯して、わづかにその一部に原の形を留めて居るに過ぎない。故に一々の實例に就いては、確然とその何れの源から出たものか、必ずしも容易には判別し得ない様になり、更に新しい力の發生を見た。それは丁寧語としての用法を生じたことである。この用法は既に天草物の「マラスル」に現れて居るが、「マス(ル)」に至つていよいよこれを推廣め、現代口語に至ると、本源は敬語・謙語たる事は忘れられて、たゞ丁寧語としてのみ認められて居る有様である。

繼つてその活用の方面を見ると、古代からの「マス」の四段活用と、「マラス」の下二段とが混合して、相當する活用形の間、勢力上の争が起つた。即ち未然形では「狂言記」に既述の如く未だ「マサ」があつたが、何時の間にか「マセ」に驅逐され、已然形では「マセ」が早く勢力を失つて、現代口語では「マシ」に壓倒された形である。命令形の「マセイ、マセ」は「狂言」では伯仲の間にあるが、口語では「マセイ」が廢れて「マセ」獨り存し、それが「マシ」ともなるのである。

次に連用形の「マシ」は四段活用から言へば當然で、「マラス」方面から見ても、既に「マラセ」が天草物では「マラシ」になつて居るから、その方からも説き得る。最後に終止形(連體形と言ふも同じ)は互に譲らずに、「マス、マシ」が對立して居るが、併し口語では大勢既に「マス」に歸して「マシ」は特に丁寧に言ふ時にのみ用ひられる様になつた。各活用の用法についても、「狂言記」と現代口語との間の異同を見るは興なしとせぬが、本稿の目的に副はぬ故觸れぬが、「マス(ル)」の二元説

を唱へられたは未だ聞かぬ故、足らぬ自分の考察を發表して、大方の是正を請ふ次第である。(四、四、三〇稿)

六 「まらする」と「ます」と「申す」より來たとする説

吉澤義則博士は「國語史概説」(一八九頁—二〇三頁)に於て、「參らす」が「まらする」になり「まつす」になり「ます」になる徑路を、「おます」が「おまらする」になることに比べて説明し、更に「あり」の意味の文語の敬語動詞「ます」から主語尊敬の「します」「さします」に移り、更にこれが謙讓語の「ます」に變ることを(主語尊敬の「ござる」が謙讓語に變つた例に比べて)説明し、更に「申す」と「ます」との関係を探り、最後に次の如く結論を下してをられる。

要するに、現在の謙讓語の「ます」は、「參らす」から出た「まらする」の變つたものであることは疑ひないけれど、果してその一元に歸せしめうるかどうかは疑問である。そこには文語の「ます」の血、「申す」の血も融け合つてゐると見るべきではあるまいかと思はれる。一元に歸せしめないのは生ぬるいやうではあるが、事實は上述の如くで、簡單には定められないものやうである。(同書二〇三頁)

本講もこの説に従ひたいと思ふ。

なほ口語の鄭重の助動詞として「ございます」をあげる人もあるが、これは「ござる」といふ動詞に「ます」のついで出來たもので、その中の「ます」だけが助動詞であることは、次の例の副修語のかり所に就いて考へれば分るであらう。(かういふ用法の「ございます」は補助動詞といふべきであらう。)

今日は大變お寒う御座います。(口)

第十五節 口語の時の助動詞

時の助動詞の本義については文語のその條下で述べた通りである。ここでは口語の過去の助動詞・未來の助動詞・完了の助動詞の三つに就いて述べることにする。

一過去の助動詞

過去の助動詞の本義に就いても文語のその條下で述べておいた。すべてそれに準じて考へる。文語の過去の助動詞には「き」と「けり」との二語があつたが、口語の過去の助動詞には「た」の一語があるばかりである。

	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形	連	續
た	たら	たり	た	た	たら	○	動詞・形容動詞の連用形	

歐洲から去年の暮に歸つて来た。(口)

私が軍人だつたら、そんなことはしなかつたらう。(口)

私がよく調べて見たら(ば)、そんなことは書いてなかつた。(口)

昨日の遠足では山へ登つたり、川を越えたりした。(口)

この間頼んでおいた品物がやつと昨日届いた。(口)

連用形の「たり」は同様の事柄を列擧する時に用ひられる。この場合は助動詞でなくて助詞に轉化してゐると見ることが出来る。「たら」には未然形と假定形とがあるから識別を誤らないやうにする必要がある。

時の助動詞の「た」は、文語の完了の助動詞の「たり」から變じて来たものであるが、これが文献に現れて来たのは院政時代のものに見られると言はれてゐる。保延頃の歌人藤原爲忠朝臣の歌(歸雁)に
時きぬとふる里さしてかへる雁こぞきた道へまた向ふなり。

とあつて、「来た」と「北」とがいひかけてある。

誰ソト問ハハ鳥羽ヨリ女房ヲ只今打入テ敏シ奉リタトハ何事ソト云。(延慶本平家物語)

木曾、意得ズトテ、ナマリ音ニテ、何、猫ノキタ、猫トハ何ゾ、鼠トル猫カ。(源平盛衰記、三十三)

院政から鎌倉時代にかけて口語に用ひられ、室町以後盛んに用ひられ、現代では全盛を極めてゐる。

なほ、關東あたりで標準語ではないが、方言的に追想をあらはす時に用ひられる「け」といふ語がある。

そんなことがあつたけ。(口)

去年あそこへ行つて見たけ。(口)

さつだけ。(口)

この「け」は恐らく文語の助動詞の「けり」から来たものであらう。これは「た」もしくは「だ」の連用形に附いて「たつけ」「だつけ」の形となつて使はれるだけで、終止形以外の用法はない。

「た」が四段活用の動詞に連る時は、音便によつて「だ」となることがある。「死んだ」「研いだ」「飛んだ」「讀んだ」の如きはその例である。

二未來の助動詞

未來の助動詞の本義も文語のその條下に述べた通りである。文語の未來の助動詞は「む」一語であつたが、口語の未來の助動詞は「う」「よう」の二語である。「う」は四段活用の動詞の未然形に連り、「よう」は四段活用以外の動詞の未然形に連る。活用形は終止形と連體形としかない。且つ、連體形は特殊な語にしか連らない。

「う」は文語の「む」(mu)が子音mを落して出来たものであらう。而して「よう」はこの「う」と上の動詞の語尾との連続による發音變化の關係に依つて生じたものであらう。即ち、古くは四段活用以外の動詞にも「う」が連

つたのである。「見う」「忘れう」「爲う」「來う」と云つたのである。これが「見よう」「忘れよう」「爲よう」「來よう」となるに就いては次のやうに言はれてゐる。

動詞の未來をあらはす形は、現在では *Ikô* (行かう) *Yomô* (讀まう) の類と *Miyô* (見よう) *Suteyô* (捨てよう) の類と二種になつてゐるが、………のいひあらはし方は、元來、動詞の未然形に助動詞「む」の結びついたものであつて、子音の *M* が落さず *Ikamu, Yomamu* が *Iku, Yomu* となり、その *au* の二母音が聲化して *o* となり *Mimu, Suteanu* が *Miu, Suteu* となり、その *n eu* が *yû yô* となつて *Miyô Sutyô* と發音され、*Sutyô* が、その語幹の *e* の復活によつて *Suteyô* となり、さういふ類の類推から *Miyô* の類も *Miyô* となつた………(安藤正次氏著「國語學通考」二九頁—三〇頁)

語史的にいへば、院政時代に「う」の發生があり、更に「閑吟集」には「爲う」「爲よう」の二様の記載があつてオ列拗長音になつてゐることを示し、又天草本の「平家物語」や「伊曾保物語」には「見よう」「亡びよう」が *meo, forobeô* とあつて「よう」の獨立に近いといふことが知れる。抄物にもすでに「よう」の假名書が見られるのである。「トナヨウ」「アタヨウ」等この「よう」が獨立して、動詞の未然形につけられるに至つたのである。

(唱)

(與)

明日は天氣になるだらう。(口)

來月の初には父も歸つて來よう。(口)

右の「う」「よう」は未來の時に關係すると同時に、推量の意味も含んでゐることに注意しなければならぬ。

次回には必ず合格しようと思ふ。(口)

私は斷然斷らう。(口)

右の「う」「よう」は決意を表してゐる。

あの人はおとなしい人だらう。(口)

この書物の内容は素人にでも理解されよう。(口)

右の「う」「よう」は推量の意味を表してゐる。従つて、かういふ用法の「う」「よう」を推量の助動詞の中に入れて説く人もある。

そんな馬鹿なことが有らう筈がない。(口)

説明しようにも説明のしやうがない。(口)

そんなことしようものならひどく叱られるよ。(口)

右の「う」「よう」は連體形である。意味は一種の設想である。

三 完了の助動詞

完了の助動詞の本義に就いても文語のその條下で述べておいた。こゝでも**完了態**と**進行態**(繼續態)と**存在態**とに分けて考へよう。

(一) 完了態

ある動作が既に完了し、事實となつたことを示すもので、時の區別には依らない。これには「た」といふ語を用ひる。前に過去の助動詞として述べた「た」と同じ語で、勿論文語の完了の「たり」の變つたものである。

咲いた、咲いた、櫻が咲いた。(口)

汽車が今停車場に到着した。(口)

月がまるくなつた日が十五日です。(口)

風が吹いたら、倒れるかも知れない。(口)

あつた、あつた、探してゐる物があつた。(口)

頼まれた事は果さなければならぬ。(口)

旅行に出た時には衛生の注意が肝要である。(口)

右の諸例は、時からいへば現在も未来も過去もあり、又、全く時に關係しないものもあるが、孰れにしろ、動作が實際に行はれて、事實となつたことを述べる點に於ては同じである。「たら」といふ語形なども決して單なる假定ではなく、實際にその事が事實となつて現出した時のことを豫想して言つたものである。「風が吹いたら」「風が吹けば」との差異をよく識別しなければならぬ。「もしさうだつたら大變だ」といふ例に就いて橋本博士は「新日本文典別記上級用」(三六八頁)で、「これは『さうだ』といふ事を事實と假定して、それを條件として、その場合には『大變だ』といふのです。事實であると假定するのですから、即ち實現せられる意味を含み、従つて完了の『た』の意味は無くなつたものではありません。」と言つてをられる。

なほ「た」を用ひて十分に意をつくす事が出来ない時には、「てしまふ」といふ連語を用ひることがある。

砂糖は水にすぐ溶けてしまふ。(口)

さつさと仕事を片づけてしまへ。(口)

向うへ着く頃には病氣もなほつてしまはう。(口)

この本はみんな読んでしまつた。(口)

この「てしまふ」は「て」と「しまふ」の間に「は」とか「も」とかの助詞を介在せしめる事が出来るから、助詞と動詞との二語に見るべきもので「しまふ」は所謂補助動詞といふべきものである。しかし、東京の俗語では「てしまふ」を「ちまふ」「ちやふ」、「てしまつた」を「ちまつた」「ちやつた」といふ所を見ると、二語の融合性の強い一面もあつて、二品詞と見るより一品詞の助動詞と見たい點もないではない。準助動詞とでもいひたい

氣がする。本講では、とにかく、助詞と動詞(補助動詞)の二單語と見ておかう。

(二) 進行態(繼續態)

ある動作が繼續して行はれてゐることを示す助動詞は口語にはないので「てゐる」「てゐる」を代りに用ひる。助詞「て」に動詞「ゐる」又は「をる」を加へたもので、「ゐる」「をる」は所謂補助動詞といはれる用法に立つてゐるのである。

今盛んに雪が降つてゐる。(口)

その頃私は東京へ旅行してゐた。(口)

あの二人はいつでも喧嘩をしてゐる。(口)

右の「てゐる」「てをる」を「てる」「とる」「でる」「どる」といふ地方があり、「雪が降りよる」「雪が降つちよる」といふ地方もある。勿論方言である。「雪が降つてます」「私は散歩してます」などいふいひ方も、正しくは、「雪が降つてゐます」「私は散歩してゐます」といふべきであらう。

(三) 存在態

ある動作の存在してゐることを示す助動詞である。口語では「た」の連體形のみを之に用ひるのである。

壁にかけた地圖 親に似た子供 心のへつた鉛筆 よく熟した柿 海に臨んだ旅館

この場合にも補助動詞「ゐる」「をる」「ある」を助詞「て」に連ねて用ひる事がある。

庭には一面に花が咲いてゐる。(口)(尤もこの例は進行態とも考へられる。)

晴れた空には太陽が出てゐる。(口)

机の上には本が置いてある。(口)

學校の門は毎朝六時から開いてゐる。(口)
 右の「てある」は、他動詞の所謂客語が主語のやうに用ひられた時に使ふので、「本を置く」の「置く」を存在態にして「置いてある」とすると、自動性となつて、これまでの客語「本」は主語となつて「本が置いてある」となるのである。この時「本を置いてある」といへば自他が混同して誤りとなる。「てある」を「たる」といふのは大阪地方の方言である。

第十六節 口語の推量の助動詞

未來の助動詞の條下で述べた「う」と「よう」が推量の意を表すことはその條下で説明した通りであるから、ここでは「う」と「よう」を推量の助動詞の中には數へない。口語の推量の助動詞は「らし」「だらう」「てせう」「さうだ」「さうです」「さうだ」「さうです」の七語である。

「らし」

文語の推量の助動詞「らし」から來たものである。ある客觀的の根據によつて推量する意味を表す。この點は前述の「う」「よう」が推量を表す場合と異なる點である。活用と連續は次表の通りである。

	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形	連	續
らしい	○	らしく	らしい	らしい	○	○	體言及び用言・助動詞の終止形	

明日は雨が降るらしく思はれる。(口)
 やがて櫻も咲くらしい。(口)

何も知らないらしい風を装つてゐる。(口)

連用形が副詞形として用ひられることは形容詞と同様である。又「らしく」が音便で「らしう」となることも形容詞と同様である。「らしい」に他の助動詞を連ねようとする時には、「らしく」を「あり」と熟合させて「らしかり」としてつけるのであるが、それも「た」といふ助動詞以外は連らないから、口語では「らしかり」の他の活用形はない。

あの人は何處かへ出かけるらしかつた。(口)

「らしい」の假定形に「らしけれ」といふのがありさうだが、それはない。文法家によつては「らしいけれ」といふ假定形を設けて、

まだその事を知らないらしいけれど。(口)

の例をあげてゐる人もあるが、これは「らしい」といふ終止形に「けれど」といふ接續助詞が連つてゐるので、一つの活用形とは見られない。

又、この推量の助動詞は體言並びに形容動詞(所謂ナリ活)の語幹及び助詞「の」について「……………と見える」「……………の如く思はれる」といふ意味を表すことがある。これは「男らしい」「女らしい」「軍人らしい」といふ形容詞をつくる接尾語の「らしい」から類推したものであらうか。

あの人は英國人らしい。(口)

明日は雨天らしい。(口)

この時計はあの人のらしい。(口)

海上は極く平穩らしい。(口)

この用法にたつてゐる「らしい」と形容詞の語尾の「らしい」とを混同しないやうにする必要がある。助動詞の「らしい」は上の語と「らしい」との間に意味を變へないで「である」といふ語を挿入することが出来る。

あの人は英國人であるらしい。(口)

明日は雨天であるらしい。(口)

併し、形容詞の場合であると「男らしい」と「男であるらしい」とは意味がちがつて來るのである。又、形容詞は性質を示すのであるから、その點でも區別が出来るのである。

この體言等につく「らしい」の用法を叙述作用を與へるものとして、最初にのべた活用言につく用法と區別する人がある。これは如何にも理由のあることで、動詞以外のものに連るといふ點に於て、指定の助動詞や比況の助動詞とは一致するけれども、他の助動詞とは全くその性質を異にするのである。この點、文語の推量の助動詞「らし」は動詞以外のものにはつかないものであるから問題にはならないが、口語の「らしい」には體言や助詞につく性質があるのであるから、同じ範疇で律する譯には行かない。從動詞といふ名稱をつける人があるのもそのためであらう。本講では指定の助動詞や比況の助動詞と共に特殊助動詞として置かうと思ふ。

〔二〕だらう、でせう

前者は指定の助動詞「だ」の未然形「だら」に推量の助動詞「う」の附いて出來たもの、後者も同じく指定の助動詞「です」の未然形「でせ」に推量の助動詞「う」の附いて出來たものである。共に「う」「よう」と同様の場合に使はれるが、「う」「よう」は形容詞に連らなかつたのに反してこれは形容詞にも連るところが違ふ。活用形は終止形だけしかなく、動詞・形容詞の終止形に連る。

明日は雨も上るだらう。(口)

あんなに走つては苦しいだらう。(口)

あの人はきつと大仕事をなしとげるでせう。(口)

一時に花が咲けばさぞ美しいでせう。(口)

「だらう」に比して「でせう」は丁寧な言ひ方である。更に丁寧に言はうとする時には「でございませう」を用ひる。この「だらう」「でせう」を獨立した推量の助動詞と見ないで、純粹の指定の助動詞「だ」「です」が本來の意味で使はれてゐるので、その下に附いてゐる「う」だけを推量の助動詞であると論ずる人もある。併しこの兩者の間には連續關係に相違がある。即ち指定の助動詞の未然形は體言若しくは用言に助詞の「の」の添うたものに連續するが、推量の助動詞になつてしまつてゐる「だらう」「でせう」は直接に用言に連續するのである。(尤も前述の「らしい」が體言や助詞に連つてゐても助動詞と認められるのであるならば、この「だらう」「でせう」も特殊助動詞と認めてもよいが、併し指定の助動詞といふ獨立の助動詞があるのだから、それと共通のものはその中に含めなければならぬ)

これは歴史の本だらう。(口)

明日は晴天でせう。(口)

あの人はもう歸るのでせう。(口)

何て美しいのでせう。(口)

なほ次の諸例中の「だらう」「でせう」は形容詞の語尾の「だら」「でせ」に推量の助動詞の「う」の附いたものであるから、一つの「だらう」「でせう」と考へることは出来ない。

奈良は 靜かだらう。 (口)
形容動詞 推量助動詞

明日の海上は大體 穩かでせう。 (口)
形容動詞 推量助動詞

右の「だらう」「でせう」に對して「であらう」も一語の推量の助動詞と見られさうであるが、これは「で」の下に「は」又は「も」の如き助詞を介在せしめる事が出来るので「ある」は所謂補助助動詞と見るべきものである。

三) さうだ、さうです

この語は「さう」といふ語に「だ」「です」といふ指定の助動詞のついたやうに見えるが、成立並びに「さう」の語源は分らない。これは「様」の音便であらうといふ説があり、又「相」から來たのであらうといふ説もあるがはつきり分らない。松下大三郎氏は「標準日本語法」(一九一頁—一九四頁)の中で次の様に言つてをられる。

「さう」は「べき」の意である。「様」の意でない。「降りさうだ」は「降るべき」の意である。「降る様だ」の意ではない。「さう」を「相」と書くのは當字である。「さう」を「様」の音便と思ふのは誤であらう。私は「さう」は「さ」の音便であらうと思ふ。形容詞の語幹へ附くものに「さ」「み」「げ」「ら」などが有る。「清さ」「清み」「清げ」「清ら」などとなる。皆さうある様子を表すのであるが、その中「げ」は當然の意を持つ。「心有りげなり」「いと清げに見ゆ」などは皆口語の「さう」の意である。又古く「がに」と云つたのは此の「げ」が「が」に轉じたものであつて意味はやはり「さう」の意である。「雁かね寒し霜も置きぬがに」(高葉)は「……置きさうに」である。然らば口語の「さう」は「げ」の兄弟なる「さ」の音便であらうと思ふ。

併し右の説は此の所謂當然の助動詞の條下に於ける「さう」の語源論で、氏は不確の助動詞(こ)でいふ推量の助動詞のこと)といふものを設けその中にも「さう」を説いてをられる。不確の「さう」には大體から云つて推量と他説との二つが有る。文語の「死にけむ」「死ぬらむ」などは推量で、口語の「死ん

ださうだ」「善いさうだ」などは他説である。他説とは他人の所説であつて自分はよく知らないといふ意である。

「さう」は前の當然の「さう」と同様の語であるが意味のぐはひと用法が違ふ。

〔當然〕

〔不確〕

死にさうだ——動詞性活用の第二段へ附く。 死ぬさうだ
違さうだ——形容詞性活用の語幹へ附く。 違いさうだ
立派さうだ——無活用の語へ附く。 立派ださうだ

第四段活へ附く。

「不確」の「さう」には活用が無い。活用が無くても助動詞である。助動詞とは叙述性の有る助動詞である。大抵活用が有るが「さう」一つ活用がない。「さう」は無活用で形容詞であるから無活用の形容詞と同様下へ「だ」「です」などが附く。

併し、氏は當然の「さう」の活用・連續に就いては次の如く言つてをられる。

「さう」は無活用でなくて活用の第二段である理由は「居りさうも無い」「來さうも見えない」などの如く「べく」と同様な用法が有るからである。しかし「さう」は無活用化されて下へ「に」「な」「だ」「です」が付き、

居りさうに見える。 居りさうな人。
居りさうだ。 居りさうです。

などの如くも用ゐられる。

「さう」は動作性活用の語へは第二段へ附く。「居りさう」「行きさう」「深さう」「浅さう」「苦しさう」「烈しさう」など。但し「善し」「無し」の二つは語幹が一音であるために、「善さう」「無さう」とならず「善ささう」「無ささう」となる。しかし「書き善し」「言ひ善し」などの熟語ならば、「書き善ささう」「書き善ささう」と兩方言へる又助動詞の「ない」ならば「居なさう」「知らなさう」などいふ。又無活用の形容詞へ附く。「丈夫さう」「立派さう」「静さう」など。

語原論はとにかく、「さうだ」「さうです」の實際に使はれてゐる有様を見ると次の四種に分れてゐるやうに思はれ

3。
1 動作や状態が「……する様に思はれる。」といふ意味を示すもので、或る動作や状態が或る他の動作や状態に移りかゝつてゐる様に思はれることを示すものである。純粹の推量の助動詞に近い用法である。

明日は雨が降りさうだ。(口)

大暴風がやつて来さうだ。(口)

運動會も早くすみさうです。(口)

今にも雨が落ちさうです。(口)

この種類に屬するものは動詞の連用形に連続する。

2 動作や状態が「……であるといふことだ。」といふ意味を示すもので、所謂他説とか傳聞とか言ふべきものである。説者が直接にその動作や状態を見聞したのでなく、他人を通じて知つたことを示すのである。純粹の推量の助動詞よりはやく離れた用法である。

支那では又戦争があるさうだ。(口)

紀州は大變濫いさうだ。(口)

田邊には世界的の植物學者が居るさうだ。(口)

長谷の牡丹は美しいさうです。(口)

彼は何も知らないさうだ。(口)

この種類に屬するものは動詞・形容詞・助動詞の連體形に連続する。

3 形容詞の語幹に連続して「……の様な状態である。」といふことを示すものである。これは推量の助動詞といふよりも一種の形容動詞を作る接尾語として「さうだ」「さうです」が用ひられてゐると見るべきではあるまいか。

あの池は深さうだ。(口)

暑さは随分烈しさうだ。(口)

この川は浅さうです。(口)

病人は非常に苦しさうです。(口)

この「さうだ」「さうです」が「善い」「無い」といふ形容詞に連る時には、語幹が一音であるために、語幹と

「さうだ」「さうです」との間に「さ」といふ意味のない語が挟まる。

あの人の性質は善ささうだ。(口)

何の心配も無ささうだ。(口)

あすの天気も良ささうです。(口)

風も無ささうです。(口)

「狂言記」「抄物」に既にこの用法は見えてゐる。しかし同じ「抄物」の中には「き」を入れない例も見えてゐる。

心よさう 願ふ事も無さう

今日ではこの「さ」を入れずには使はない。序であるが、打消の助動詞の「ない」にはその語根の「な」から連続して、

出来なさうだ

つまらなさうだ

勝てなさうだ

となるべきを、

出来なきさうだ つまらなきさうだ

といふことがあるのは、形容詞の「良きさうだ」「無きさうだ」に釣り込まれたのである。又、

穢なきさうだ 危なきさうだ

の「な」は「穢ない」「危ない」の語根で「無い」(形容詞)「ない」(助動詞)の意味も無いのに、

穢なきさうだ 危なきさうだ

などといふのは類推から来た誤であらう。

4 體言に「さう」の附いた例が「抄物」に見えるけれども現代では全く使はない。

一月二月後の事さうなぞ

まことさうなこと

右の四種の中2の他説・傳聞と言はれる「さうだ」「さうです」は終止形以外の活用形は無い様に思ふ。又4の體言に附いた例は餘り多くないのだから論外とする。而して1と3との「さうだ」「さうです」を見れば活用は次の如くである。

		未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形	連續
さうだ	さうなら	さうだつ	さうで(中止形) さうに(副詞形)	さうだ	さうな	さうなれ さうなら	○	動詞の連用形 形容詞の語幹
さうです	さうなら	さうでせ	さうでし さうで(中止形) さうに(副詞形)	さうです	さうな	さうなれ さうなら	○	

その用ひられ方を例示してみると次の通りである。

明日は雨が降りさうだらう。(口)

大暴風がやつて來さうでせう。(口)

雨が降りさうならば止めよう。(口)

雨が止みさうならば出かけませう。(口)

家を出る時は雨が降りさうだった。(口)

あの人は今にも泣き出しさうでした。(口)

明日は雨が降りさうに思はれる。(口)

嬉しさうに笑つてゐます。(口)

雨の降りさうな空模様だ。(口)

嬉しさうな顔付をしてゐる。(口)

雨が降りさうなれば出かけるのは止めよう。(口)

あまり距離が遠さうなれば電車で行かう。(口)

むつかしさうなら讀まずにおかう。(口)

以上述べた1と3の二種類のうち、3は前述の如く形容詞の語幹と「さうだ」「さうです」が熟合して一種の形容動詞を作つてゐると見るべきで、推量の助動詞とは見ない方がよからうと思ふ。それにしてもその1が形容動詞の語尾變化と同じ活用をするといふ點は注意すべき點である。

(四) やうだ、やうです

この語も大體は「さうだ」「さうです」に似てゐる。即ち「……の如く思はれる」「……の様な状態である」「……らしい」といふ意味を表してゐる點に於て推量の助動詞とするのである。

北國ではもう雪が降つたやうだ。(口)

不景氣はだん／＼深刻になるやうです。(口)

道程は大變遠いやうだ。(口)

臺灣の夏は比較的凌ぎ易いやうです。(口)

この語も「やう」といふ語に「だ」「です」といふ指定の助動詞が附いて出來た様に見えるが、成立の程は分らない。「やう」は「様」の音から來たものであらう。比況の助動詞の「やうだ」「やうです」と同じ語尾變化であるが、連續に多少違ひがあるから混同してはならない。

この「やう」を體言と見、「だ」「です」を助動詞とみて「やうだ」「やうです」を活用連語とする説もあるが、「やう」といふ體言は「が」「の」「を」などいふ助詞を伴ふことは出來ず、單獨で主語となることも出來ないのであるから、「やうだ」「やうです」を助動詞と見ておきたいと思ふ。

活用は「さうだ」「さうです」と同様で、形容動詞型である。連續は活用言の連體形である。

	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形	連續
やうだ	やうだら	やうだつ	やうだ	やうな	やうなれ	○	動詞・形容詞・助
	やうなら	やうに(副詞形)					

	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形	連續
やうです	やうでせ	やうでし	やうです	やうな	やうなれ	○	動詞の連體形
	やうなら	やうに(副詞形)					

第十七節 口語の希望の加動詞

口語の希望の助動詞は文語の希望の助動詞「たし」から來た「たい」とその變化した「たがる」の二語である。「たい」の活用と連續は次表の通りである。形容詞型の活用である。

	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形	連續
たい	たく	たく	たい	たい	たけれ	○	動詞の連用形

行きたくば行くがよい。(口)

私はそんなに行きたくない。(口)

早く行つて早く歸りたい。(口)

彼も行きたいに相違ない。(口)

行きたければ行くがよい。(口)

行きたければこそ行つたのである。(口)「たいから」「たいによつて」の意で已然形といふべきものである。

連用形「たく」は形容詞と同様副詞形として使はれるのである。「たく」は又音便で「たう」となる。連用形「たく」は、動詞「ある」に過去の助動詞「た」の結びついた「あつた」と熟合して「たかつた」となる。「たかつ」と

いふ語には活用はないので、

君も行きたかつたらう。(口)

私も行きたかつた。(口)

行きたかつた事に變りはない。(口)

行きたかつたら行けばよかつたのに。(口)

の「たら」「た」「たたら」はそれ／＼過去の助動詞「た」の未然形・終止形・假定形であつて、「たかつ」の活用形ではない。又この連用形「たく」が接續助詞「て」に連る時には促音になつて「たくつて」となる。東京地方の語に多い。

「たい」の語根の「た」を用ひて次の如くに言ふことがある。

泣きたや 遊びたや 見たや (「や」は助詞)

歸りたさ 寝たさ 遊びたさ (「さ」は接尾語)

行きたげ 物言ひたげ 歸りたげ (「げ」は接尾語)

行きたさうに 物言ひたさうに 歸りたさうに (「さうに」は助動詞の副詞形)

食ひたがる 買ひたがる 取りたがる (「がる」は接尾語)

右の例に見える「たがる」はラ行四段に活用して、動詞の連用形につく。他が希望する意味を表すので希望の助動詞と見てよい。「たい」の語幹「た」に接尾語「がる」がついて出來た語である。

彼はちつとも人に逢ひたがらない。(口)

老人になると人に逢ひたがります。(口)

あまり行きたがるものだから連れて行つてやつた。(口)
歸りたがれば歸らせてやるがよい。(口)

第十八節 口語の比況の助動詞

文語の比況の助動詞「ごとし」に當る口語の比況の助動詞はない。しかし「やうだ」「やうです」といふ二語は文語の「ごとし」と同じ用法に立つのでこれを口語の比況の助動詞とする。前述の推量の助動詞としてあげた「やうだ」「やうです」と同形である。これを體言「様」に指定の助動詞「だ」「です」のついた活用連語とする説があるが、本講ではこれを一語の比況の助動詞とする。併し、文語のその條下で述べた説をそのままではめればこれは種々の品詞として考へることも出來る譯である。

落花はまるで雪のやうだ。(口)

菜の花はちやうど毛氈を敷いたやうです。(口)

右の文に於ける副詞的修飾語「まるで」「ちやうど」が何を修飾してゐるかといふことを考へるならば、少くとも、「やうだ」「やうです」を形式用言と見なければならぬ譯であらう。「やうだ」「やうです」が實質用言と言へない點は、

落花は雪のまるでやうだ。(口)

菜の花は毛氈を敷いたちやうどやうです。(口)

といふ文が成立しないことも分る。とにかく他の助動詞(指定の助動詞及び推量の「らしい」を除けば)に比して親念的であることは争はれない事實である。これも特殊助動詞と認むべきものであると思ふ。

活用と連続は次表の通りである。

	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形	連続
やうだ	やうだら やうなら	やうだつ やうで(中止形) やうに(副詞形)	やうだ	やうな	やうなれ やうなら	○	動詞・形容詞・の連體形及び助詞「の」を隔てて體言。
やうです	やうでせ やうなら	やうでし やうで(中止形) やうに(副詞形)	やうです	やうな	やうなれ やうなら	○	

人生は夢のやうだらう。(口)

人生が夢のやうならば何といふ頼りないものでせう。(口)

海上はまるで鏡のやうだつた。(口)

辯舌は立板に水を流すやうで、身振は俳優のやうだ。(口)

お月様は盆のやうに見えます。(口)

あの人の聲は獅子の吼えるやうな聲だ。(口)

顔が花のやうなれば眉は三月のやうだと言はう。(口)

九州及び中國では「ごと」といふ語を用ひる。これは文語の「如し」が轉じたものであらう。

花のごとある。

花のごとたる。「花のごとくある。」の約であらう)

雪のごつ白か。(雪の如く白い。)といふ意)

湯澤幸吉郎氏の「室町時代の言語研究」には次の如く記されてゐる。

「ヨウ」は、歴史的假名遣では「ヤウ」と表記される「様」の字音である。もと／＼「サマ」を意味する名詞であるが、これに「ナ」「ニ」がついて、「如シ」とほとんど同様に用ひられる。元來「如シ」は、古くから普通に用ひられて居たが、時代が経つに従つて、次第にその勢力を失ひ、現代口語においては、特殊な場合の外、ほとんど、その姿を現さない様になつてしまつたのである。しかして、これに取つて代つたものは、こゝに述べようとする「ヨウ」である。「ヨウ」のこの言方は、勿論、正確にその年代を究むべき性質の事ではないが、鎌倉期に入つてから、急に目立つ様になり、足利時代に至ると、書寫の文は別として實際の對話では「如し」に對して、歴史的勢力を有して居たかに見える。その用法は「如シ」と擇ぶ所がない様である。(三六九頁―三七〇頁) 而して多くの場合「ナ」「ニ」等の助を假りなければ用ひられぬとすれば、これをそれ等から切離して一の助動詞と見るは如何にやと思はれるが、しばらく、文語例に従つて取扱つたのである。(一五四頁)

「様」の下についてゐる「に」「な」は決して「様」から切りはなさるべきものではない。「に」「な」はついたものを見るべきはなく、「やうだ」「やうです」の語尾であることは、形容動詞の語尾に照し合はせても了解出来るであらう。

第十九節 口語の指定の助動詞

助動詞を分けて普通二つとしてゐる。その一は動詞についてその叙述性を補助けるものであり、その二はそれだけでは普通叙述の力が無いとされてゐる體言等について、それに叙述性を加へるものである。後者に屬するものは指定の助動詞・比況の助動詞及び口語の推量の助動詞「らしい」である。前者はその他の助動詞である。

口語の指定の助動詞は「だ」「です」及び文語の「なり」の轉用されたもの三語である。而して指定の助動詞は

叙述性附與の助動詞であるから、叙述性の無い體言等について之に叙述性を附與することは勿論であるが、叙述性のある動詞についてその叙述に指定の意味を加へる場合もある。この第二の場合は助動詞本來の特性をもつてゐる譯であるが、第一の場合は所謂普通の助動詞と異なつてゐるので、これを形式用言とか不完全動詞とか從動詞とか名付けて助動詞より區別しようとする議論も起るのである。このことは既に述べた所である。本講ではこれも助動詞と認め、特殊助動詞としておかうと思ふ。

「だ」「です」「なり」の活用と連続は次表の通りである。

	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形	連續
だ	だら	だ <small>だつ</small> (中止形) 副詞形	だ	だ	○	○	體言・活用言の連體形に助詞「の」をつけたもの・或る助詞
です	でせ	で <small>でし</small> (中止形) 副詞形	です	です	○	○	
なり	なら	なり(中止形)	○	な	なら	○	

各活用形の體言につく用法は次の通りである。

それは本だらう。(口)

これが寶ならばどんなによからう。(口)

姉さんに貰つたのは何でしたか。(口)

これは梅の木で、あれは櫻の木だ。(口)

兄も兄なり弟も弟だ。(口)

これは本である。(口)

それはノートではありません。(口)

あれはノートです。(口)

この子は馬鹿ですもの、何をしでかすか分かりません。(口)「だ」「です」の連體形は一般の體言には連らない。

あの人は學者な管がない。(口)

あなたが醫者なら診て貰ひませうに。(口)

「だ」「です」が種々の助詞につくのは次の例の通りである。

恐ろしいのは地震と雷とだ。(口)

光のさすのは東方からです。(口)

たゞもう泣くばかりだ。(口)

開會は午後五時までです。(口)

あまり自分を信じすぎるからだ。(口)

行程は五里ぐらゐです。(口)

残りはいくらだけだ。(口)

「なり」の未然形「なら」及び假定形「なら」「なれ」は「だ」「です」の未然形及び假定形として用ひられることは勿論である。又「なり」の連體形「な」は次の様にも用ひられる。

そこへ来るのは誰なのか。(口)

あれは私の友達なんです。(口)

これは文語の指定の助動詞「なり」の連體形「なる」の「る」が省略せられて出来たものであらう。故に「な」は連體形としてのみ使はれるのである。但し、これも一般の體言には連らない。室町時代のものに、

いかさまどこやらで聞いたやうな。(口)

なんとこれは耳よりな。(口)

等とある「な」は指定の助動詞の「な」ではない。前者は「やうだ」といふ比況の助動詞の連體形であり、後者は「耳よりだ」といふ形容動詞の連體形で共に下に來る體言を省略した形である。

併し、抄物に、

梁ハ横ナ、柱ハ堅ナ、横ナモ堅ナモ、各共用ニタツト云ハ (莊子抄)

などある「な」は勿論指定の助動詞である。

又「おだやかな」「静かな」「立派な」「綺麗な」等の「な」を指定の助動詞の「な」だと思つてゐる人があるが、これは何れも形容動詞の連體形の語尾である。

又「なり」の連用形が次の如く用ひられてゐるのは指定の助動詞が助詞化してゐるのである。

思想なり感情なりの有無に因つて判断する。(口)

讀ませるなり書かせるなりしてみよう。(口)

「あれは誰だ。」「それは何だ。」は問ひかけの意となり、「これから行くのだ。」「さあ勉強するんだ。」などは命令の意味にも用ひられる。又「讀んだ」「飛んだ」は過去の助動詞「た」が濁音になつたものであるから指定の助動詞の「だ」と誤つてはならぬ。

「です」は「だ」に丁寧の意味の加はつたものである。「だ」及び「です」が活用言に連る時にはその連體形の下に助詞「の」を介して連るのが普通である。

あなたは何處へ行くのですか。(口)

僕はこれから散歩に出かけるの(ん)だ。(口)

君の考方が悪いのだ。(口)

あの人は何も知らないのですよ。(口)

右の「の」を「ん」と發音することがあるが、丁寧な言ひ方ではない。又「のだ」を一つの指定の助動詞と扱ふ人もあるが、本講ではとらない。

「なら」は、活用言との間に「の」を介在せしめないで連ることもある。(「の」を介しても勿論差支はない。)

君が行く(の)なら、私も行かう。(口)

道が悪い(の)なら、私は行かないでおかう。(口)

そんなに言はれる(の)なら、賛成しませう。(口)

但し、次の「だらう」「でせう」は、これを前にも述べたやうに一語の推量の助動詞と見る。(尤も、かう見ると、「だ」及び「です」には未然形が無いといふことにもなる。)

彼は中々歸らないだらう。(口)

仕事をしないで歸ると叱られるでせう。(口)

結果はよほどよいだらう。(口)

何故ならば、活用言の連體形に「だ」「です」をすぐ連ねる言ひ方は普通はしないからである。

君は何をするだ。(口)

僕は非常に苦しいです。(口)

子供のことは子供自身によく考へさせるだ。(口)

尤も右のやうな言ひ方に於て「です」の終止形は形容詞及び形容詞型の助動詞の連體形に限つて直接に連ることがある。(勿論この時も「の」を挿んでも差支はない。)併し、これは果して標準的な言ひ方であらうか。

あの本は大變むづかしいです。(口)

昨日の講演は中々面白かつたらしいです。(口)

私も一度行つて見たいですね。(口)

又、「です」は「ません」「ます」に「ぬ」の連つたもの(にも直接連る事が出来る。

まだ誰も来てゐませんでした。(口)

道はさう遠くはありませんでせう。(口)

又、連體形「な」は助詞「の」を介して下に「だ」「です」を連ねることがある。

それはたしかな事なのだ。(口)

あの人はあれで中々開けた人なのです。(口)

右の「なのだ」「なのです」は「なんだ」「なんです」となることがある。この時には「なんだ」「なんです」を一

語の指定の助動詞と見てよいといふ説もある。

「だ」といふ語の成立に就いては普通に「にて」の約まつた「で」に「ある」の連つた「である」の約まつたものと考へられてゐる。この「である」の用ひられ方を「だ」の用ひ方と比較してみると、

人生は極樂であるが、又地獄である。(口)

人生は極樂だが、又地獄だ。(口)

の如く、その意味に於て何の變りもない。即ち、「である」は完全に「だ」と置換することが出来るのである。而して、「だ」は完全に一語の指定の助動詞であるから、これによつて置換せられる「である」も完全な一語の助動詞といはなければならない。けれども、この「である」は次の例に於けることき用ひられ方をする。

人生は極樂でもあるが、又地獄でもある。(口)

人生は極樂ではあるが、地獄ではない。(口)

即ち、「で」と「ある」とは中に「も」又は「は」といふ助詞を介在せしめることが出来るのである。これでみれば「で」と「ある」との結合は不十分である。結合の不十分な語はこれを二語と扱はなければならぬ。故に「で」と「ある」とは二語と見なければならぬ。かく、「で」と「ある」とを二語とすれば「で」と「ある」との語性は何かといふ問題が残る。さうすればまづ「ある」は當然動詞と見なければならぬ。動詞ならば存在を表す動詞でなければならぬ。ところが、この「ある」は事物の存在を表してゐない。何故ならば、

人生には極樂がある。(口)

人生は極樂である。(口)

との二文に於て、前者の「ある」は存在の意味を表す動詞であるから、

人生には極樂が本當にある。(人生には本當に極樂がある。)

といふことが出来る。しかし、後者の「ある」は存在の意味を表す動詞でないから、

人生は極樂で本當にある。(口)

とはいへないのである。即ち、この「ある」は存在の意味を失つて餘程形式語に近くなつてゐるのである。故にこの「ある」を補助動詞といふのである。これはあたかも、

これは本ではない。(口)

の「ない」が形式形容詞となつてゐるために、補助形容詞といはれるのと同様である。且つ、「である」が一語の助動詞といはれないことも「でない」が一語の不定の助動詞と言はれないのと同様である。

次に、「である」の「て」は助詞と見る説もあるが、

鉛筆を小刀で削る。(口)

彼は東京で活躍してゐる。(口)

の「で」が格助詞であるのとは趣を異にしてゐると思ふ。従つて、これを助詞とみないで、指定の助動詞「だ」の副詞形と見てはどうであらうか。

これは梅の木で、あれは櫻の木だ。(口)

こちらの山で、あちらの川です。(口)

右の「で」は勿論指定の助動詞「だ」の中止形である。従つて助詞の「で」とはみられない。これと同じく「である」の「で」もこの「で」が副詞形として用ひられたものと見てはどうであらうか。「でございます」の「で」「も」同様である。

語史からいふと「である」は天草本にも抄物にも見え、ロードリグズの語典にも「であ」の説明があり、室町時代では「だ」と「ぢや」が混用されてゐる。併し、「だ」と「ぢや」は關東と關西の對立形である。この「ぢや」は更に「や」となつて現在も關西地方では「それは何や」「これは本や」「そや、そや」等と用ひられてゐる。

さてこれこそ宮の御首であると定められた。(天草本平家物語)

我ト罪過ヲ招タモノテアラウソ。(勅規桃源抄)

父母死デ三年ノ喪ハ通義チヤゾ。(史記抄)

大事ぢやる物。(閑吟集)

太僕ながら伯父や人の方へ使にしてくれ。(狂言記、素襖落)

「です」の語源は次の如くであるといふ説があるが一説である。

でございます↓でございます↓でございます↓でござんす↓でござんす↓でござんす↓でござんす↓でござんす↓でござんす↓でござんす↓でござんす↓でござんす↓でござんす↓
↓であす
↓えす↓です

なほ序ながら「です」に關する「口語法別記」(二九五頁―二九九頁) 中聞くべき説をあげておかう。

「です」は随分古くから、つかつて來た語のやうであるが、江戸では、もと藝人言葉で、輕薄な口調の「でげす」などと同じもので、明治以前は、咄家・太鼓持・女藝者・新吉原の茶屋女などに限つて用ひられて居たもので、その女が素人になつても「です言葉」が出て咄められて、困つたもので、町人でも身分のある者は、男女共に用ひなかつた。それが今のやうに遍く行はれるやうになつたのは、明治の初に田舎の武士が江戸へ出て、柳橋新橋あたりの女藝者などの言葉で聞いて、江戸の普通の言葉と思つて、眞似始めたからの事であらう。それであるから、餘り聲ばかりでない語ではあるが、今では、身分のある人々まで用ひられて、もはや止められぬ程の言葉となつた。

關西では推量に「ですやらう」「でしたやらう」と云ひ、又別に京都・丹波・滋賀縣あたりで「どす」「どすやらう」「どした」「どしたやらう」と云ひ、大阪・攝津・兵庫縣・奈良縣・山城の南部で「たす」「たすやらう」「だした」「だしたやらう」なども云ふけれども共に探らぬ。

京都の「どす」は文語の「にこおはします」が約まって、「でおます」となり、又「でおす」「どす」と約まったもので、大阪邊の「だす」は、それから又移つたものであらう。

「であります」は「です」より丁寧な言ひ様であるが、演説などの外には用ひられぬ。「でございます」は「であります」よりは又丁寧な場合に用ひるのである。

「であります」と云ふ語は江戸では言はなかつた。必ず「でございます」婦人は「でござんす」などと云つて居た。「であります」は、明治の初に諸國の田舎侍が江戸へ来て作つた語である。但し江戸の時でも「は」「も」を加へて「さうではありますか」「さうでもありませんか」などとは用ひてゐた。

江戸新吉原遊女詞 おざりいす ざいます ざます ざんす
東京で「さうなりました」「待ちまして」「十二時頃でございまして」「よう」仙臺で「さうすか」「左様でござりしてござりす」など云ふは「す」の一音になつたのである。

室町時代

遠國に隠れもない大名です。(狂言記、萩大名)

羽黒山より出でたる駈出しの山伏です。(同、柿山伏)

「です」の語源に就いては「であります」説、「でございます」説、「で、す」説、「でおわす」説、「で候」説等があつて、いまだ定説がない。(中村通夫氏「テスの語史について」(國語と國文學)昭和十一年三月號參照)

第二十節 口語の否定の助動詞

文語の否定の助動詞には「ず」「や」「じ」「まじ」の四語があつたが、口語では「ぬ」「ん」「ない」「まじ」の三語である。その活用と連続は次表の通りである。

	ぬ		未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形	連 續
	ぬ	○		(ず)	ぬ(ん)	ぬ(ん)	ぬ	○	
	ない	○		なく	ない	ない	なけれ	○	動詞・助動詞の未然形 四段活用の動詞の終止形 その他の動詞の未然形
	まい	○		○	まい	まい	○	○	

各活用形の用法は次の通りである。

顔もあげず泣いてゐた。(口)

思はず知らず吹き出した。(口)

何も知らずに威張つてゐる。(口)

酒のます、煙草ものまない。(口)

あの人は近頃物を言はなくなつた。(口)

支那には常に騒亂が絶えぬ。(ん)(口)

明日は雨が降るかも知れない。(口)

いや、決して雨は降るまい。(口)

分らぬ(ん)事は何でも尋ねるがよい。(口)

知らない事は知らないと言ふものだ。(口)

あの人ならそんな馬鹿な事をやるまいものでもない。(口)

大急ぎでやらねば追つ付かない。(口)

雨が降らなければ出かけます。(口)

〔ぬ〕

口語の「ぬ」といふ助動詞は文語の「ず」から来たものである。連用形に「ず」があつて今日も使はれてゐるのはそのためである。未然形の「ず」は徳川時代のものには次の如く用ひられてゐる。

恥をきよめずば本國へ歸るまい。(薩摩歌)

顔見る事が叶はずばこそなと聞いて死にたい。(苜蓿桑門)

この未然形の用法は今日の口語には無い。連用形の「ず」が使はれてゐるのを文語が口語に混用されてゐると説くのはどうであらう。前掲の表の如き口語の「ぬ」の活用を認めるがよいと思ふ。

「ぬ」の過去をあらはす言ひ方に「なんだ」といふのがあつて今も關西地方で使はれてゐる。この「だ」は過去の助動詞「た」が上のn音の影響によつて「だ」になつたものであることは「なんだれば」といふ用法が抄物に見えてゐることで分る。然らば「なん」は何であらうか。その正體が明瞭でない。「口語法別記」(二四三頁)には、

此「なんだ」わ、「ず」「ぬ」「ね」の系統のもので、東國の打消の「なく」「ない」「なけれ」の系統のものでわなからうが、どういふ語原であらうか。「聞かぬあつた」が約まつて、「聞かなつた」となり、又「聞かなんだ」と、未を變じたもいでもあらうか。四國邊で「言わすあつた」を「いわさつた」と云うと同例で、「あり」の「り」が「つ」とも「ん」ともなるわ、「しりはらひ」(後拂)「しりがひ」(後驅)の「しつばらひ」とも「しんがり」ともなるようなものであらう。

とある。新村出博士は「東亞語源志」(三四〇頁—三四七頁)中の「天平時代の國語」の章下で、「なんだ」といふ語は天平時代の東語に存した「なふ」から出たと假定し得べき活用形の助動詞で、足利時代の抄物に見える促まる音が撥ねる音に變る例に従つて、「なつた」から「なんだ」といふ風に變つたものらしく、關東系統の言葉が關西に

入つて来たものであらう、雅言「ず、ぬ、ね」の形からは説明が出来にくいと論じてをられる。又、「なん」は「ずあり」の古語「にあり」から轉じたもので「知らなんだ」は「知らにあつた」であるといふ説もある。

「なんだ」より前に「ナムシ」といふ形があつたとすれば、この問題に聯關して考へられるべき材料であらう。

一日ニ二度參スル日ハ候シカドモ不參ノ日ハ候ハナムシ(延慶本平家物語)

又「いで」といふ打消の中止法、副詞法に用ひられる形がある。動詞の未然形に連る。これもその成立に就いては確説がないが、「ず」が「て」に接した「すて」が「で」となるといふ現象があるので、この「で」が變化して「いで」となつたものであらうといはれてゐる。「口語法別記」(二四五頁)では次の如く言つてゐる。

文語に「見すして」受けすして「讀ますして」、口語に「受けぬで」、又わ「讀まないで」の意味を、西國で「見いで」「受けいで」「讀まいで」と云ふが、用いぬがよい。是れわ、「ぬ」の「い」と變つたものか、又わ、文語に「見すて」「受けすて」「讀ますて」を約めて、「見で」「受けで」「讀まで」とも云うのを延べたもので、西國で、「葉」を「はあ」と云い、「蚊」を「かあ」と云い、「火」を「ひい」、「目」を「めえ」、「酢」を「すう」と云うと同じ例であらうか、「秋す」を「しいす」と云い、「木の國」を「紀伊の國」と云い、新撰字鏡の四二に「鈎、知伊」、同、四六に「材、比伊」、類聚名義抄に「茅、チイ」「幅、ヤア」、本草和名、下、廿七に「衫躰子、世衣」、承暦年中抄の最勝王經音註に、「蚊、加阿」などと見える。

又「いで」は「に(不)て」が音便で變つたものだとする説もある。

「いで」の用例は院政時代・鎌倉時代・室町時代・徳川時代より現代までである。

このみこは、やうかるみこよ、かたびらに、しりをかゝいで、ゆゝしうつきうたる、これをみたまへ。(梁塵秘抄)

牡鹿二つ、いとよめて、牝鹿をば、射いでぞおとしける。(平家物語)

イトマゴヒヲモマウサイデ、マカリカヘラレ、(史記抄)
 勝手にせいで置かふか。(大經師昔曆)

湯澤幸吉郎氏の近刊「徳川言語の研究」(四九九頁—五〇〇頁)では、この「いで」が接續助詞の中に入れてある。

「ない」

「ない」がサ行變格活用の動詞に連る時には、二つある未然形の中の「し」に連つて「しなう」となる。同時に、今一つの未然形「せ」には「ぬ」(ん)が連つて「せぬ」(せん)となる。助動詞連續上の特例の一つである。

試験もすんだのもう勉強はせぬ。(口)

いたづらはしないでおきなさい。(口)

敬語の助動詞「ます」につく時は「ませぬ」(ません)と言つて「ませない」とはいはない。又、動詞の「ある」につく時も現代では「あらぬ」とはいはない。然るに「おあん物語」には、

首もこはいものではあらぬ。

とあり、近松の「心中宵庚申」にも、

急ぐ事はあらぬ。

といふ例がある。方言であらうか、變例であらうか。

形容詞「ない」の已然形に助詞の「ば」のついた「なければ」と、否定の助動詞「ない」の假定形「なければ」に

「ば」のついたものとは同形であるが混同してはならない。(形容詞)

こゝは大極殿の址だから何處かに礎石がなければならぬ。(助動詞)
 人は道を知らなければならぬ。(助動詞)

形容詞の「ない」と否定の助動詞の「ない」とは後にも述べるやうに混同してはならない。又、右の形容詞の「なければならぬ」を「なければならぬ」といふ人があるが、形容詞には打消の助動詞は連続しないのであるから誤である。又、所謂カリ活の形容動詞も、打消の助動詞のつく未然形は「無から」であつて「なけ」や「なけら」ではない。従つて「なければならぬ」も勿論誤である。(本講三〇四頁参照)

「ない」の連用形「なく」が助詞「て」に連る時には、

行かなく^てよかつた。(口) 聞えなく^て困つた。(口)

となるべき筈であるのに、東京語では之を促音にして、

行かなく^つてよかつた。(口) 聞えなく^つて困つた。(口)

といふ。「行かなくて」「聞えなくて」は「行かなくあつて」「聞えなくあつて」を略したものであらうとは「口語法別記」(二四九頁)の説である。

又、この「ない」の連用形「なく」が動詞「ある」の形式化したものと結びついて「なから(う)」「なかつ(た)」「な」となる。これは文語の「なからむ」「なかりき」に當るもので、文語では「なかり」は普通には所謂形容動詞としてゐるのであるから、口語でも同様に形容動詞に入れてはどうかといふ様にも一寸思はれるが、これは大きな誤である。「なく」と「ある」との結合形式は全く形容動詞の成立と同じであるが、文語の「なかり」は形容詞と動詞との結合であつて、出来上つた「なかり」は一つの觀念語である。しかるにこの「なから」「なかつ」は助動詞の「なく」と動詞の形式化した「ある」との結合であつて、出来上つたものは一つの形式語である。だから何處までも助動詞である。使はれ方は次例の通りである。

過去に悪い事をしておけば将来とてもよい事はなからう。(形容動詞)

この分ならば滅多に大事件は起らなからう。(助動詞)

何處を探しても本はなかつた。(形容動詞)

勿體ないと思つて反故も捨てなかつた。(助動詞)

あんな恐ろしい目にあつた事は嘗てなかつた。(形容動詞)

いくら考へても分らなかつた。(助動詞)

右の「捨てなかつた」「起らなかつた」「分らなかつた」を「捨てなかつた」「起らんかつた」「分らんかつた」など言ふのは正しくない。「**一體形容詞の「無く」とこの否定の助動詞「ない」との區別は往々混同され易いのである。**

あの川は深くない。(口)

私は一人でも淋しくない。(口)

郊外でも静かでない。(口)

右の文中の「ない」はすべて形容詞である。しかし、

私の懐中には金が一文もない。(口)

あの人は理性ばかりで感情がない。(口)

見渡す限り大海原で一物の目の遮るものもない。(口)

の文中の「ない」とは何處か同じ形容詞でも違つた點がある。つまり後者の「ない」は物が存在するといふことの反對である「ない」である。動詞「ある」の反對の「ない」である。觀念語の本義に即した「ない」である。然るに前者の「ない」は状態の否定を表す「ない」である。後者よりは餘程形式化した「ない」である。丁度さきに指

定の助動詞の所でのべた「である」の「ある」が、物の存在を表す動詞の「ある」よりは餘程形式化してゐるのと同じく、このないも形式化した「ない」である。「である」の否定を表す「ない」である。若し「である」が一つの助動詞といふことが出来るならば、「でない」も一つの助動詞といつてよい譯である。(實はさきに「である」を一つの助動詞と認めなかつた理由の中には「でない」といふ助動詞を認めて居らないといふ相對的の考もあつたのである。)従つてこの形式化された「ない」が本當の形式語である「ない」と一見紛れ易いのも無理はない。

奈良はそんなに寒くない。(形容詞)

私はその理由を知らない。(助動詞)

これは本でない。(形容詞)

家には誰も居ない。(助動詞)

之を要するに觀念語と形式語の對比に次の二者が立つ譯である。

觀念語

こゝに本がある。(動詞)

こゝに本がない。(形容詞)

形式語

これは本である。(形式化した動詞)

こゝは寒くない。(形式化した形容詞)

つまり助動詞の「ない」は指定の助動詞「だ」を否定した様なものである。前にも述べたやうにこの「ない」が補助形容詞といはれる所以はこゝにある。

形容詞の「ない」と助動詞の「ない」とは次で區別が出来る。

(一)形容詞の「ない」は決して動詞に連ることはない。而して他の助動詞に連る時には必ずその連用形(副詞形)よりする。助動詞の「ない」は動詞又は他の助動詞に連つて決して形容詞(形容動詞には連る)には連らない。而

して動詞・助動詞に連る時には必ずその未然形よりする。

(二)形容詞の「ない」は動詞「ある」に否定の助動詞を連ねた「あらぬ」と意味を變へずに置き換へることが出来る。併し單なる否定の助動詞「ぬ」とは置き換へることが出来ない。

今日は寒くない。→今日は寒くあらぬ。(言へる)
今日は寒くない。(言へない)

助動詞の「ない」は他の否定の助動詞「ぬ」と意味を變へずに置き換へる事が出来る。併し「あらぬ」とは置き換へる事が出来ない。

今日は行かない。→今日は行かぬ。(言へる)
今日は行かない。(言へない)

(三)形容詞の「ない」とその連つてゐる上位語との間には助詞「は」「も」等を挿入することが出来るが、助動詞の「ない」はその連つてゐる上位語との間に助詞「は」「も」等を挿入することが出来ない。これ前者は觀念語であり後者は形式語であるからである。

あの山は高くない。→あの山は高くはない。(言へる) 形容詞
そんなに甚くない。→そんなに甚くもない。(言へる)
今日は歸らない。→今日は歸らはない。(言へない) 助動詞
早く走れない。→早く走れもない。(言へない)

又「ない」の語根の「な」に推量の助動詞「さうだ」がついて「出来な_いさうだ」「勝てな_いさうだ」などと用ひる。

「ぬ」と「ない」の使用に関する地方的分布は、關東(三河以來)では「ない」を用ひ、關西(尾張以西)では「ぬ」(ん)を用ひる。この區別は嘗て文部省の國語調査委員會で作つた「口語法調査報告書」に於ける東西方言の境界を示す事項の一つであつた。それには口語法の分布に東西の對峙の多くの實例を示した後、かう書いてゐる。

コレラノ對峙ニ基キテ全國ノ方言區域ヲ分タントスル時ハ、大略、越中・飛騨・美濃・三河ノ東境ニ沿ヒテ其境界線ヲ引キ、此線以東ヲ東部方言トシ以西ヲ西部方言トスルコトヲ得ルガ如シ。

しかし今日の標準語として小學校の國語讀本には、「ぬ」と「ない」の兩方が用ひられてゐるのである。(勿論「ぬ」の方が少數であるが)従つて全國一般的になつて來た譯である。けれども「ぬ」系統の「なんだ」と「ない」系統の「なかつた」とでは、まだ東西の使用分布區域が明らかに區別出来る様である。

私は知らなかつた。(關東)
私は知らなんだ。(關西)
私は知らないでゐました。(關東)
私は知らないでゐました。(關西)
私は知らんでゐました。(關西)

この「ない」の語源に就いても確説はないやうであるが、萬葉集に見える「なく」や「なふ」(東歌に見えるもの)でもなければ、「ぬ」がク活に變つたものでもあるまいと思ふ。保科孝一氏も「日本口語法」(二二六頁―二三四頁)に於てこの問題に詳論を試みて、「現在のところ關東方言の『ない』『なかつた』は『なく』『なふ』若くは『ぬ』から發達したものでなくして、形容詞の『なし』が助動詞に變化して動詞にも連續する様になり、而して否定の助

動詞に發達したものと見たいのである。」と言つてをられる。恐らく、形容詞の「なし」が形式化して、所謂補助形容詞としての用法(「である」の否定の「でない」)を發達せしめ、それが「で」より離れて助動詞となつて動詞や他の助動詞にも連るやうになつたものであらうと思ふ。室町時代の抄物には、動詞に打消の「ない」のつく例は、
 貞實ニシナイ (史記抄)
 がある程度のやうであるが、形容詞には「廣クナウテハ」「博ウナイ」「ウラメクナイ」の如き用例が見えて補助形容詞的用法に近づいてゐる。「狂言記」には「おりない」があり、「天草本平家物語」には「御座ない」も見えてゐる。いづれも参考資料であらうと思ふ。(天草本平家物語)には「ない」の動詞に附いた例は皆無だといはれてゐる。

三まじ

「まじ」は文語の否定の助動詞「まじ」から來たもので、推量の否定を表す助動詞である。「まい」は「ないと思ふ」といふ意味で用ひられるので「う」「よう」と共に意志の助動詞とでも稱すべきものであるといふ人がある。連體形の「まい」は「落すまじ」を「二度とそんなことはするまい。」の如き用法もそこから來るのである。連體形の「まい」は「落すまじ」のために「驚くまいことか」「忘れまいものでもない。」等の外は餘り多く使はれない。又、文語の「まじ」の連體形「まじき」を口語にも混入して「そんなことはあるまじき事だ。」「すまじき事だ。」等といふこともある。中古語で「まじ」の「まじい」となつたのは「惜しい」の「惜しい」となつたのと同例であるが、文語の「まじき」といふ連體形が口語で「まい」といふ連體形になつたのは、「まじき」が直接「まい」と變つたのでなくて、終止形が連體形を同化したものであらう。終止形「まじ」が「まい」となつたのは子音の脱落である。なほこの「まい」は受身・可能・使役の助動詞には未然形から、敬語の助動詞「ます」には終止形から連ること次例の如くである。
 言はれまい(受身) 起きられまい(可能) 讀ませまい(使役) 受けさせまい(使役)

私は参りますまい(敬語)
 「まい」が力行變格活用・サ行變格活用の動詞に連る時には種々の連続が行はれてゐる。標準語としては正しいのを用ひなければならぬ。

	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
來	こ—(まい)正	き—(まい)	くる—(まい) く—(まい)	くる	くれ	こい (カ變)
爲	せ—(まい)正 し—(まい)正 しよ—(まい)	し	する—(まい) す—(まい)	する	すれ	せい しろ (サ變)

未然形から連るのはすべて正しいのであるが、今日では終止形から連る「來るまい」「爲るまい」が可なりひろく使はれてゐる。漸次許容されるに至るであらう。

第二十一節 助動詞と動詞及び他の助動詞との連續

助動詞は他の語に連つてその本義を發揮する語であるから、他の語との承接關係は十分これを明かにして置かなければならない。上述の各節に於て各語に就き一々之を明かにしておいたのであるが、便宜上一括して左に表示することにする。助動詞と助詞との連續は助動詞と動詞との連續に準じて考へればよい。

一 助動詞と動詞との連続 (文語・口語)

助動詞の種類	動詞の活用形		未然形に	連用形に	終止形に	連體形に	已然形に	體言其他に
	使役 (文語は敬語)	受身 (可能・敬語)						
	す(主に四段)	ラレル(四段以外)	す(四段・ナ變) さす(右以外) しむ(全動詞) セル(四段) サセル(四段以外) シメル(全動詞)	ます 給ふ たぶ おはす・おはします めす まつる・たてまつる				

時	敬語	
	未來	過去
り(サ變)	む まし ウ(四段) ヨウ(四段以外)	
ぬつ		まゐらす まうす 聞ゆ 侍り さふらふ ナサル 遊サル 下サヘル 給サス 申サス 致ス 仕ゲル 上マス
		カ變・サ變 には例外あり カ變・サ變 には例外あり
		補助動詞
り(四段)		

否定	指定	比況	希望
まじ ざり	たり	なり	まほし たかり たほし
まじ ざら まし むしむ 推量 未来 使役	たら じざり 否定	なら じざり 否定	まほしく たから 否定
まじ ざり けつき 推量 完了 過去	たり けつき 推量 完了 過去	なり けつき 推量 完了 過去	まほしく たかり 否定
まじ ざり	たり	なり	まほし たかり まほし
まじ ざる な ごな なり 指定	たる ごな 指定	なる ごな 指定	まほし たかり 指定
まじ ざれ	たれ	なれ	まほし たかれ たけれ
〇〇 ざれ	たれ	なれ	〇 〇 〇

推量	完了	未来	過去
けむ べかり	りたぬ つり	まし むし	けり きり
〇 べから ざり 否定	らたら じすまし 否定	〇 (ませ)	〇 (けら) (ず)否定
〇 べかり けつき 推量 完了 過去	りりたり たけきり 完推 完了 量去	〇 〇	〇 けり
けむ べかり	りたり ぬつ なべらめ かりしりむ 指定 推量	まし むし	けり きり
けむ べか ごな 指定	るたる なべらめ なりしりむ 指定 推量	まし むし	ける なり 指定
けめ べかれ	れたれ ぬれ つれ	ましか	けれ しか
〇 〇	(れ) (たれ) てよ	〇 〇	〇 〇

三助動詞と助動詞との連続(口語)

種助動詞類	助動詞の本形	助動詞の類	受身		敬語	使役
			可能・自	發・敬語		
未然形	られる	れる	られる	れる	なざる 遊ばす 下さる 申す 致す 仕る 上げる ます	しめる させる せる
連用形	られ	れ	られ	れ	なざる 遊ばす 下さる 申す 致す 仕る 上げる ませ	しめ させ せ
終止形	られ	れる	られ	れる	なざる 遊ばす 下さる 申す 致す 仕る 上げる ませ	しめ させ せる
連體形	られ	れる	られ	れる	なざる 遊ばす 下さる 申す 致す 仕る 上げる ませ	しめ させ せる
假定形	られ	れ	られ	れ	なざる 遊ばす 下さる 申す 致す 仕る 上げる ませ	しめ させ せ
命令形	られ	よ	られ	よ	なざる 遊ばす 下さる 申す 致す 仕る 上げる ませ	しめ させ せよ

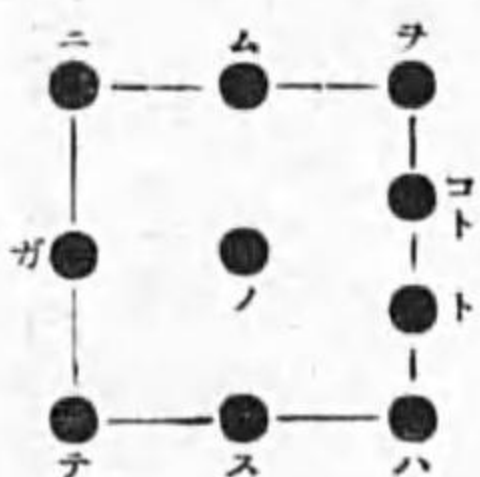
時	了		了完・去過	來未
	(詞助助補部全)	完		
てある てをる てるる	てある てをる てるる	てある てをる てるる	た	よう
てあらぬ てをらぬ てるぬ	てあらぬ てをらぬ てるぬ	てあらぬ てをらぬ てるぬ	たらぬ	〇〇
りてあ てをり てる	りてあ てをり てる	りてあ てをり てる	たり	〇〇
てある(同右) てを(同右) てる(同右)	てある(同右) てを(同右) てる(同右)	てある(同右) てを(同右) てる(同右)	た	よう
てある(同右) てを(同右) てる(同右)	てある(同右) てを(同右) てる(同右)	てある(同右) てを(同右) てる(同右)	た	よう
てあれ てをれ てるれ	てあれ てをれ てるれ	てあれ てをれ てるれ	たれ	〇〇
てあれ てをれ てるよ	てあれ てをれ てるよ	てあれ てをれ てるよ	〇	〇〇

否定	指定	比況	希望	推量
ない ぬ ぬい	だ で せ なら	やうだ やうで	たい	さうだ さうで す やうだ やうで
○ ○ ○	だ せ う なら 推量 未来	やうだら やうなら やうでせ やうなら 推量 未来	たく ない 否定	さうだら さうなら さうでせ さうなら やうだら やうなら やうでせ やうなら 推量 未来
なく (す)	なり だ つ た 過去	やうだ やうでし た 過去	たく	さうだ さうでし やうだ やうでし た 過去
ない ぬ ぬい らしい 推量	だ です	やうだ やうです	たい だらう せう らしい 推量	さうだ さうです やうだ やうです らしい
ない ぬ ぬい やうだ やうです 推量 比況	だ です な	やうだ やうな	たい さうだ さうで やうだ やうで 推量 比況	さうだ さうな さうな やうな やうな やうな やうな 推定 比況
な ね なけれ	な ○ ○ ○	やうな やうな やうな やうな なれ	たけれ	さうな さうな さうな さうな やうな やうな やうな やうな ○ ○ ○ ○ ○
○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○	○	○ ○ ○ ○ ○

第十二章 助詞

第一節 助詞の本義

助詞は種々な名稱で呼ばれて来た。呂爾乎波・助辭・靜助辭・關係詞・後置詞(後詞)などはこれである。この中で普通に多く用ひられるのは「てにをは」(略して「てには」ともいふ)と助詞である。「に」は「に」といふ名稱は、古くは助詞・助動詞・活用する語の語尾或は接尾辭なども含んだものの稱である。これを一品詞の名として用ひたのは大槻文彦博士の「廣日本文典」である。而してこの「てにをは」といふ名稱は乎古止點から起つたものらしい。乎古止點といふのは漢文を訓讀する時に、古くは後世のやうに送り假名をつけないで、漢字の四隅四側中央等に星點(單點)を施して、一定の規則を設け、之を目安にして讀んだのである。この點を四聲のやうに左の下の隅から左の上の隅に向つて順次四隅を讀むと「てにをは」と配されてゐること左圖のごとくである。



乎古止點といふのは右肩の二點をとつて全體の名稱としたのである。助辭は助詞の意味である。靜助辭といふのは助動詞を助動辭と呼ぶに對しての名稱である。關係詞といふのは助詞の職能が語句間の關係を示すからである。後置詞

(後詞)といはれるのは、英獨語等の前置詞に對して、助詞が必ず助けられる語の後に置かれるところから來た名稱である。併し、國語の助詞は英獨語等の前置詞に比べるとはるかに用法の廣いことに注意しなければならぬ。

「つ」の研究は我が國では可なり古くから行はれた様である。順徳院の「八雲御抄」には「てにをは」といふ事」といふ一節があつて、歌道上その肝要なことが説かれてゐるし、その他歌や連歌に於ける「てにをは」の用法の研究は吉野・室町時代に於て行はれてゐる。江戸時代に入つてその研究は益々進み、ことに富士谷成章の「脚結抄」(安永七年刊)及び本居宣長の「詞の玉緒」(安永八年刊)が出づるに及んで「てにをは」研究は一時期を畫したのである。橘守部・東條義門・長野義言・黒澤翁滿・萩原廣道・中島廣足・富樫廣隆等有力なる「てにをは」研究者を経て明治時代に移されたのである。明治時代に入つては大槻文彦博士の「廣日本文典」や山田孝雄博士の「日本文法論」が出て助詞研究の新生面が開かれ、文法史上の著しい業績が立てられたのである。

助詞の特質は山田孝雄博士の「日本文法論」(五四八頁)中の左の記述にその大綱をつくしてゐるといつてよい。

- 第一 他語との關係を示す必要よりして、**語形上に變化を有するかの點より見れば助詞にはかかることなし。**
- 第二 そのあらはせる**觀念の上より觀察すれば助詞は單獨にては何等の觀念をもあらはし得ず、他の觀念語に附屬して始めて其の義を認むるを得るのみ。**
- 第三 その職能によりて**觀察すれば、助詞は觀念語たる體言・用言・副詞に附屬して其の意義を明にし、又それらの間の關係を示すに用ゐらる。**

助詞の形態上の特質は右にも示されてゐる通り、無活用語であるといふことである。「て」といふ助詞はもとは活用動詞の「つ」の連用形であるから、活用した語であるが、品詞が轉成して助詞となつてしまへば、助詞としては活用しないのである。次に助詞はその形態は多くは短小であつて、一音節もしくは二音節三音節であつて、三音節以上

の語は稀である。一音節の語は他の品詞にはあまり例のないところである。これは或は國語に於ける助詞の頻用性から來てゐるのかも知れない。又、助詞はすべて固有語であつて外來語が無いといふ事實にも關係があるかも知れない。助詞の觀念上(意義上)の特質としては、**形式語であるといふ點を注意しなければならぬ。形式語である以上、その職能を全くするためには必ず他の觀念語に伴つて使用されなければならない。換言すれば、助詞は單獨では決して文の成分の單位である文節を作ることが出来ないものである。この事は反面から考へると、他の語に附隨して用ひられることに依つてはじめてその語の意味が発揮せられるといふことでもある。助詞がそのつく觀念語と離して發音せられることなく、上の觀念語と一とつぎに發音せられるのはこのことを示してゐる。之に反して觀念語は必ずしも他の觀念語と一とつぎに發音せられるとは限らない。離して發音してもその意味は認めることが出来るのである。この點は往々助詞(助動詞も勿論同様であるが)には、それだけでは意味が無いと考へられ易い原因となる。けれどもこれは誤つた考である。神保格氏は「言語學概論」(二〇頁—二二頁)の中で「サクラン」(ハナガ)等はそれぞれ一つの句であるが、その中の「サクラン」(ハナ)は又別に一つの句となり得る。さうすると之を除き去つて残つた「(方)」は句となり得ない。併し「(フ)」や「(ガ)」にも意義は有る。之は「サクラン」といふ一句に含まれた意義と「サクラン」だけに含まれた意義とを比べて見るとわかる。比べて見ると確かに意義はちがふ。而してその中「サクラン」だけの意義を除いたものが「(フ)」の意義である。」と言つてをられる通りである。「助詞や助動詞には、それだけでは意味がないと考へるものがあるかも知れませんが、それはいつも他に附いてあらはれるものを、取りはなして考へるから意味があらはれて來ないのです。『私』と『私は』との違ひが『は』の意味です。」(橋本進吉博士著「新文典別記」二五頁)と言つてあるのも同様である。助詞に意味が無いと考へられ易いのは、その意義があまりに抽象的であり稀薄であるために、意識の上を思ひうかべることが困難であるのに基くのは神保氏の説の通りである。意味を思ひうかべる**

ことが困難なといふことと、意味が無いといふことは混同してはならないのである。全く意味の無い語は文法學の研究對象にはならない。助詞が一つの品詞として文の構成にあづかり得るのは、その意味の單位となり得るからである。(文法學に於ける形態と意義と職能との密接なる關係に就いては十分の再檢討が必要である。ことにその一元的視點からは新しい文法的見解が生れて來るであらうと思ふ。)

助詞の職能は、その名稱に依つて明かなる如く、他の觀念語(單語・連語・文等)についてその意味を助け、又、それ等の間に於ける關係を示すにある。即ち、意味の補助(この點では助動詞と助詞とは異ならないが、補助の對象になる品詞の種類に二者の相違がある。)と關係の表示、この二者が助詞の職能である。

彼は 本のみを 買ふ。

彼のみは 本を 買ふ。

右の二つの文に於て、「を」といふ助詞は「本」といふ名詞と「買ふ」といふ動詞との文中に於ける成分關係を表示してゐるのである。故に「を」の使用を變化させるとその成分關係に變動を生ずるのである。

母が 子を 褒める。

母を 子が 褒める。

右の二つの文に於ける「を」も「が」も共に成分關係の明示をその職能としてゐる助詞であるから、それが如何なる語につくかに依つて成分關係に變動を生ずることは右の通りである。然るに前の例の「のみ」といふ助詞は意味の補助が主たる職能であるから、そのつく語に或る種の意味を附加するのである。「テニヲハ」は詞に添ひて他の詞との關係を表し、或は多少の意義を添ふ。(三矢重松博士著「高等日本文法」四五二頁)と言つてゐるのはこのことである。助詞によつては、意味の添加と關係の表示とが別々の語によつて表されることもあり、同一語によつて兼ね表される

こともある。このことは實際に助詞の分類を行ひ、その各語に就いて調べて行けば分ることである。さきに本講(五七頁)に於て形式語中の助動詞を補助語といひ、助詞を關係語といつたのは關係を示す助詞の職能的特性を重視したためである。助詞に補助的職能が無いといふことではない。

助詞の職能は助詞が他の觀念語に附いて使はれる時に果されるのであるから、助詞に於ては觀念語への接續といふ點が重視されるのである。從屬語といはれたり、依存語といはれたり、續性を本質とするといはれたりするのはこのためである。従つて助詞に於ては位置といふことが重要問題となるのである。助詞は文や連語や單語の上に立つて用ひられるといふことは無い。一文中の語の連接に於て助詞が觀念語の上に位することはあり得よう。けれどもそれは助詞本來の連續性によるものではない。

春の野に菫つみにと來し吾ぞ野をなつかしみ一夜ねにける。(萬葉集、一四二四)

右の「の」「に」「と」「ぞ」「を」といふ助詞は、それぞれ「野」「菫」「來」「野」「なつかしみ」に上位してはゐるけれども、それは文中の連接によるのであつて、助詞の文法的職能は、それらの助詞の上にある語句「春」「野」「つみに」「吾」「野」について發揮されてゐることは今更説明の要もない明白な事實である。「が」「けれども」等の助詞が文の冒頭に用ひられることがあるが、それは助詞として用ひられてゐるのではなくて、品詞が轉換して接續詞として用ひられてゐるのである。こゝで問題になるのは否定の助動詞の條下でも述べた「な笑ひそ」「な泣きそ」等に見える禁止の「な」であるが、これが副詞といはれる(本講では必ずしも副詞説に従ふ譯ではないが)理由もこゝにあるのである。(徳田淨氏著「國語法査説」二二六頁—二二八頁参照)

日本語に於て助詞は非常に主要なる品詞である。

君が代は千代に八千代にさざれ石の巖となりて苔むすまで。

右の國歌の中にも九語の助詞が用ひられてゐるのである。かういふ風に國語に多くの助詞が用ひられ且つそれが重要なつとめを果してゐるといふのは、國語の性質によるのである。獨逸の言語學者 August Schleicher (1821-1868) が言語を形態上から區分した「**孤立語 (Isolating language)**」「**漆着語 (Agglutinating language)**」「**屈折語 (Inflectional language)**」の中、**日本語は漆着語に屬してゐるのである**。國語のもつこの漆着語の特質は助詞によつて發揮されてゐるのである。助詞が國語の品詞中重要であるといふのはこの意味に於てである。若し國語の文法的範疇を確立しようとするならば、この漆着的性質の上に於てなされなければならぬと思ふ。

第二節 助詞の分類

徳川時代は暫く描き、明治以後に於て注目すべき助詞の分類は大槻文彦博士の分類と山田孝雄博士の分類とである。

〔大槻文彦博士の「**廣日本文典**」(一六三頁—一六四頁)では次の様な分類が試みられてゐる。〕

アラユル互爾乎波ヲ其用法ニ因リテ三類ニ大別ス。

第一類 名詞ニノミ屬クモノ。(名詞ノ互爾波)

- (1) が の
- (2) の が つ
- (3) に
- (4) を
- (5) と と
- (6) へ
- (7) より より から
- (8) まで

第二類 種々ノ語ニ屬クモノ。

- (9) は ば
- (10) も
- (11) ぞ なむ なら し
- (12) こそ
- (13) だに すら
- (14) さへ

(15) のみ ばかり

(16) や か

第三類 動詞ニノミ屬クモノ。(動詞ノ互爾波)

- (17) ば
- (18) と とも ど とも
- (19) に を が
- (20) て にて とて して にして として
- (21) で
- (22) つ、

なほ同氏の「**廣日本文典別記**」(七一頁—七二頁)では更に左の如く意義に就いての分類があげてある。

互爾乎波ノ用法意義ハ、紛絲ノ如シ、學ブ者、其緒ヲ索ムルニ苦シム、今、此ニ、用法ニ因リテ、三類ニ大別セシハ、此書ノ新案ナリ。而シテ、更ニ意義ノ方ニ就キテ、概略ニ類別スレバ、左ノ如クナラムカ。然レドモ、場合ニ因リテ、各語ニ、種々ノ異義ヲ生ズレバ、コレヲ以テ、定義トハシガタシ。

第一類 文主ヲ指示スルモノ。

- が の
- の が
- に を と
- へ より から

第二類 分合スルモノ。

- は も
- ぞ なむ こそ
- だに すら さへ
- のみ ばかり
- や か

第三類 豫想スルモノ。

- 抑ヘテ意ヲ懸スルモノ。
- ば
- と とも ど とも

意ノ裏返ルモノ。
終リテ移ルモノ。
にをが
てでつゝ

右の「廣日本文典」の流に従つて助詞の分類をしてゐる人は可なり多い。

(二) 國語調査委員會編纂の「口語法」(二五〇頁—二五五頁)の分類

第一類 體言・用言又は他の名詞に附くもの。

- (一) か (疑問) かも
から (動作の起るも又は範圍)
くらゐ ぐらゐ (比較と程度を凡そに現す) こそ (意味をつよめる)
さ (軽く言ひはなす)
しか (限る)
でも (指定する)
どころ どころ (ある物事をあげてそれより事情の強いものがあつたことを知らせる)
なら (條件)
にして (所を指す)
ばかり (限る)
ほど (大凡の程度)
も (とりすぎる、列擧、意味を和らげ又強める假設)
やら (列擧)
は (とりたて、いふ)
- が (主語)
さり ざり (限る)
さへ さへも (ある物事をあげほかに推量させる「だけ」の意味)
だけ だけに (物事を限る程度を示す)
ととて とても たつて たつても として (物事の並列、指定する)
など (大體に示す)
なり なりとも なりと (そのまゝの意)
の (物事の列擧)
ほか (ある物事をあげ他をとりける)
まで までも (動作事情の至り及ぶ、限る、程度)
や (列擧)
より よりは よりか よりも よりほか よりしか (比べいふ)

- (二) でも (軽く大體に指す)
- (三) や やい (呼びかけ、念を推す)

第二類 用言だけに附くもの

- (一) が (互にくちがひを結合する、順につける、假設、念を推す)
けれども (上とは反對)
ぜ (意味を強める)
さう (推量)
と (條件、事柄のおちあふ意)
に (場合をさす、動作の目的をさす)
のに (上の事情に拘らぬ)
ものなら ことなら (第一類の「なら」)
ものを ことを (二)の「に」の意)
わ わい (感歎)
- (二) たつて たつても (たて「た」)
たり だり たつたり でしたり (事柄のさまゝ列擧)
つゝ (ながら「ら」の意)
- (三) ところが (互にくちがひがふ意の句をつなぐ)
ば (假設條件、事情に比例する、事柄に相應する、事が一緒におちあふ、動作事情を並べいふ、既定條件、理由の「から」の意)
- (四) ながら「そのまゝ」の意
- から からは からは (まをうけ下につける)
し (列擧)
ぞ (同上)
て (言ひはる心持をやさしく現はす)
とも と (既定條件、「言ふまでもない」意)
の (上の語句と一しよになつて體言の標になる)
ものか もんか ものですか (反語)
もの (「けれども」の意)
やう (推量)
- たら たら だつたら でしたら (既定條件)
- てて ては ては ても ても (同じ時の事柄をつなぐ、ちがつた事柄をつなぐ)

第三類 體言又は他の動詞に附くもの

- へ (方向、場所、相手)
- して (動作事情の理由)
- だつて (「とても」の意)
- と (動作を共にする)
- に (場所をさす、時をさす、相手になる物事をさす、わりあて、物事を重ねいふ)
- を (動作のか、り及ぶこと)
- が (読み、好み又はその反対のめあて)
- づつ (歌のわりあて)
- でも (動作の場所、動作の道具手段、動作の理由、指定)
- とも (二語に「の」の意)
- の (體言の形容、下に連體の類あるときそれに對する主格)

第四類 用言又は他の助詞に附くもの

- (一) な なあ (念を推す)
- の のう (同上)
- よ (念を推して感歎)
- え (同上)
- ね ねえ (念を推す)
- まよ (有様の不覺)

(三) 三矢重松博士の「高等日本文法」も次の三種に分けてある。

- (一) 名詞に附く者
- (二) 動詞に附く者
- (三) 諸詞に附く者

(四) 吉岡郷甫氏の「言語對照語法」では大槻氏の分類に更に二類を加へて次の如く分類してある。

- 第一類の助詞 體言又は體言に準ずるものに附いて他の語句に對する關係を定めるもの。
- 第二類の助詞 種々の語に附いて種々の意趣を表すもの。

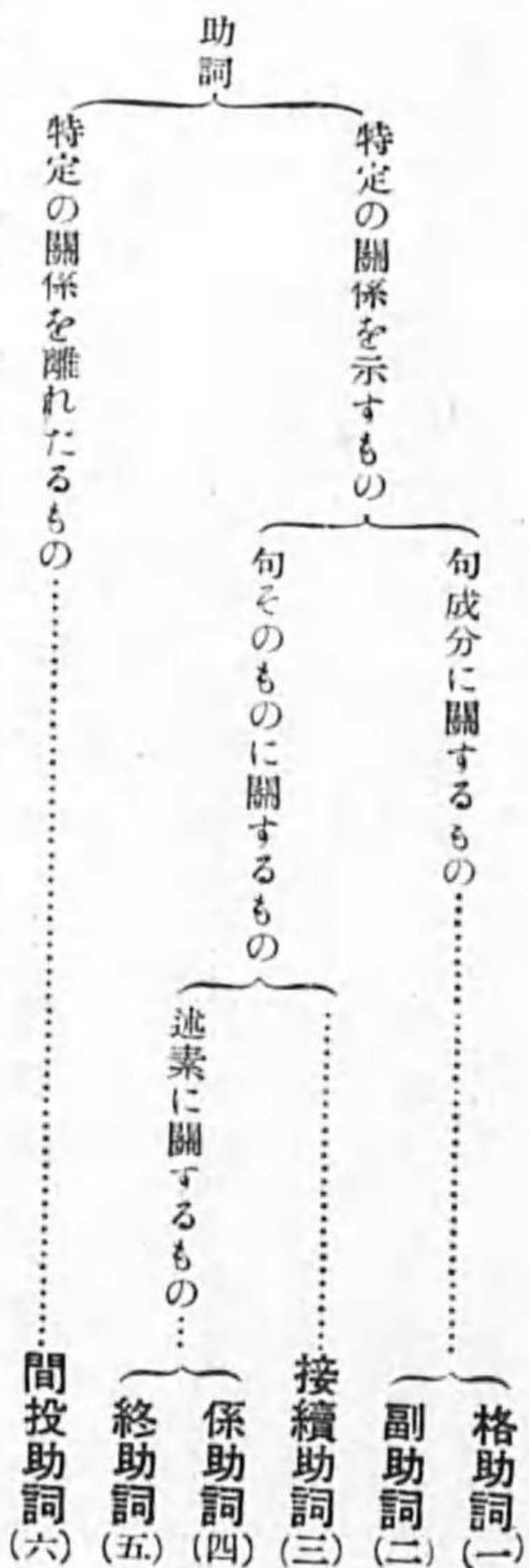
第三類の助詞 用言を根帶とする語句に附いて他の語句と接続するもの。

第四類の助詞 文の末の用言又は文の中の種々の語に附いて疑問を表し、文の末の用言に附いて命令又は願望を表すもの。

第五類の助詞 文の末又は中に置いて語調を整へ、語勢を大へ、餘情を添へるに用ひられるもの。

(五) 山田孝雄博士の「日本文法論」(五五一頁)の分類

主として職能即ち他に伴つて用ひられる状態と、その示す關係如何との二つの點から考へて、左の六種に分類してある。

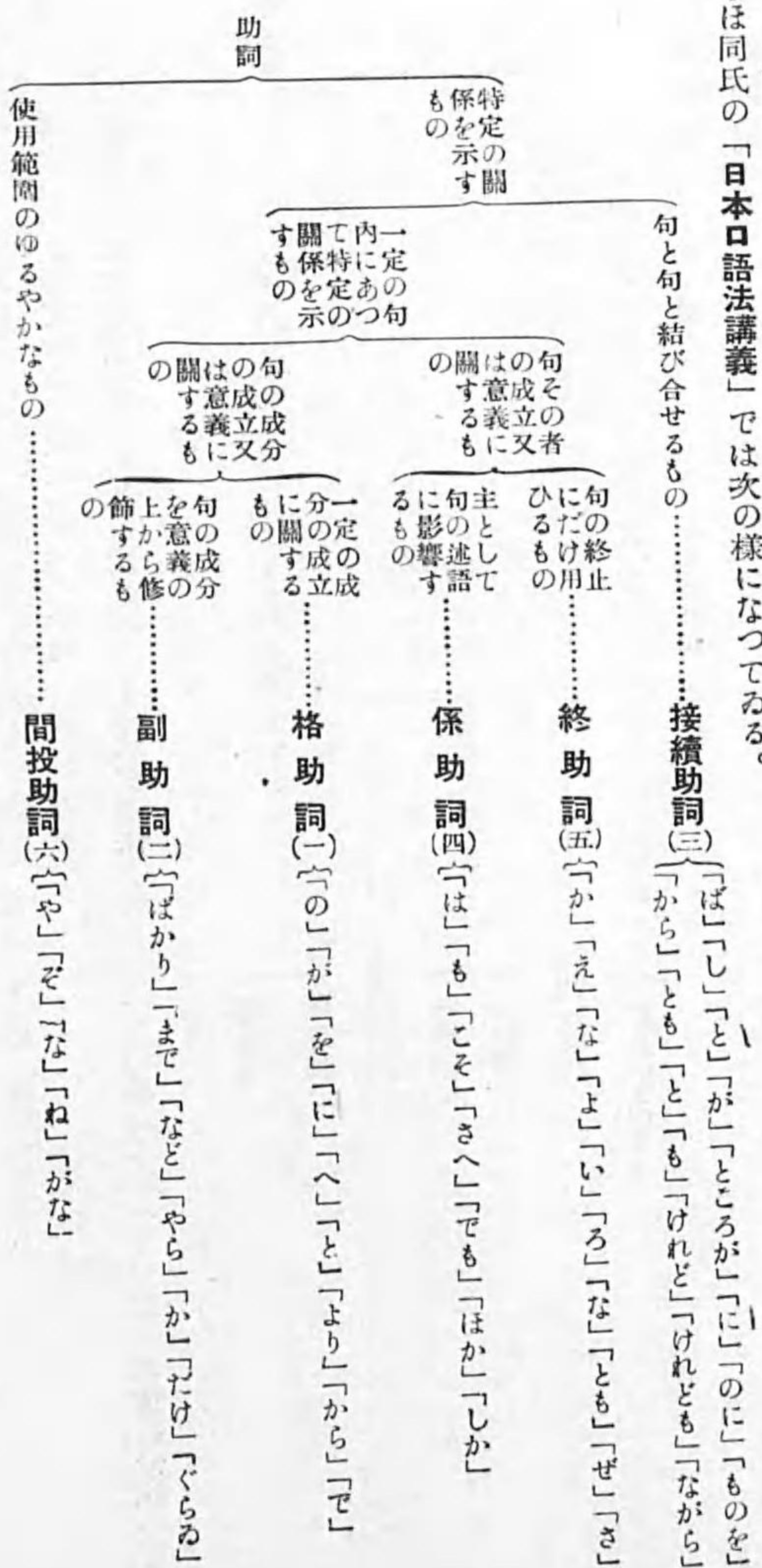


而して同氏の「日本文法講義」では之に屬する助詞としては次の語があげられてゐる。

- (一) 格助詞 の が を に と へ より から で
- (二) 副助詞 だ に すら さへ の み ばかり まで など やら だけ ぐらゐ
- (三) 接續助詞 ば と とも ど ども が に を
- (四) 係助詞 は も ぞ な む こ そ や か な な そ さへ ても ほ か し か

- (五)終助詞 ながかなかしさえいなとも
- (六)間投助詞 よやしをなねぞ

なほ同氏の「日本語法講義」では次の様になつてゐる。

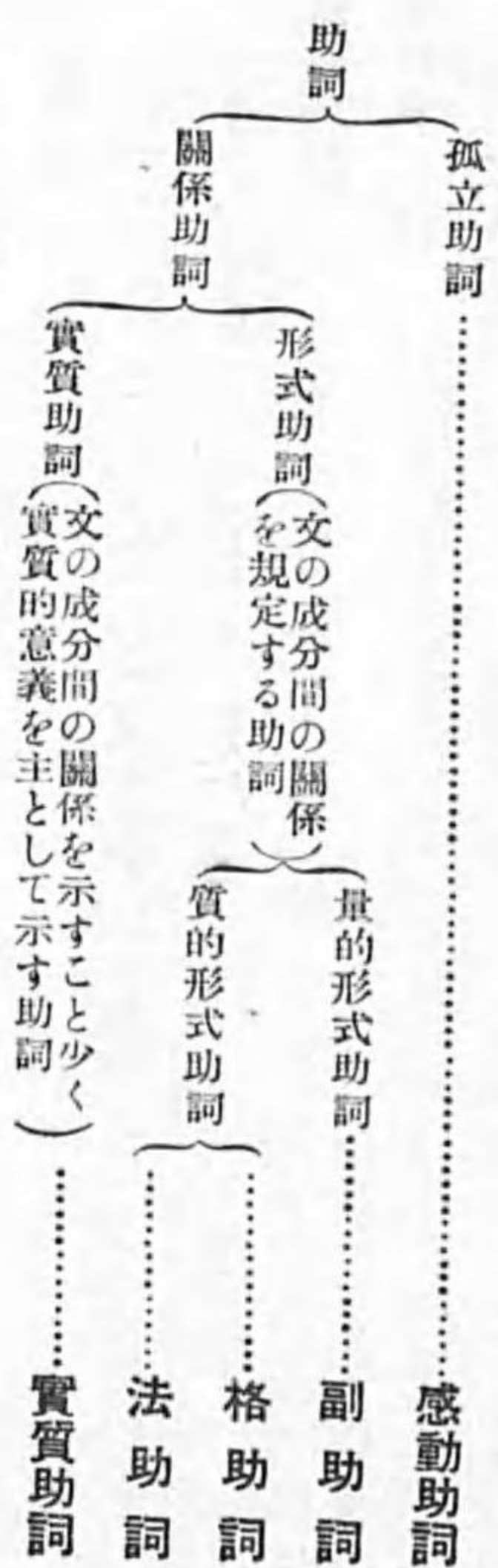


(六)小林好日氏の「國語國文法要義」の分類

- (一)定格助詞 體言の關係的意義を規定するもの。

- 助詞
- (二)修飾助詞 單語に種々の意味を添へるもの。
 - (三)接續助詞 用言の關係的意義を規定するもの。
 - (四)感動助詞 單語又は文に勢を添へ情味を加へることを目的とするもの。

(七)安田喜代門氏の「國語法概説」(二七七頁)では次の分類表が掲げてある。



(八)芳賀矢一博士の「文法論」の分類

- (一)格を示す助詞
- (二)拔萃的助詞
- (三)副詞的助詞
- (四)接續詞的助詞
- (五)動詞の法を形づくる助詞

- 1 命令の法を示す助詞
- 2 感動の法を示す助詞
- 3 希望の法を示す助詞
- 4 疑問の法を示す助詞

(九)松下大三郎氏の「標準日本語法」の分類

(一)格助辭

1 體言の格助辭

「か」(主格・主題) 「を」(客格・目的格) 「に」(格・依格) 「へ」(客格・依格) 「から」(客格・出處格) 「と」(客格・同格) 「より」(客格・比較格) 「の」(連體格・主格・連格・連體格)

2 用言の格助辭

「て」(方法格・修用格) 「ば」(抱束格・修用格) 「と」(抱束格・修用格) 「ども」(放任格・放任終止格) 「つつ」(放任格・修用格) 「と」(放任格・修用格) 「ども」(放任格・修用格)

(二)感動助辭

「か」(疑問) 「やら」(擬) 「ろ」(詈) 「ら」(命) 「な」(禁止) 「ぞ」(指示) 「ぜ」(指示) 「て」(叙述の結果を指示し、自己の感服の告示) 「は」(感服) 「さ」(決定性の顯著) 「や」(呼) 「や」(呼)

(三)提示助辭

1 題目の助辭

「は」「も」

2 特提の助辭

「しか」「ほか」「こそ」「ばかり」「だけ」「まで」「ぐらゐ」「なり」と「なりとも」「なりとも」「さ」「すら」「か」「や」「ら」

(四)名助辭

1 本來の名助辭

「さん」「さま」「ら」「たら」「ども」「がた」

2 提示助辭にもなる名助辭

「だけ」「ばかり」「すら」「さへ」「まで」「ぐらゐ」「なり」「か」「やら」

(五)副助辭

「ばかり」「だけ」「ぐらゐ」「まで」「ほど」「つつ」「ながら」「がてら」

(〇)橋本進吉博士の「國語法要説」(六六頁—六七頁)の分類



右の橋本博士の分類は、意味の斷續と、その種類と、いかなる品詞に附くかを基準として、現代の口語の辭(形式)

語)を分類されたものであるが、文語や古代語にも大體適合するものと認めると述べてをられる。右の分類によつて山田博士の助詞分類は修正補訂され、並立助詞・準體助詞・準副體助詞の三種が新しく加へられたのである。この點に關して橋本博士は次の如く述べてをられる。

問投助詞は、山田氏のにもあるが、その見方は多少一致しない所があつて、爲に山田氏の間投助詞は、多くの語を含んでゐるが、私見によれば、山田氏の間投助詞には、他の種のものとして取扱はるべき語があるのであつて、例へば、「や」は終助詞と並立助詞に、「ぞ」は終助詞と準體助詞に、「がな」は係助詞に分類する事が出来るもので、これ等を除いた方が、問投助詞の特質が明瞭になり、之に對す確實な概念を得る事が出来るのである。

山田氏の見えない三種の中、並立助詞は山田氏は格助詞・副助詞及び問投助詞の中に收めてゐるのであるが、之等は對等關係の語を接続するもので、かやうな點で、他の各種の助詞の何れとも異り(もつとも接続助詞の中には對等關係を示すものがあるが、これは何れも用言に附くものである點で、並立助詞と區別せられる)、助詞が重なる時も、特別の位置があり、ことに「と」の如きは、格助詞とすると格助詞は互に重ならないのが原則であるのに、他の格助詞と重なる事がある(「東と西」と別れる)「右から」と左からと出て来た)。それ故むしる別種のものとして取扱つた方が都合がよい。又、準體助詞(「の」「から」「ほど」「ぞ」など)は、格助詞その他に同じ語があるけれども、この場合はその意味も他の語との接続の有様も違ふ故、これを別にするのが當然である。準副體助詞(「の」)は、山田氏は格助詞に收めたが、これは體言以外の種々の語にも付き、又格助詞と重ねて用ゐられる故(「父からの手紙」「と」での「相談」など)、格助詞とは別にした方がよい。これは常に體言に連続し、この點で副體助詞と性質を同じうする所から、準副體助詞と名づけたが、場合によつて副體助詞と關係せしめず、單に連體助詞と名づけてもよい。以上のやうな理由によつて、並立助詞以下の種類を立てたのである。(「國語法要説」七〇頁)

語の位置性と語の斷續性とは、如何なる文法的範疇が國語法の上に樹立されるにしても、必ず重要な二大範疇たり得ると思ふのであるが、橋本博士の分類はこの二原理が重視されてゐる點で注意すべき分類説であると思ふ。本講で

は大體は山田博士の分類説に従ひつゝ、橋本博士の高説をも顧みて次の順序で進まうと思ふ。

一格助詞

- が(文・口) の(文・口) に(文・口) を(文・口) と(文・口) へ(文・口) より(文・口)
- から(文・口) で(口) つ(文) な(文) い(文)

二副助詞

- だに(文) すら(文) さへ(文) のみ(文) ばかり(文・口) まで(文・口) など(文・口) やら(口)
- か(口) だけ(口) きり(口) ぐらゐ(口) づつ(口) どころ(口) なり(口)

三係助詞

- は(文・口) も(文・口) ぞ(文) なむ(文) や(文) か(文) こそ(文・口) な(文)
- さへ(口) でも(口) ほか(口) しか(口) だつて(口) なりと(口)

四接續助詞

- ば(文・口) と(文・口) とも(文・口) ど(文) ども(文) に(文・口) を(文) が(文・口)
- のに(口) ものを(口) ところが(口) も(口) ても(口) でも(口) から(口) ので(口)
- ひ(文・口) して(文) ながら(文・口) つつ(文・口)

五並立助詞

- と(文・口) や(文・口) か(文・口) やら(口) に(口) なり(口) の(文・口) だ(口)
- たり(口)

六準體助詞

の(文・口) ゴ(口) から(口) ほど(文・口)

七終助詞

が(文) がな(文) か(文) かな(文) かも(文) かし(文) な(文) ね(文) に(文)

か(口) え(口) ぜ(口) とも(口) い(口) の(口) よ(口) さ(口)

八間投助詞

よ(文) や文・口 し(文) を(文) ろ(文) る(文)

ぞ(口) な(口) ね(口) がな(口)

第三節 格助詞

格助詞といふのは體言又は他の語に附いて、助詞の上にある語が助詞の下にある語に對して如何なる資格關係をもち得るかを明かにする助詞である。ここに資格關係といふのは格のことであつて、その意味は英文法等でいふCaseよりも廣く、文節相互の位格關係をいふのである。尤もこの格は格助詞を用ひることなくして表し得ることとは、「花咲く」「鳥歌ふ」の「花」「鳥」が何等の格助詞を伴ふことなくして、「咲く」「歌ふ」に對して主格に立つてゐることでも分るのである。併し「花」「鳥」の格が何格であるか不明の時に「が」といふ格助詞を加へる時は、それが主格であるといふことが明瞭に現れて來るのである。かくの如く、その附く語に對して特定の格を與へ得る助詞が格助詞である。而して、その上の語に對して如何なる格を與へ得るか、格助詞自身の意味としてその格助詞に内在してゐるのである。併し、その意味は形式語であるから單獨では發現しないのである。上の語について、之を下の語に關係せしめる時に現れて來るのである。即ち、格助詞は他の語に對して格を與へ、自分も亦その格の一部分となつて文節を構成するのである。

水〇 増す。

右の〇に當る所に若し「を」といふ助詞を入れると「水を増す。」となつて、「増す」といふ語に對して「水」といふ語は所謂客語になるのである。又、同じ個所に「が」といふ助詞を入れると、同じ「水」といふ語が主語になるのである。即ち、「水〇増す。」では「水」の格が如何なる格であるか判然しなかつたのであるが、「を」又は「が」といふ助詞をその下に附ける事によつて、「水」の格が所謂客格若しくは主格と決定するのである。即ち「を」「が」といふ助詞にはその格を決定させる力(職能又は意味)があるのである。かういふ助詞が格助詞なのである。次の例に於ても同様のことが分るであらう。

人〇 與へる。 人が 與へる。

人に 與へる。

彼〇 笑ふ。 彼が 笑ふ。

彼を 笑ふ。

下に置かれる助詞に依つて「人」「彼」が「與へる」「笑ふ」といふ語に對して如何なる位格關係をもつに至るかを考へて見れば、格助詞の本義が明瞭になるであらう。

而して、或る一定の格を表す助詞は他の格を表すことが出来ない。即ち、一つの格助詞は一つの格だけしか負擔しないので、資格に關する區別は嚴然として存するのである。従つて、格助詞相互は決して重ならない。

又、格助詞は副助詞及び係助詞によつて助けられることがある。格助詞の缺けてゐる時には副助詞及び係助詞がその代理をすることもある。その實例は副助詞及び係助詞のところでも明かになる。

以下格助詞に屬する語を擧げ、その用法と意義を考察してみよう。

(一)が

文語にも口語にも用ひられる格助詞である。

1 體言に附いてその體言を下の語に對して形容詞的修飾語にする。所有とか所屬とかを示す「が」と言はれたのはこれである。

君が代 松が枝 賤が伏屋 月が瀬 鬼が島 彼が家 誰が袖

2 體言に附いてその體言が下の用言に對して主語であることを示す。

鳥が鳴く 花が咲く 春が来た 日が長い 月が美しい

文語ではこの「が」をとらなくても主語たり得る場合があるが、口語では普通主語の下に「が」をつけるのである。

同じく主語を示すのであるが、その主語を含む文が節となつてゐることがある。次はその例である。

鳥が鳴く東をさして歸りけり。

雪が解けると、春が来る。(口)

又、次の「が」は體言に附いてゐるのではないが、「が」より上の語が體言に準せられたもので、主格に立つてゐることは體言の場合と變りはない。「が」のこの用法は「の」に無いところである。

いとやんことなき際にはあらぬが、勝れて時めき給ふありけり。(源氏物語、桐壺)

秋の田のいねてふことをかけしかば思ひ出づるが嬉しげもなし。(後撰集)

それはさうするがよい。(口)

そんなことしないがよい。(口)

3 所謂「を」に通ずる「が」といふのがある。

水が飲みたい。(口) 本が読みたい。(口) 芝居が見たい。(口)

本が要る。(口) 金が要る。(口)

字が書けぬ。(口) 本が讀めない。(口)

菓子が好きだ。(口) 蛇がこはい。(口)

右はいづれも口語に於て起ることであるが、この「が」を普通に目的格を示す「を」の代用であると説いてゐるのであるが、三矢重松博士著「高等日本文法」(四五七頁)には既に「茶が飲みたい」などは處置格の如くも見ゆれど然らず、なほ主格なり。」と見えてをり、吉澤義則博士には、この三矢博士説に賛成して更に詳しくその理由を述べられた論文「所謂『ヲ』に通ずる助詞『ガ』に就いて」(『金澤博士東洋語學乃研究』一頁一〇頁)がある。本講ではその高説に従ひたいと思ふ。吉澤博士の理由とせられる所は大體以下のやうである。

「蛇がこはい。」とはいはれるが、「蛇をこはい。」とはいはれない。又、「蛇をこはく思ふ。」とはいはれるが、「蛇がこはく思ふ。」とは言はれない。「蛇をこはく思ふ。」といふ文章では、「蛇を」は「思ふ」と交渉するので、「こはく」は「思ふ」を修飾するまでである。「思ふ」が他動詞(便宜この名稱による)であるから「蛇を」といふ目的語を要求するのである。「蛇をこはい。」といはれないのは「蛇を」といふ目的語を要求する「思ふ」といふやうな言葉が無いからである。「こはい」は形容詞であるから目的語は必要でないのである。「コツプが盆に載せてある。」に於ても、「コツプを盆に載せた。」とは言へるが、「コツプが盆に載せた。」とは言へない。これ「ある」は自動詞であるから、それと交渉するため「コツプが」が必要であり、「ある」の無い「載せた」はそれと

交渉するため「コツプを」が必要となつて来るのである。即ち、「載す」や「思ふ」は他動詞であるから、「を」を支配することが出来るが、「こはい」は形容詞であり、「ある」は自動詞であるから「を」を支配することは出来ないものである。かくて「を」に導かれた「蛇」や「コツプ」は目的語であり、「が」に導かれた「蛇」や「コツプ」は主語でなければならぬのである。又「水が飲みたい。」「書が書きたい。」の文から「たい」を除いて、「水が飲む。」「書が書く。」といはうとしてもそれは出来ない。又、「たい」を用ひたら「水を飲みたい。」「書を書きたい。」とはいはれない。(若し言つたら誤つた類推である。)この事實は「が」と「たい」との交渉を物語るものであり、「たい」を除いた場合には、「水を飲む」「書を書く」など必ず「を」を要求するのは、「水」と「飲む」、「書」と「書く」の交渉を物語るものであり、「飲む」「書く」が目的語を要求する語であるからである。「水が」「書が」といふ形に於て文を構成しようとしたならば、「たい」といふ助動詞が是非必要である。換言すれば「水」と「飲む」、「書」と「書く」との文法的交渉は直接でなくなつて、「水」や「書」の文法的直接交渉は「たい」に移つてゐるのである。而して「飲む」や「書く」はこの場合「たい」の補助成分として活いてゐるに過ぎないのである。「たい」は自動性であるから「が」をもつた主語と相應するのである。

ii)

「の」は大體に於て「が」とよく似た意義と用法とをもつてゐる。文語にも口語にも用ひられる。

1 體言に附いてその體言を他の體言の形容詞的修飾語にする。

- | | | | | | |
|-----|------|------|-----|------|--------|
| 花の色 | 松の緑 | 私の友達 | 誰の物 | 三日の朝 | 五貫目の荷物 |
| 花の雪 | 浮草の身 | 月の眉 | 夢の世 | | |

右の如き「の」の用法は往々「の」の下の被修飾語の體言を省略し、又その省略された體言の代りに別箇の「の」

を置くことがある。(この別箇の「の」は勿論格助詞ではない。「褒められるのが嬉しい。」「の」と同類の別の助詞である。橋本博士はこの「の」を準體助詞と呼んでをられる。)

上の(本)は僕の(本)にして、下の(本)は君の(本)なり。

これはあの時の(物)です。(口)

いかなれば四條大納言の(歌)はめでたく、兼久がは悪かるべきぞ。(宇治拾遺物語)

これは誰の(だ)。(口)

2 上を形修語にする右の「の」は、上の語が體言でない場合にも用ひられる。

- | | | | | |
|-----------|---------|----------|---------------------|---------|
| 1) 父からの傳言 | 歸るまでの費用 | 承知したとの返事 | 東京への往復 | 此處だけの話 |
| 三尺ぐらゐの長さ | 米國よりの通知 | 大臣のみの會議 | 見ての上(助詞に附く) | |
| 2) まれの細道 | つひの柄 | 暫しの命 | 夜もすがらの嵐 | 又の日 |
| よほどの事 | 大抵の日 | 専らの噂 | おほよその標準(副詞に附く) | ちよつとの時間 |
| 3) 適當の處置 | 本當の原因 | 特別の設備 | あたりまへの話(形容動詞の語幹につく) | |
| 4) 面白の樂の音 | 情なの言 | あやしの振舞 | あちきな世(形容詞の語幹につく) | |

何れも下の語に對して形容修飾語になつてゐることは同じである。

以上1と2の用法に立つ「の」を以て準體助詞と名づけられたのは橋本進吉博士である。詞の中で常に體言を修飾するのは副體詞(連體詞)であるから、1と2の「の」は副體詞と同様の資格のものと見てかく呼ばれたのである。(「國語法要説」六三頁―六四頁参照)注意すべき名稱である。

3 體言に附いてその體言を下の用言の主語にする。

春たてば花とやみらむ白雪のかゝれる枝に鶯のなく。(古今集)

み吉野の山の白雪ふみわけて入りにし人の音づれもせぬ。(同)

けふ別れあすはあふみと思へども夜やふけぬらむ袖の露けき。(同)

雨の降る日は鬱陶しい。(口)

風の吹く夜は恐ろしい。(口)

あなたの出発なさる時は見送りに行きます。(口)
右の口語の「の」の例は節の中の主語を示してゐるもので、その節が形容詞的修飾節に限るのである。即ち「雨の降る」は「日」といふ體言を修飾する形容詞的修飾節であり、「風の吹く」は「夜」を、「あなたの出発なさる」は「時」を修飾する形容詞的修飾節である。併し「雨」「風」「あなた」は「降る」「吹く」「出発なさる」の主語である。主語ではあるが、下に「が」といふ主語を示す格助詞を置かないのは、その主語の屬してゐる文全體が節となつて連體格に立つてゐるから、連體格を示す「の」を「が」の代りに置いたのである。従つてこの場合、節中の述語は必ず連體形でなければならぬ。而してこの連體形の下の體言が省略されることがある。併し、この場合に就いて異説を稱へてゐる學者もある。即ち、

雨の降る日は鬱陶しい。(口)

風の吹く夜は恐ろしい。(口)

の「雨の」「風の」は主語でなくて連體語である。主體を主體として表すのでなくて、主體を以て事柄の所屬を表すのである。だから、「が」を用ひずに「の」を用ひるのである。「雨の降る」は「雨が降る」ではなく、「雨」といふものに就いてその「降る」ことを表すのである。故に、主格と言はないで主體を表す連體格といひ、そ

の用法を連體格の主體的用法といふのである。と。この説に就いては本講では次の様に考へてをる。即ち、「雨の降る日」を「雨が降る日」と言はないのは、前にも述べた様に、「雨の降る」といふ文が全體として「日」といふ體言の形容詞的修飾になつてゐるからである。「雨の」といふ主語だけが「日」の連體格に立つてゐるのではない。従つて、「雨の降る日」といふのは「雨の日」であつて、その「雨」に就いて「降る日」だ等とは考へないのである。一體文章は連語とちがふので、全體として一つの纏つた思想を表してゐなければならぬのである。その一つの纏つた思想を表現してゐる文章が、全體として他の語を修飾してゐるのである。主語は主語、述語は述語と別々に他の語を修飾してゐるのでは決してない。「雨の降る日」を「雨の日」とも言へるのは、「雨の」が直接「日」の形修になつてゐるからではなくて「雨の降る」といふ全體的思想を「雨」の一語で要約することが出来からである。故に「風のない夜」を「風の夜」とは言へないのであるし、「あなたの出発なさる時」は「あなたの時」とはいへないのである。故に「雨の降る日」の「雨の」はどこまでも「降る」の主語であつて、「雨が」といはぬのは、その文が形容詞的修飾節となつてゐるからである。もしこの文が副詞的修飾節になつてゐる時には決して「雨の降る」とは言はないのである。

雨が降れば遠足は中止です。(口)
といふのである。

なほ次の如き慣用法はどう考へるべきであらうか。

切符の切らない方ありませんか。(車掌用語)

いろいろ説が立つてあらう。即ち、

1 切符を切らせない方ありませんか。

2 切符が私が之を切らない方ではありませんか。(松下大三郎氏著「標準日本語法」の説)
等も一つの解釋ではあらう。この説は「切符の」は主體的用法で、主體に大小の二つが有つて「切符が」は大主體、「私が」は小主體、「之を」は大主體を客體に變形して再言したもので、この再言を怠り、小主體を言はない場合が「切符の切らない方はありませんか。」であるといふのである。
併し本講ではこれを次の様に考へる。

3 切符の切らないのを持つてゐる方はありませんか。

右を省略して言つたものだと思ふ。「切らない方」といふ連體格の用法は如何にも變である。何故ならば「切る」といふ動作をするのは「方」ではないからである。「方」とは別な人が「切る」動作をする譯である。故に「切らない」をそのまま生かさうとすれば、そのかゝる語「切符」を持つて來て「切らない切符」と言ふべきである。しかしその「切符」は既に「切符の」として上に出してしまつたから再度用ひられないのである。丁度、

價の高い寶石を買つて來た。(口)

といふべき場合、「寶石」を上に出して、

寶石の價の高いのを買つて來た。(口)

といつた場合と同様である。而しても「寶石」のあつた位置を「の」といふ體言代用の助詞で填めたのである。それと同じく「切らない切符」の「切符」のあとに「の」を持つて來たのである。かくして「切符の切らない」といふ連語が出來たのである。これは勿論「私」といふ主語が省略されてゐて「私の切らない切符」これを變へて「切符の私の切らない」とあるべき筈なのである。併しこの場合切符を切る車掌自らの用語であるから「私」といふ代名詞を言ふ必要は更に無いので省略したのである。同時に「持つてゐる」といふ語も對乗客關係から自

明の語であるから省略して、従つて「のを」も「持つてゐる」を省略する以上不必要となつて來たので省いて結局次の如くなつたのである。

私の切らない切符を持つてゐる方はありませんか。(一)

切符の私の切らないのを持つてゐる方はありませんか。(二)

切符の(私の)切らない(の)を持つてゐる)方はありませんか。(三)

かう考へると1の、

切符を切らせない方はありませんか。(口)

は2、3にくらべて比較的簡單で分りやすいやうであるが、「せ」といふ使役形を解消してしまふことは文法上不合理であるし、助詞「を」の出現の説明に無理が生ずると思ふので、本講では私見をあげておく譯である。

(なほ萬葉集に於ける「の」「が」の主語につく場合に就いての詳細なる研究として佐伯梅友氏の「萬葉集の助詞二種」、「國語國文の研究」昭和三年六月號―は注意するべきものである。)

4 動詞・助動詞の連體形をうけて形容詞的修飾語となる「の」に就いては、「文法上許容ニ關スル事項」の九に次の如く定められてゐる。

てにをは「の」ハ動詞、助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ。

例 花ヲ見ルノ記。

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ。

市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ。

「現行普通文法改定案調査報告之一」ではその理由を次の如く説明してゐる。

中古ノ物語中、此格ノ稀ナルガ爲メニ、從來ノ文法家ノ禁ズルトコロナレド、中古以上ノ固有ノ國文、及ビ之ヲ模倣セル以後ノモノニコソ、其例極メテ少ナケレ、現行普通文ノ一大源流タル漢文調點ニハ（古クハ之ヲ讀マヌ例ナガラ、尙ホ風ク之ヲ調ミタルモアリ）往々其例アリテ、コレヨリ變化セル公用文ニ於テハ、既ニ其常格トナレリ。ソレヨリ徳川時代ヲ經テ、現行普通文ニ及ボシテ、益々汎ク習用セララルゴトキ、決シテ他ノ諸格ニ讓ラズ。今中古ノ物語、漢文調點、及ビ公用文體ノモノヨリ、其一ニヲ摘舉スレバ、

立範不_レ刪之典。（三代格序）

何某未_レ畏之甚矣。（三代格十二）

山しなでらの別當になりてよろこび申すの日。（春曙抄一）

一日乍_レ抑別涙_レ罷_レ御州所_レ之後、不審彌多。（保元物語三）

是皆馴_レ京都_レ之輩也。（東鑑三）

ノ如ク、此他ノ用例枚舉スベカラズ。蓋シ此ノハ元ト漢文ノ之字ノ直譯ヨリ出タルモノノ如ク、純粹ノ和文ニハ甚ダ稀ニシテ、多クハ之レ無クトモ足ル場合少ナカラズ。然レドモ、前段云フガ如ク、習用既ニ久シクシテ、今日ニ至リテハ、此有無ノ二格、自各別ノ意義ヲ爲セルコト、猶ホ漢文ノ之字ノ有無ニヨリ、上句ヲ重クスルト輕クスルトノ差異アルガ如シ。而シテ其輕重ハ「春日」ト「春の日」、「冷水」ト「冷き水」ナドニ於ケルガ如ク、其差甚ダ大ナラズシテ、之ヲ區別スルハ、格別ノ必要ナキコトハ、漢文ニテハ、春日冷水ニテ二者ヲ兼マルニテモ知ルベシ。トニカク、既ニ二者ニ輕重ノ意アルコトヲ人々ノ承認スル以上ハ、強テ斥クマジキハ、猶「堅木」ト「堅き木」、「白木綿」ト「白い木綿」ノ互ニ偏廢スベカラザルガ如シ。是レ本項ノ如キ規定ノ必要アル所以ナリ。（五九頁一六一頁）

5 形修格形成の場合に於ける「の」と「が」との差異に就いては、山田孝雄博士著「奈良朝文法史」（二八九頁一三〇七頁）に詳細なる研究があつてこれに盡きてゐるの觀がある。即ち、そこには二者の外形上の差異より進んでそ

の意義・用法上の差異に及び實證的な研究が試みてある。興味ある對比をなしてゐる。

(1) 代名詞が名詞の形修となる場合に用ひられる「この」「その」「かの」等は、代名詞の指示する實體は下の體言であつて、西洋文典の Demonstrative Pronoun の用法に該當するものである。この際「の」以外のものは用ひられない。之に反して「が」は「わが大君」「あが馬」「おのが名」の如き場合に於ては、その上の代名詞は決して下なる實體の指示とはなつてゐない。即ち、この際の代名詞は下の名詞以外の實體を代表せるもので、西洋文典の Possessive Case に該當するものである。

(2) 「おほせのまにまに」「天地のむた」「花のごと」など用ひられる名詞の下の「の」に「が」を代用することは出来ない。又、「わがからに」「あがごとく」「ながまにまに」など用ひられる代名詞の下の「が」に「の」を代用することは出来ない。

(3) 「たちがを」と「たまのを」、「すめらが命」と「おほきみのみこと」、「藤井が原」と「埴安の池」、「うめがはな」と「うめのはな」等を比較すると、「が」は上下を結合することが緊密で、「の」は稍緩なるやうに思はれる。

(4) 通觀すれば「の」は下なる語に意義の主點を歸着せしめる如き關係にて形修となる。「が」は意義上、上なる語を主點として下なる語をその所屬であると思はせる。しかも、國語で二個の體言が結成される時は下の語が骨子であることは勿論である。だから、「の」で結成された「いらこの島」の如き語は、上下の語が分離して、上が名（從）で下が質（主）のやうに思はれ、「が」で結成された「いらが島」の如き語は、上下の二者が殆ど同じ勢力で、二者相提携して一つの混體をなして、どちらが主とも見られないやうになつてゐるのである。

「の」と「が」には時代の新古があるのではないかといふ説もある。研究の餘地がある。

(三)

「に」は體言にも用言にもついて種々の用法をもつてゐるが、上の語をして下の語の副詞的修飾語に立たしめることは一である。文語にも口語にも用ひられる。山田孝雄氏は「日本文法論」(五六二頁—五六六頁)に於て「これ亦目標を示す。然れどもその意義は靜的なり。この故に動詞にも形容詞にも用ゐらるゝなり、これを靜的目標を示すものと稱す。」と言つてをられる。而して「日本文法學概論」(四一六頁—四二三頁)に於てはその目標を示す語の如何によつて次の區別が設けてある。

第一體言に附屬してそれが靜的目標を示す場合

1 動詞に對しての目標たる體言につく場合

- (イ) その動作・作用の出自又は歸著する目標を示す。
子。父。に。依。る。 人。に。物。を。與。ふ。
- (ロ) 受身の作用を受ける目標を示す。
母。子。に。泣。か。る。 病。に。惱。ま。さ。る。
- (ハ) 使役作用の歸著する目標を示す。
教。師。生。徒。に。課。業。を。受。け。さ。す。 大。工。に。家。を。建。て。さ。せ。る。
- (ニ) 動作・作用の原因を示す。
腹。の。痛。い。の。に。苦。し。む。 花。に。舞。ひ。月。に。謠。ふ。

(ホ) 動作・作用の結果を示す。

木。石。に。化。す。 湯。が。水。に。な。る。

(ヘ) 動作の目的を示す。この場合には主として動詞の連用形を體言化したもの又はそれを體言に準じたものにつく。

花。見。に。出。か。く。 知。ら。せ。に。來。た。

(ト) 動作・作用の存在又は行はれる時を示す。

眞。夜。中。に。風。吹。き。出。づ。 午。後。六。時。に。神。戸。を。立。つ。

(チ) 動作・作用の存在又は落著く場所を示す。

東。京。に。住。む。 海。上。に。月。出。で。た。り。

2 形容詞に對しての目標たる體言につく場合

(イ) 場所を示す。

山。に。近。し。 不。信。ノ。者。世。ニ。多。ク。成。タ。リ。

(ロ) 對比の目標を示す。

そ。の。顔。は。稍。々。狐。に。似。た。り。

(ハ) 類同又は差別の目標を示す。

甲。は。乙。に。等。し。か。ら。ず。 偏。に。風。の。前。の。塵。に。同。じ。

3 存在詞に對しての目標たる體言につく場合

(イ) 存在の場所を示す。

富士山は駿河國に在り。

(ロ)存在の時を示す。

午前九時に卒業式あり。

秋に在りては紅葉を可とす。

(ハ)断定の客者を示す。

この器は金製にしてかの器は銀製なり。

4 他の體言に對しての目標たる體言につく場合

(イ)或る事物に他の事物の添加することを示す。

月に叢雲花に風。 牡丹に唐獅子竹に虎。

これは甲に乙が加はるやうな場合で「に」でその基本體として本來からあるものを示すものである。

(ロ)これから一轉して、次のやうにいふことがある。

子供に女に年寄だけだ。(ロ) あなたにわたくしにこの方にすべて三人です。

これらは枚擧る用をなし、かねてそれらを相合して一團とする力をもつてゐる。(木村云、この「に」は並立助詞である)

第二副詞その他用言に對して修飾の地位に立つものに附屬する場合

(イ)情態副詞に附屬してそれが修飾的地位を確かにするもの。

ありのままにいふ。 あきらかに知る。 親切に取扱ふ。

(ロ)動詞の連用形に附屬して、それが用言の修飾に立つことを示すもの。

雨しきりに降る。 うつむきになる。

降りに降る。

泣きに泣く。

食ひに食ふ。

待ちに待つてゐました。(ロ)

どしや降りに降る。

ひた泣きに泣く。

思ひ思ひに出たつ。

散り散りになる。

別れ別れになる。

以上山田氏の例を見ると「に」の用ひられる場合は大體つくされてゐるやうであるが、これ等は下に來る被修飾語の性質に依つて右の様に種々の條項に分れるので、要するに意義の詮索である。一括すれば「に」はその附く語をして副詞的修飾語の格に立たしめるのである。但し右の例の中で「あきらかに知る」「親切に取扱ふ」の「あきらかに」「親切に」は「あきらかに」「親切」といふ副詞に「に」が附いたのではなくて「あきらかなり」「親切なり」といふ形容動詞の副詞形なのであつて、「に」は獨立した單語ではない。活用言の語尾である。かう解釋するのが本講の立場である。

「に」の附いてゐる語を副詞的修飾語だとはしないで客語だとする人もあるが、後に文章編で述べる通りに、客語も亦副詞的修飾語の一種であるとする本講に於ては特に之を客語とは指示しないのである。文語に於ては「に」と「へ」とは明かに區別があつて、「に」は動作の歸着する地位を示し「へ」は動作が進行してゆく目標を示すのである。(尤も「に」を動作の方向を示す場合に用ひた例もあるが普通は區別してゐる。)然るに口語に於ては區別が撤廢されてゐるかの如くに見える。けれどもよく觀察してみるとやはり使用の立場が違ふのである。たとへば、

水に溺れた。 雨に濡れた。 毒に當つた。

の如き場合の「に」は決してこれを「へ」に變へる事は出来ないのである。これこの「に」は時間若しくは空間關係を指示してゐないからである。ところが、

東京に行く。 學校に行く。 明日に延ばす。 來年に跨る。 過去に溯る。 箱に詰める。 などの「に」はこれを「へ」に變へることも出来るのである。これ空間若しくは時間を表す「に」であつて、その空間若しくは時間關係が進行作用に結びついて考へられる時は「へ」と變へても差支ないのである。

椅子へ掛ける。 電車へ乗る。

といふのは動作を進行させて「掛ける」「乗る」といふ動作を行ふことを示すので、何處までも進行概念が基本である。換言すれば「椅子へ向つて掛ける」のである。「電車へ向つて乗る」意味なのである。

椅子に掛ける。 電車に乗る。

は動作は進行性であらう何であらうと、唯その動作の結果を靜的に考へて掛けた座席が椅子であり、乗つた乗ものが電車であつた意味なのである。若しこの靜動の區別に考へ及ばないならば、「に」と「へ」とは全く差異が無いと思はれるのである。口語で「に」と「へ」とが通じて用ひられる様になつた原理はこの考へ方の立場の近似から來てゐるのである。

(四)を

文語にも口語にも用ひられる助詞である。前項の「に」が靜的目標であるに對して、これは動的目標と言はるべきものである。而して、そのつく語をして下の語に對して副詞的修飾語たらしめることは「に」と同様である。

1 そのつく語をして所謂他動詞に對する所謂客語たらしめる場合。

動作の影響を直接にうける對者を示すといはれるものである。所謂客語は勿論副詞的修飾語である。

花をめで、鳥をうらやみ、霞をあはれば、露をかなしぶ。(古今集、序)
茶をのみ、菓子をとべ、話をする。(口)

2 動詞によつて表されてゐる動作をなす主體が移動することを示し、その移動する地點を「を」のついた語が示す場合。

國を去る。

空を飛ぶ。

川を渡る。

路を歩く。

門を過ぎる。

山に登る。

家を出る。

右の「を」の上にある體言が客語であるか無いか、延いては下の動詞が他動詞であるか自動詞であるかといふやうな議論がやかましいのであるが、こんな詮索は無用である。下の動詞に對して「を」を伴つた語はみな副詞的修飾語なのである。従つて、下の動詞の自他の區別の必要もない。

3 古來「に」に通ふ「を」と稱せられる場合。

逢阪にあふやをとめを道とへばたゞにはのらすたまぢをのる。(日本書紀)

たらちねの母を別れてまことわれ旅の假庵にやすく寝むがも。(萬葉集、四三四八)

志賀の山にて、女を逢へりける。(古今集)

久しう住みける家を住まじとて外へ移るに、(貫之集) (以上の例「廣日本文典」一七一頁参照)

これ等の「を」をよく考へて見ると、いづれも動作の動的目標を示してゐるもので、我の動くと同時に對者も動くことを示すものであつて、2の場合の更に一步進んだものであつて、「に」の様に靜的目標を示してゐるのではないから、「に」に通ふ「を」といふのは妥當ではない。

4 「を」の起源をいへば、もとは感動を示す助詞であつたものが、次第に格を示す助詞に變つたものであらうと言はれてゐる。併し、現代では感動助詞の「を」と格助詞の「を」並びに接續助詞の「を」と格助詞の「を」とを混同しないやうにする必要がある。

(五)と

文語にも口語にも用ひられる助詞である。これも體言又はそれに準ずる語について、その語を下の語の副詞的修飾語にする助詞である。その場合は次の通りである。

1 他と共同する場合の目標を示す。

子、母と眠る。 膝と談合せよ。

AはBと等し。 それはこれと同じだ。(口)

私は妹と出かけます。(口)
助詞は助動詞と異なり。

2 物事を指定する場合の目標を示す。

氷、水となる。 雀、蛤となる。

彼はたうとう首相となつた。(口)

股肱とたのむ。 彈丸雨霰と散る。

國の親とあがめる。(口)

江戸を東京と改む。 山本といふ人來る。

日本外史と名づく。

父は明日歸るだらうと思ふ。(口) 敵艦見ゆといふ信號あり。

秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる。(古今集)

かへりける人來れりと言ひしかばほとほと死にき君かと思ひて。(萬葉集、三七七二)

「女御は后につげる女官なり。」と花鳥餘情に註してある。(口)

右の例の中、引用の語句をうける時には、意義の完結した形(引用文は體言の資格に立つのである)をうけるのが本則である。もし、それが終止形以外である時は、何等かの意味で完結してゐるものか(係結の關係とか命令とか)、或は省略したものでなければならぬ。しかるに、さういふ意味でなしに活用言の連體形から連る「と」があつて、「文法上許容ニ關スル事項」の十二で次の様に定められてゐる。

てにをば「と」ノ動詞、使役ノ助動詞、受身ノ助動詞及時ノ助動詞ノ連體言ニ連続スル習慣アルモノハ之

ニ從フモ妨ナシ。

例 月出ヅルト見エテ。

嘲弄セラルルト思ヒテ。

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ。

萬人皆其德ヲ稱ヘケルトゾ。

これに就いて「現行普通文法改定案調査報告之一」(一、二頁——二〇頁)には次の如く説明してある。

天爾乎波ノトニテ、上ノ句、又ハ文ヲ指ス場合ニハ、必ズシモ終止形ヲ受クルヲ要セズ。佐行變格、良行變格ノ動詞、形容詞及ビ助動詞ノず、じ、まじ、べし、なり、たり等ノ外ハ、總テ句末ノ活用語ヲ連體形トスルヲ通則ト定ム。

第一例

こゝに最怪しき事こそあれ」といへば。

悪しき事とぞ思ひけん」といへば。

第二例

鶏の聲に催されて」とかき云々。

鶏の聲は孟嘗君がそれにや」ときこえ云々。

第三例

其利益は、實に尠少ならず」と思ふ。

敵軍は、此次の役にも、亦必ず勝つこと能はじ」と思はん。

立腹などする事の、甚厭はしく思はるればなり」といへば。

彼我會戰の機、既に熟したり」と聞けり。

三千の客、僅に去れり」といふは、
尙更に、三十萬圓を贈與すべし」と聲言す。

第四例

終に、其決議を見るに至らざりし」といふ。

新たに、方針を立つる」とは信ぜられず。

よしや、世人の疑惑をして、益々深からしむる」といへども。

論語は、孔子の弟子の編める」と思へば。

近日、再び國債を起さる」と聞く。

彼は、逸早くも、我が此手段に由りて、機先を制せんとする」と知りて。

幾多の星霜を歴る」とは聞けど。

理由、此用格ニツキテハ、「玉轂」ニ

すべて、といふ詞の上の受け、定まれる格あることなるを、今の人のつゞけざまはいとみだりなり。定まれる格とはたとへば、「花さきぬ」といひて「咲きぬると」とはいはず「郭公聞きつ」といひて「聞きつ」とはいはず、(中略) これらも、古人は自らよく辨へて、をさく誤ること無かりしを、近き世の人は、此別を知らず亂りにつゞくるなり、歌のみならず、文にも道の記などに「某山をこゆるとて」など誰も書く、是れも「こゆ」とて「いふ」こそあれ。

トアリテ、之ヲ其儘ニ解スルトキハ、第四例ハ勿論、第一例ノ係結ヨリ成レル句モ、第二例ノ其末ヲ省ケルモノモ、トモニ引キクルメテ違格ナリトスル外ナシ、サレド第一例ノ事ハ、「玉の緒」ニ其説アリ、第二例ハ、其例ヲ推シテ知ラルレバカクテモアル可ケレド、第四例ニツキテ何トモ言ハレズ。コハ初心ノ爲メニ概略ヲ説カレタルモノトハイヘ、少シク能キニ過ギタル

ガ如シ。サレバ之ガ爲メニ誤解ヲ來シ、上句ヲ指ストハ、必ず終止形ニノミ附クベキモノニシテ、連體形ニ附クモノハ、悉ク失格ナリトスルモノアルニ至レリ。コノ事ニツキテハ、義門ノ「活語雜話」「玉緒線分」等ニモ略々論ジタルガ如ク、是等ハ連體形ノ下ニアルベキものこと等ヲ省略シテ、其意ヲ言ヒ殘セルニテ、其實例「竹取」「空穂」「源氏」以下ニ極メテ多ク、「萬葉集」ニモ「沖つ藻の靡きし妹は紅葉のすぎて往にしと玉章の使のいへば」ナドアリ。「玉轂」を嚴守シテ之ヲ改ムレバ、却テ文意ヲ損ズルモノ少カラズ。今、中古物語中ヨリ著明ナル用例ヲ抜キ出テテ、之ヲ證スルコト左ノ如シ。

このをさなきものはこはく侍るものにてたいめんすまじき」とまうす。(竹取物語)

されどおのが心ならずまかりなんとする」といひて。(同)

山のともがらこぞりてゐてまうできつる」との給ふ時に。(空穂物語俊蔭内閣古鈔本細井本)

ものゝふののこれはおほやけのひとのとらへにくる」とおもひて。(同)

さるけたものゝなかにひとりいてとまりぬる」とはみえたてまつる。(同)

おもしろきものゝねのきこゆればたづねまいりきつる」とて。(同)

たま〜此道にまいりいりければかうだにわかまへられ侍る」といふ。(枕草子春曙抄慶長活字本萬載抄)

ながさせ給ひけるがかへりまいりたる」とて。(同)

ちやうもんする」とたちさはぎぬかつくほどにも。(同)

なにかし、この寺にこもり侍る」とはしろしめしながら。(源氏物語若紫湖月抄)

木草の花ども、色く〜にちりまじり、にしきをしける」とみゆるに。(同)

うへこそ、この寺にありしげんじの君こそおはしたなれ、などみ給はぬ」との給ふ。(同)

御手よりもわかびてならひ給へればいとかたはらいたく侍る」と聞ゆ。(同)

今はなき人となり給にける」とおぼすがいみじきに。(同)

中古文ニ於テモ右ノ如ク、「空穂」ハ俊隆ノ一卷、「源氏」ハ若紫ノ一卷ノミニ在リテモ、上ニ擧グルガ如キ數例ヲ見出スコトヲ得タリ。サレバ、他ノ諸卷ハ言フニ及バズ、是レヨリ以下ノ日記、物語ノ通ジテ、搜ラバ其夥シキハ推シテ知ルベシ。但シ中古ノ諸例ハ、皆前ニ云フガ如ク、連體形ノ下ニ、ものなりことよナドノ省カレタルモノノミナリト雖モ、鎌倉以後ヨリ今日ニ至ルマデノモノニハ、省否ニ拘ハラズ、連體形ヲ受クルモノ漸ク多ク、

あさましき餓鬼の報をうくる」といへども (寶物集上)

御遊も、未だをばらざるさきに、御前をまかり出でらるゝ」とて。(平家物語)

アノ殿ノ女房ハイタダキニ毛一ツモナキ」トコソ承ハレト云。(沙石集三)

人ノ道理ヲ申事有レバ涙ヲナガシ感ジ申サレケル」トカヤ。(沙石集三)

心すこさもかざりなきに、みちのくたびれとりそへて、しづかに念佛する」とおもふ程に。(本願鈔上)

船史相ト申セシ人、コシキノ中ニヲキ、ムシテ物ニ移シ、讀ミタリシ」ト云。(神明鏡)

落葉の衣は、かさぬる」といへども (今川貞世落書露顯)

此打上ゲ後、日露戦争の活動寫眞を興行する」との事。(三十八年二月二十日時事新報)

來る三月六日試験の入学せしむ」とぞ。(三十八年二月十九日日々新聞)

百二十五列車に滿載したる貨物を一船に存了する」とはミネツタ號の腹も亦大なるかな。(同二月十八日中央新聞)

同時に食堂列車に連結せしむる」となり。(同二月十七日萬朝報)

當初に中止の必要なかりし」とせば。(同二月十九日讀賣新聞)

ノ如キモノ少カラズ。サレドモ、佐行變格す、良行變格動詞ノ語尾リ、形容詞ノ語尾ノし、助動詞ノすじなりたりべしノ

如キハ、今日ニ於テモ、(古來連體形ヲ受クル例ナキニアラズト雖モ)尙終止形ヲ以テ受クルヲ常トナセルコト第三例ニ示ス

ガ如シ。是レ即チ、本項ノ如キ規定ヲ要スル所以ナリ。

3 物事の情態を表す語句の下に附いて、その語句が副詞的修飾語の地位にあることを確實にする。觀念的にその副修の程度を強めるのである。

は。ら。は。ら。と。散。る。 つ。く。づ。く。と。眺。める。 ゆ。ら。ゆ。ら。と。漂。ぶ。 輕。々。と。さ。し。あ。げ。る。

右は「はらはらと」「つくづく」と「ゆらゆらと」「輕々と」を一つの副詞と見ることが歴史的に眺めて正しいやうであるから、「と」を助詞と見るよりも、副詞の語尾と見るべきである。しかし、「はらはら」「つくづく」「ゆらゆら」「輕々」だけでも副詞として使はれ得る事や、又、

散。り。散。り。と。な。つ。た。 あ。り。あ。り。と。見。え。る。

のやうに動詞の連用形を二つ重ねて副詞的修飾語とする時に「と」を加へる事のある事などから一つの助詞と考へられ易いのである。

なほこの場合の「と」を形容動詞の語尾の「と」と混同してはならない。併し兩者の區別は判然とつけられる。即ち形容動詞の方は活用の語尾の一つに「と」が現れたのであつて、他の活用語尾をも有し得るのであるが、さうでない、たとへば「散り散りと」「ありありと」「離れ離れと」「別れ別れと」の如き場合は決してその語全體が活用語では無いのであるから、前者と同一には論じられないのである。

4 前に述べた「に」と「と」の異同關係を比較してみることは一つの研究問題である。

(1) 有りと有らゆるもの。(外面的で範圍を示す。)

雨が降りに降る。(内面的で程度を示す。)

(2) 水が湯となる。雀が蛤となる。兄とあがめる。(相對的で態とらしいところがある。)

水が湯になる。夏が秋になる。兄になる。(絶對的で自然らしいところがある。)

- (3) 人生を夢と見る。(夢でない人生を夢と見るのである。)
 - 友達を夢に見る。(夢の中の素材に友達が入り込むので、友達は夢と調和する。)
 - (4) 人と語る。(語る者と人とが對等的である。)
 - 人に語る。(語る者が主で人に向つて働きかけてゆく。)
 - (5) 三と二を加へる。(對等關係)
 - 三に二を加へる。(主從關係)
 - (6) 十時と五分。(十時五分のこと。十時と五分が對等的に加へられる。)
 - 十時に五分。(九時五十五分のこと。十時が主で五分が從で、不足の場合。)
 - (7) 花が雪と散つた。(雪でない花が雪のやうに見える。)
 - 花が風に散つた。(花が風のために散らされたこと。)
- 5 從來二つ以上の事物を並列の位置に於て列擧することを示す場合に用ひられる「と」を格助詞の中に入れて説いてゐたのであるが、これは格助詞の本質から考へて正しくない。これは並立助詞(或は並列助詞)として格助詞から獨立せしめなければならぬ。橋本博士は「國語法要説」ではつきりこれを明言された。これに従ふべきである。(後節並立助詞の條下参照)

(六)

體言又は體言に準ずる語に附いて、下の語に對して副詞的修飾語たらしめる語で、文語にも口語にも用ひられる。1 動作の進行する方向を示して上の語を副詞的修飾語に立てる。

神戸へ行く。 北へ走る。 南へ進む。 遠くへ出かけました。(口)

どちらへゆけばいゝのでせう。(口)

2 前に「に」の條下で述べた様に、時間關係が進行作用に結びついて考へられる「に」の代りにこの「へ」を用ひることがある。これは口語に限られた用法である。

箱へ詰める。(口) 屋根へ上げる。(口) 部屋の隅へ寄せる。(口) 財産を子へ譲る。(口)

この場合は恰も動作の歸着する點を示すやうであつて、「に」が場所を示し「へ」が方向を示すといふ文語の本義が口語では破れて了つてゐるやうに思はれるが、

席に着く。 机に載せる。 父に頼む。

席へ着く。 机へ載せる。 父へ頼む。

の兩者を比べて見るとその間に差違がある。「に」の方は進行作用が主でなくそのおちつき所が主なのである。結果が主なのである。之に反して「へ」の方は他から進行し運動して來る作用が主なのである。結果は當然來たまでなのである。「席に着く」は着く作用の終點である場所を主として示したのである。「席へ着く」は席に向つて着くといふ作用を進行させることを示すのが主である。故に進行的意義を強調する場合には必ず「へ」を用ひて「に」を用ひない。又進行的意義に結びつけて考へられぬ場合の「に」の代用には決して「へ」を用ひることはない。

この橋から東へ三十間を自動車の置場とする。(口)

三番さんへ御電話。(口)

の例をあげて、「標準日本語法」(二四二頁)で、「三十間」は一間二間三間と數へて行く意味に於て進行的であ

り、「御電話」は電話のかゝる作用を表してゐるから「へ」が使つてあると説明してゐるのは同感である。併しこの場合は「東へ三十間寄る（進む、行く）」「三番へ御電話がかゝる」の如く下に用言の省略された形と見られるから、「三十間」「御電話」だけで説明しなくてもよいと考へられる。けれども「へ」の意味に進行作用があることには變りが無い。

翻つて古い例を考へてみると、方向と歸着點（「へ」と「に」）は嚴重に使ひ分けられてゐたやうに思ふ。

深草の里に住み侍りて京へまうで來とて、（古今集）

住む館より出でて船に乗るべき處へ渡る。（土佐日記）

京にありわびてあづまへ行きけるに、（伊勢物語）

三河の國八橋といふ所に至りぬ。（同上）

僧正遍昭がもとに奈良へまかりける時、（古今集）

初瀬へ詣で侍りける道に佐保山のもとにまかり宿り侍りけるに、（拾遺集）

尤も次の如き例はあるが、稀であらう。

東の方に行きて住む所求むとて、（伊勢物語）

(七)より

副修格の助詞であることは前數語と同様である。文語にも口語にも用ひられる。

1 動作作用の起發する基點を示す。

音樂會は午後六時より始まる。（時間）

榛名丸は横濱港より出帆せり。（空間）

この場合口語では「から」を用ひる。

酒は米より作る。 空氣より窒素をとる。 一旦の失敗より最後の成功を得たり。

右の「より」は「によりて」の意味といはれるが、よく考へれば出自の基點といつてよい。但し、次の「より」は出自の基點ではない。文語の「にて」口語の「で」に當るものである。（今でも方言で「汽車から行く」「船から行く」といふ地方がある。）

つぎねふ山城道を他夫の馬より行くに已夫し歩より行けば見ること泣のみし泣かゆ。（萬葉集、三三一四）

沖繩方言にも *mima kara ichun*（馬から行く）といふ用法が残つてゐるさうである。

これに關聯して、金澤庄三郎氏の「日本文法新論」（二六六頁—二六八頁）には次の如き注意すべき説が見えてゐる。これを普通に與格 (dative) と考へて居るが、これは寧ろ位格 (locative) 又役格 (instrumental) から轉じたもので、その語原は動詞であらう……即ち「家に住む」「淺間の獄に煙の立つを見て」「道に聽きて途に説く」は明かに位格に用ひられて居る。又「道に人に説く」といふ場合の二つの「に」は意味が同じでない。「人に」の「に」はもとより與格であるが、「道に」の「に」はまた多少役格の様な心持もする。

蜜柑は紀州より産す。 船より行く。

「にて産す」「より産す」「から産す」はいづれも「に産す」と同じ意であつて、これ等を「にて行く」「より行く」「から行く」などの役格と較べれば、にに役格の意義が含まれて居る様に思はれる。「花見に行く」「病に仆れる」「刃に伏す」などは更に明瞭な例である。朝鮮語の役格は *ro* といふハ爾袁波で表すのであるが、これは明かに動詞 *ir*（有り）から轉じたもので、國語カラヨリのラ、リに相當するものである。國語にの起原も亦動詞であらうと思はれる。

古代に於ては「より」を用ひて動作の經由する場所や地位を示すことが行はれた。

あ。た。り。よ。り。だ。に。な。歩。き。そ。(竹取物語)

み。な。そ。こ。の。月。の。上。よ。り。漕。ぐ。舟。の。棹。に。さ。は。る。は。桂。な。る。べ。し。(土佐日記)

沖。よ。り。舟。ど。も。の。う。た。ひ。の。の。し。り。て。こ。ぎ。行。く。な。ど。も。き。こ。ゆ。(源氏物語、須磨)

蘆。荷。ひ。た。る。男。の。か。た。る。の。や。う。な。る。姿。な。る。こ。の。車。の。前。よ。り。い。き。た。り。(大和物語)

右の如き「より」は古來より「を」に通ふ「往」と言はれたものである。併し、「を」はその地點を主眼として

そこで動作の行はれてゐることを示すが、「より」は動作がある場所を通つて更にひきつゞき他へ行くことを示

すので、嚴密に考へれば差異があるといふ山田博士の高説に従ふべきである。(日本文法論 五七三頁—五七四頁參

照)

2 比較の基準を示す。

親の恩は山より高く海より深し。

花より團子。

こんなものでも無いよりかもしれません。(口)

老いて後、子に後れたるより悲しきはなし。(平家物語)

地震は大阪より東京の方がひどかつた。(口) 父より母の方が厳しい。(口)

3 體言の形修語になる場合がある。(これは次にのべる「から」も同様である。)

遠江より東は乗らず。(平家物語)

泣くより外の外もなし。

八時より後にお越し下さい。(口)

二月一日より前に提出しなければならぬ。(口)

口語に於けるこの場合の使はれ方で、その修飾される體言が「ほか」といふ語である時は、往々「ほか」といふ語が略されて、下には必ず否定の助動詞が来る。

新聞は朝日新聞より(ほか)とつてをりません。(口)

友人は一人より(ほか)ありません。(口)

ほん物とより(ほか)思はれない。(口)

参考書が一冊より(ほか)無い。(口)

これ等の例に於ける用法に就いては、「日本口語法講義」(一五六頁)の説を大體賛成してよからうと思ふ。即ち「これらの『より』は意義が既に轉じてそれ以外の事を否定する意をあらはすのである。しかるに、之を『限る』意であるといふ説がある。この説は一面だけは通ずる様に見えるが、本來の消極的性質は失せずに残つてゐるか、これを積極的に『限る』といふのは不當である。上の例を限る意として譯して見ればその不當なことは直に知られるであらう。」と論じてある。併し「より」には決して否定する意味は無いので、そのつく上の語を基準にしてゐるので、下にある「ほか」が略されてゐなければ、「ほか」に對する修飾を示すのである。修飾作用は一つの限定作用であるから「限る」といふ説があつてもあながち不當でもあるまい。「ほか」を係助詞とする立場も勿論ある。

4 奈良朝時代に於ては「より」は「より」「よ」「ゆり」「ゆ」の四つの形で用ひられてゐる。

わが園に梅の花散る久方の天より雪のながれ来るかも。(萬葉集、八二二)

天地の遠き始よ世の中は常無きものと語りつきながらへ來たれ。(萬葉集、四一六〇)

おしてゐるや難波の津ゆり船よそひあれは漕ぎぬと妹に告ぎこそ。(萬葉集、四三六五、元暦校本による)
 天地の分れし時ゆ神さびて高く貴き駿河なる富士の高嶺。(萬葉集、三一七)
 吉澤博士の「國語國文の研究」(二七七頁)中「萬葉集に用ひられたる助詞ユリ、ユ、ヨリ、ヨについて」には假名書の使用統計表がかゝげて、次の結論が下してある。

- 一 ユ、ヨの形は歌以外には用ひられてない。(音数の制限から歌にのみ用ひられたものであらう。)
- 二 ヨリの形が最も多く用ひられてある。(當時全盛の語であつた。)
- 三 ユリの形が最も少ない。(用法が局限され、當時殆ど衰滅に近づき、餘喘を保つて居たにすぎない。)

(八)から

副修格の助詞であつて、文語も口語も共に用ひられる。但し現代文の文語文には用ひない。

1 動作・作用の起發する點を示すこと「より」と同様である。この用法は文語にも口語にもある。

去年から山籠して侍るなり。(蜻蛉日記)

女のもとからいとあたなりといひたりしかば。(九條右大臣集)

こゝろもとなさにあけぬから船をひきつゝのぼれども、(土佐日記「本土佐日記」三三七頁による)

競技會は明日から始まります。(口)

地震は丹澤山から起りました。(口)

仕事をすましてから行きます。(口)

酒は米から造り、香水は花から取る。(口)

次の「から」は動作作用の通過してゆく地點を示すものといはれてゐる。「より」のそれとよく似てゐる。

人の親のをとめ見据ゑて守る山邊から朝な朝な通ひし君が來ねば哀しも。(萬葉集、二三六〇)
 月夜よみ妹に逢はむと直道から吾は來つれど夜ぞふけにける。(萬葉集、二六一八)
 ほととぎす鳴きて過ぎにし岡傍から秋風吹きぬよしもあらなくに。(萬葉集、三九四六)

2 體言に對して起點を示す場合前述の「より」の3の用法と同じである。口語に限られた用法である。

此處から東が靜岡縣だ。(口)

角から二軒目が郵便局です。(口)

五〇頁から後を省略する。(口)

三階から下に賣店を設ける。(口)

右の例に用ひられた「から」は起點を示すことには變りはないが、下には體言があつて、「から」より上の語をその體言の形容詞的修飾語にしてゐるのである。

藪から棒。 棚からばた餅。

をもこの例に入れてゐる人があるが、「藪から」「棚から」は決して「棒」や「餅」の形容詞的修飾語ではない。これは下に「出る」とか「落ちる」とかの動詞が省かれてゐるので、それに對して副詞的修飾語となつてゐるのである。

なほ、次の例に用ひられた「から」は原因となる條件を示す助詞であつて、所謂接續助詞と言はれるもので、格助詞では無いから混同してはならない。

仕事は済んだから歸ります。(口)

私が讀むから聞いておいで。(口)

(九)

これは文語の格助詞「に」に文語の接續助詞「て」の連つた「にて」の約まつて出來たもの(鎌倉時代に成立したといはれてゐる)で口語にのみ用ひられる助詞である。動作作用の行はれる場所・時限・所由・方便・材料・原因等を示すことによつて、そのつく語を副詞的修飾語の地位に立てるのである。

(1) 動作の行はれる場所を示す場合。

官軍は伏見鳥羽で戦つた。(口)
彼は大阪で生れて東京で育つた。(口)
此處で一と休ませう。(口)

(2) 動作の行はれる時を示す場合。

この仕事は一月で完成する。(口)
商業は三年で止めた。(口)
後でゆつくり話を聞かう。(口)

(3) 動作の行はれる方便や材料を示す場合。

筆記はペンでするに限る。(口)
鄭重な手紙は毛筆で認めるがよい。(口)
急ぐから飛行機で行かう。(口)
味噌は大豆で造ります。(口)

(4) 動作の行はれる原因や由縁を示す場合。

此頃は試験準備で忙がしい。(口)
彼は腦溢血で倒れた。(口)
俄雨でひどくぬれた。(口)
あなたのおかげで助かりました。(口)

右の「て」の原形である文語の「にて」は一語の格助詞と認めて差支ない。副修格の助詞である。

遠き浦々にて沈みはてさせ給ひ、(増鏡)
造鷹が手にてうませたる子にてもあらず。(竹取物語)
懸命の努力にて試験に合格せり。
機關銃にて敵兵を撃退したり。
彼は病氣にて缺席中なり。

但し、次の「にて」は指定の助動詞「なり」の中止形に接續助詞「て」のついたものであるから、右の「にて」と混同してはならない。(この場合の「にて」の代りに「にして」を用ひてもよい場合があるが、格助詞の「にて」の代りに「にして」を用ふることはない。)

月の都の人にて父母あり。(竹取物語)
兄は少佐にて弟は大尉なり。(兄は少佐にして弟は大尉なり。)
變化のものにて侍りけむ身ともしらず。(竹取物語)
九郎はすゝとき男の子にてさふらふなれば、(平家物語)

口語に於ても形は同じ「で」であつて、格助詞でない「て」があるから注意しなければならない。」

(1) 形容動詞の語尾の「で」

天氣も穩かで、氣候もどかだ。(口)

奈良は靜かで、大阪は賑かだ。(口)

右の例に於ける「で」は形容動詞の條下で述べたやうに、「穩かだ」「靜かだ」といふ形容動詞の中止形の語尾である。勿論格助詞ではない。

(2) 指定の助動詞の「で」

これは梅の木で、あれは櫻の木だ。(口)

こちらのが山で、あちらのが川です。(口)

右の例に於ける「で」は指定の助動詞「だ」の中止形である。勿論格助詞ではない。

次の「で」も同じく指定の助動詞「だ」の副詞形と見るべきものである。

それは本である。(口)

それは花でない。(口)

明日は日曜日でございます。(口)

(3) 動詞の活用形の音便のために接続助詞「て」の濁つた「で」

呼んで来い。(口) 泳いでゐる。(口) 本を讀んで来なさい。(口) 死んでしまつた。(口)

右の例中の「で」は接続助詞の「て」が上の動詞の連用形の音便のために「で」となつたもので、格助詞ではない。

以上あげた格助詞の外、古く行はれた格助詞として次のものがある。

1つ

連體格の格助詞である。複合語の中に残存してゐるものを見るのみであるから、古いものに相違ない。

國つ御神	時つ風	天つ日嗣	天つ祝詞	天つ神	外つ宮處	沖つ藻	沖つ波	沖つ鳥
邊つ波	野つ鳥	庭つ鳥	毛つ物(これが後の「けだもの」になつたといはれてゐる。)	底つ石根				
目つ毛	上つ毛野	上つふさ	家つ子	下つ枝	秀つ枝			

2な

連體格の格助詞であるが、文献ではあまり榮えてゐない。複合語中に残存してゐる。

手なごころ	手な底	手な末	水な上	水な底	水な門	水なもと	浪な音	目なかひ
目なじり	目な子							

この語に就いて「奈良朝文法史」(三〇九頁—三一〇頁)には次の如き説が見えてゐる。

今臆測を逞しくすれば、この「な」は琉球語の「ぬ」と同源にして今の「の」も之に發源せるものなるべく、而、「が」は又鼻音的のものにして「な」の喉音化せるものなるべく思はるゝなり。若、果して然らば、次の如き系統を假定するをえむ。

x | na 日本古代の「な」—— ja 日本現代の「が」
 x | nu 日本古代及琉球の「ぬ」—— no 日本現代の「の」
 或は又次の如き系統を有するものにあらざるか。

x | na 日本現代
 x | nu 日本古代及琉球現代—— no 日本現代

余が「が」と「の」と同源ならむと推測する原因は、その代名詞との關係にあり。即、

waja naja taja kono sono

の如く母音諸和よりして一は「が」となり、一は「の」となるものなるにあらすやの感あるによりてなり。かくて一旦「が」と「の」と形と用處と異にするに至りてはじめて意義上の分化を呈し、意義上の分化よりして、更に用法上の隔離を生じ、因果相連關して今日に至れるにあらすや。

3

主格を示す格助詞である。

いなといへど語れ語れと詔らせこそ志斐いはまをせ強語とのる。(萬葉集、二三七)

吾背子が跡ふみ求め追ひ行かば紀の關守い留めなむかも。(萬葉集、五四五)

在千鴻ありなぐさめて行かめども家なる妹いいぶかしみせむ。(萬葉集、三一六一)

うらぶれてかれにし袖をまたまかばすぎにし戀い亂れ來むかも。(萬葉集、二九二七—新校萬葉集による)

この語は以前は不明とされてゐたが岡倉山三郎氏が「主格を示す本來の辭」(帝國文學)明治三十三年一月號)として論ぜられ、山田博士又「奈良朝文法史」(三一三頁—三三四頁)にて詳論を試みられた。この語は單獨でも用ひらるが、下に他の助詞「は」「し」を伴ふこともある。現在の主語を示す格助詞は決してその下に他の助詞を伴ふことはないのに比して甚だ趣を異にしてゐる。

第四節 副助詞

副助詞はその名稱の示すやうに副詞に似た意義と職能とをもつてゐる助詞である。即ち、用言の意義に何等かの關係をもつてゐる語の下に附いて、その用言の意義屬性を修飾するのまつとめとする助詞である。副詞は觀念語であり助詞は形式語であるから品詞として混同することは出来ないが、用言の意義を修飾するといふ點は副詞に似てゐるために副助詞と名づけられたのである。而して、この名稱は山田孝雄博士のはじめて設けられたものである。

前節の格助詞はそれの附く語が下の語に對して如何なる關係的資格をもつかを決定する力をもつてゐる助詞である。之に反して、副助詞は決してそれのつく語が下の語に對して如何なる格に立つかを決定する力をもつてゐないのである。

毎日風ばかり吹く。(口)

本を三冊だけ買ふ。(口)

彼まで怒り出した。(口)

右の例に於て「ばかり」「だけ」「まで」といふ助詞は、決して「吹く」「買ふ」「怒り出した」に對して「風」「三冊」「彼」が如何なる格に立つてゐるかといふことを決定し又表示してゐるのではない。「風」「彼」が下の用言に對して主語であり、「三冊」が下の用言に對して副詞的修飾語であるといふことは、「ばかり」「まで」「だけ」が附く以前からきまつてゐるのである。その格のきまつてゐる語について、ある意義をそへて下の述語にひびかせるのが「ばかり」「まで」「だけ」の職能なのである。即ち、「ばかり」は「吹く」ものが「風」のみで他のものではないことを示してをり、「だけ」も「買ふ」本が「三冊」に限られてゐることを示し、三冊以上でも三冊以下でもないことを明かにしてをり、「まで」は「怒り出す」者が元來あつて、そこへ更に「彼」が加はり來つたことを示すのである。この點をよく考へるならば格助詞と副助詞との相違が了解出来るであらう。

副助詞が主格や副修格の下に附くことは前例の通りであるが、上に主格や副修格を示す格助詞が有る時にはその下に附くのが普通である。

我は彼の名をだに知らず。

終日家にのみ籠り居たり。

何とやら言つたが分らなかつた。(口)

右の如き用法をもつ點からいふと、後に述べる係助詞にも同様の事があるのである。

我は彼の名をも知らず。

終日家にこそ籠り居たれ。

何とが言つたが分らなかつた。(口)

即ち「も」「こそ」「か」といふ係助詞は、前例の「だに」「のみ」「やら」の位置にそのまゝ入りこんでゐるのである。この點で副助詞と係助詞とは區別が立ちにくい。けれどもこれは山田博士の言はれる次の語にて區別が明瞭であらう。「然れども係助詞は用言の陳述の方法を修飾するものにして、副助詞は用言の意義に従屬し、それを支配するものなれば、その支配の對象を異にするなり、従來は用言につきて屬性と陳述の力との二を區別することなかりしが故にかゝ二者を混同したりしなり。」(『日本文法概論』四三九頁―四四〇頁)即ち、副助詞も係助詞も用言にかゝつてゆく點は一つであるが、そのかゝり方がちがふのである。副助詞は用言の意義にかゝり、係助詞は用言の陳述作用にかゝるのである。しかしこの點に就いては、「だに」「すら」「さへ」に就いて大槻博士の「廣日本文典別記」(二〇九頁「はも徒」の條に就いての)の説を引用して「このことは副助詞と係助詞との相違が意義の化裁と陳述の支配といふ點には存せぬ事を立證するもので、換言すれば副助詞にも意義の化裁と陳述との二點はあるが、唯係助詞の如くに結びの語句に所謂轉結の法則を有せぬといふ一事を以て係助詞から區別すべきである。即ち係助詞のこの特色を問題にせぬとならば係助詞は副助詞になるべきものである。」(『國語法査説』二三七頁)といふ徳田淨氏の説もある。なるほどと思はれないでもないが、係助詞が係結に關係ある點はとりもなほさず係助詞が意義の化裁を行はない證ではあるまいか。

係結は意義の強弱に關係はあるが意義そのものには關係しない作用であるから、本講では山田博士の説にそのまゝ従つて置く。

副助詞はその本來固有の意義を以て格助詞の上にも下にも位置し又格助詞の代理もするのである。

(一) 副助詞が格助詞の下に来る場合

副助詞と格助詞が重ね用ひられる時は、格助詞の下に副助詞の來るのが通例である。前に擧げた例の他のものを左に擧げておく。この時副助詞をとり去つても、上の格助詞が下に及ぼす關係には變りはない。

絶食中は水をさへ飲みます。

悲しみを色にすら出さず。

「よし。」とばかり言ひて後は語らず。

他人にまで迷惑をかけるな。(口)

火でなどあたためる。(口)

大切なものを何處へかなくしてしまつた。(口)

(二) 副助詞が格助詞の上に来る場合。

道すらにすぐれにあひぬ。(貫之集)

わすれぬさへをわするとやせむ。

川の水が凍るまでになりぬ。

今日のみの命。

自分の事はかりを考へてゐる。(口)

學者などになつても仕方がない。(口)

誰やらがやつて来る様子だ。(口)

その問題だけが解けなかつた。(口)

試験ぐらゐが何です。(口)

どれかにきめて下さい。(口)

但し「だに」だけは格助詞の上に来ることがない。

(三) 副助詞が格助詞の代理をする場合。

家のあたりだに今は通らし。

みこさへうちぐし奉らせたまひて、(狭衣物語)

親すら見失ひたり。

己が道のみ一すちにたどるべし。

運動ばかりやつてゐる。(口)

つれもなき人の心の關守はゆめちまでこそゆるさざりけれ。(風雅集)

小説など借りて来た。(口)

何やら書きつけてゐる。(口)

辨當だけ持つて行かう。(口)

俳句ぐらゐ作つてみたらどうだ。(口)

副助詞は又副詞に似た意義と用法をもつてゐる所から、副詞の下に附くは勿論、體言及び用言の下についで、上の

語と一體になつて副詞的修飾語になることがある。

(一) 副詞の下に副助詞の附いた場合。

お金を少しばかり下さい。(口)

どうかももう暫らくだけお待ち願ひます。(口)

暫らくぐらゐお待ち致しますとも。(口)

右の場合の上の副詞と一體になつて副詞的修飾語となつてゐるのである。

(二) 體言の下に副助詞の附いた場合。

曉ばかり憂きものはなし。

來年まで待たれたし。

來月の初めまで延ばさう。(口)

誰やら見當がつかぬ。(口)

家の高さだけ積みあげる。(口)

休暇ぐらゐ楽しい時は無い。(口)

何やら譯が分らぬ。(口)

右の例でも、上の體言と副助詞が一緒になつて副詞的修飾語となつてゐるのである。

(三) 用言の下に副助詞が附いた場合。

明日完成するばかりになつた。(口)

雀は死ぬまでさへづつてゐる。(口)

どうなるやら見當がつかない。(口)
彼は儲けるだけ使つてしまふ。(口)
死ぬぐらゐなぐられた。(口)

右の例の中の副助詞も上の用言と一緒になつて副詞的修飾語となつてゐるのである。

以上の體言と用言とは副助詞を除いてしまふとそのままでは副詞的修飾語となり得ないものである。これによつて見ても副助詞の性質がよく分るであらうと思ふ。

副助詞が主語・副詞的修飾語及び形容詞的修飾語に附くことは、上述した所で分ると思ふが、なほ次の如く體言若しくは用言が文の述語となつてゐるものにも附いて述語の一部分をなす。

弱つてゐるのは私ばかりです。
述語

採用されるのは何歳までですか。
述語

持つて来たのは辨當などだ。
述語

移民の許されてゐる所は南米だけです。
述語

詳しく事情を知つてゐるのは巡査ぐらゐだ。
述語

この時には下に指定の助動詞のあることが注意される。指定の助動詞は形式用言ともいはれて陳述作用をするとも考へられる特殊助動詞なのであるから、上に副助詞の來ることもあり得るのかも知れない。

以上で大體副助詞の特質が分つたと思ふから、以下これに屬する助詞の各々に就いて意義と用法を説明しよう。

(一) だに

文語のみに用ふる副助詞である。その擧げ示した點を主として他を顧慮しない意味をもつてゐる。即ち全體に對する一部分、重いものに對する軽いもの、程度の高いものに對して低いものを指示するのである。而して指示したものに依つて指示しないものを言外に悟らしめようとするのである。かういふ意味の下に下の用言の意義を化裁するのである。「だに」を今日の口語に譯するならば「でも」「だけでも」「なりと」「だけなりと」「さへ」等をあてればよからう。

1 「だに」はその用ひられ方によつて確定に用ひられるものと假定に用ひられるものとの二種にすることが出来る。

富士谷成章の「あゆひ抄」には師の教へとして「くらぶるだに、あらますだにあり、同じころを、あらまさずしておいらかによめば、くらぶるころあらはるゝ也。」と書いてある。「くらぶるだに」といふは確實文に用ひられた「だに」であり、「あらますだに」といふのは假定文に用ひられた「だに」である。

(1) 假定文に用ひられた「だに」(「なりと」「だけなりと」が當る)

命だに心にかなふものならば何か別の悲しからまし。(古今集)

散りぬとも香をだにのこせ梅の花戀しき時の思ひ出にせむ。(同)

(2) 確定の文に用ひられた「だに」(「さへ」が當る)

み山には松の雪だに消えなくに都は野邊の若菜摘みけり。(古今集)

雪とのみふるだにあるを櫻花いかに散れとか風の吹くらむ。(同)

2 「だに」は「すら」と同義に用ひられる事があるが「すら」は假定の文には用ひられない。

3 「だに」に「も」が附いて「だにも」となり、更に「に」が省略されて「だも」として使はれることがある。こ

の時には多少咏歎的の意味を表すのである。

三輪山をしかもかくすか雲だにも情あらなもかくさふべしや。(萬葉集、一八)

夢にだもあふと見るこそうれしけれ残りの頼み少なけれども。(和泉式部日記)

周公ヲ夢ニダモ見ザルトアルホド、(蒙求抄五)

4 上位語及び下位語との關係は次の通りである。

はかなきことだにかくこそ待れ。(源氏物語、帚木) (主語の下につく)

知るといへば枕だにせで寝しものを塵ならぬ名の空に立つらむ。(古今集) (格助詞の代理)

山しなの音羽の山の音にだに人のしるべく我こひめかも。(古今集) (格助詞の下)

一文字をだに知らぬ者しが足は十文字にふみてぞ遊ぶ。(土佐日記) (同)

女御とだにいはせずなりぬるが、あかず口惜しうおぼさるれば、今ひとときさみの位をだにと、贈らせ給ふなりけり。(源氏物語、桐壺) (同、格助詞の上にもつく)

今しばしだにおはせん。(落窪物語) (副修語の下)

御覽じだにおくらぬ覺束なき。(源氏物語、桐壺) (連用言の下)

(II)

文語のみに用ひる副助詞である。一事をあげて例として示し他を類推せしめる意味をもつてゐる。前述の「だに」の確定文に用ひられた場合に似てゐる。假定的場合には「すら」は用ひない。「すら」を今日の口語にあてるならば「でもやはり」「やはりなほ」「できへも」等をあてる事が出来る。

1 「すら」と「だに」の區別

次の如く、

「だに」——重いものを舉げてその餘の軽いものを推しはからせる語。

「すら」——軽いものを舉げてその餘の重いものを推しはからせる語。

と説く人があるが、又人に依つてその輕重舉推を全く逆に説く人もあり、又、二語共に事物の輕きをあげてその餘の重きを言外に引證するといふ人もあるので、諸説まちまちである。徳田淨氏はこれに就いて、

言問はぬ木すら妹と背有りとなふをたゞ獨り子にあるが悲しさ。

融けてすら寝ぬほどもなき五月雨を寢覺めがちにてあかず頃かな。

の如く重きを言はんとして輕きを示すもの、

我すらも誠の道に入りぬなり一人や長き闇にまよはむ。

山にすら見ることの稀なる鳥のいかにしてこの里には出で來たりけむ。

の如くに重きを舉げて輕きを推定させるものと二者がある。前者についてはタニの輕きを舉げて重きを類推させるのと同じであるが、重きを言はんとするといふ點が異なつてゐる。これを後者に見合せるとタニとの相違も明白だと思ふ。(國語法査説二三八頁—二三九頁)

と言つてをられる。要すに「すら」は「だに」よりも他のものと比較する意味が強い様である。古く「だに」「すら」は次の「さへ」と共に本來の意義に於て區別を保つて使用されたものに相違ないが、中古時代に於ては既に「すら」は衰滅に近づいて「だに」の中に含まれて「だに」がこれに代つたものらしい。和歌にのみ見えてしかも用例の少くなつてゐるのは一般用法のすたれて來たことを物語るものである。この點から「だに」の使用範圍が廣く、「すら」の使用範圍の狭いことが言へる。即ち、「すら」の用ひられる所に「だに」は用ひられる可

能性が多いが、「だに」の用ひられる所に「すら」は必ずしも用ひられないのである。

2 院政鎌倉時代には「そら」といふ形に於て用ひられてゐる。

畜生ソラ哀レニ爲ル人ニハ尾不_レ振ヌ様ヤハ候フ (今昔物語)

然レハ蜂ソラ物ノ恩ハ知ケリ (同)

又心ナキ野邊ノ雉ソラ子ヲ思故ニ野火ノ爲ニ身ヲホロボストカヤ (延慶本平家物語)

山田孝雄博士の統計によると「すら」は延慶本平家物語には二個の用例があるだけで、日常談話語では「そら」が用ひられたものであらうか。その「そら」も主語についたものばかりになつてゐることは、次第に用ひられなくなること示すものである。けれども室町時代にもなほ「すら」は用ひられてゐる。

聖賢ノ上スラ如此ナルニ不思議ヤ大公カ (四河入海)

善ノ随分ト思處スラクツレテノクルソ (同)

3 上位語及び下位語との關係

草木すら春にはなべてあふさかの、(躬恒集) (主語につく)

行方すら知らぬ人あり。(格助詞の代理)

道すらにすぐれにあひぬ。(貫之集) (格助詞の上につく)

たなばたのまらかけにすることよひすらなたちさわぐ天の川なみ。(高光集) (副修語の下につく)

とけてすらぬるほどもなき梅雨にねざめがちにてあかす頃かな。(曾丹集) (同)

(三) さへ

これは「だに」「すら」とは全くその原意を異にし、既にある事物の上に更に他の事物を添加する意味を表す副助

詞である。語原は「そへ」であらうといはれてゐる。(廣日本文典別記)では或は「そのうへ」の約ならむかとも思はるといつてある。副助詞としては文語にだけしか用ひられない。口語にも「さへ」はあるが、それは副助詞でなくて係助詞に變つてゐる。口語に譯すれば「までも」「までが」「おまけに」「……だけでなく……までも」等が當るであらう。

橘は實さへ花さへその葉さへ枝に霜ふれどいや常葉の樹。(萬葉集、一〇〇九)

植ゑし植ゑば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯れめや。(古今集)

月をだにあかす思ひてねぬものを杜鵑さへ鳴きしきるかな。(古今六帖)

梓弓おして春雨今日降りぬ明日さへ降らば若菜つみてむ。(古今集)

1 上位語及び下位語との關係

風高く邊には吹けども妹がため袖さへぬれて刈れる玉藻ぞ。(萬葉集、七八二) (主語の下につく)

前の世にも御契りや深かりけむ、世になく清なる玉の男御子さへ生れ給ひぬ。(源氏物語、桐壺) (同)

涙をさへなんおとし侍りし。(源氏物語、帯木) (格助詞の下につく)

うつゝにはさもこそあらめ夢にさへ人目をもると見るがわびしさ。(古今集) (同)

かぎりなき思のまゝによるもこむ夢路をさへに人はとがめじ。(古今集) (格助詞の上につく)

かくさへなりたまへるものを。(狭衣物語) (副修語の下につく)

みこさへうちぐく奉らせたまひて。(同) (格助詞の代理)

「さへ」が格助詞「に」の上に来ることは右の例中に見える通りであるが、「だに」は「に」の上に来ることはない。これ「だに」の中には格助詞の「に」が融化されてゐるからであらうと言はれてゐる。「さへ」が係助詞の上に

來ることは次の例の通りであり、副詞的修飾語と重なることは前の「梓弓」の歌で明瞭である。

鶯のきゐつゝなけば春雨にこのめさへこそぬれて見えけれ。(貫之集)

2 「だに」「すら」「さへ」はお互に重なることがある。

いのり來る風間と思ふをあやなくもかもめさへだに波と見ゆらん。(土佐日記)

こたみだにさへおりすばいとつべたましき様になむ。(蜻蛉日記)

物いはぬよものけだものすらだにもあはれなるかな親の子を思ふ。(金槐集)

次の歌は重用ではないが一首の中に「すら」と「だに」が用ひられてゐる。

春日すら我が待つ人のこじとだにいはすばあすもなほ頼ままし。(貫之集)

又、「これにさへ腹さへ立ちぬれ。」(和泉式部日記) などいふ例もある。

四のみ

文語にのみ用ひられる副助詞である。ある事物がそれだけに限られてゐることを示す所謂制限の助詞である。口語に譯すれば「ばかり」とか「だけ」とかが當るやうに思はれる。

1 上位語及び下位語との關係

見まく欲り戀ひつゝ待ちし秋萩は花のみ咲きてならずかもあらむ。(萬葉集、一三六四)(主語の下につく)

山のみ降りし雪ぞ、(萬葉集、四二二七)(格助詞の上につく)

音のみ聞きてや戀ひむまそ鏡たゞ目に逢ひて戀ひまくもいたく。(萬葉集、二八一〇)(同)

かれ聞き給へ。この世とのみは思はざりけり。(源氏物語、夕顔)(格助詞の下につく、係助詞の上にもつく)

かくのみや息づきをらむ、かくのみや戀ひつゝあらむ。(萬葉集、一五二〇)(副修語の下につく、係助詞の上にもつく)

百傳ふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ。(萬葉集、四一六)(同)

人知れぬ大内山の山守は木隠れてのみ月を見る哉。(千載集)(同)

2 「のみ」が活用言につく時は連用形につく場合と連體形につく場合とがある。

(1) 連用形につく場合

夕さりは歸りのみしければ、(古今集)

新らしき春さへ近くなりゆけば降りのみまさる年の雪かな。(拾遺集)

隠りのみ居ればいふせみなぐさむと出で立ち聞けば來鳴くひぐらし。(萬葉集、一四七九)

白露のおかまく惜しみ秋萩を折りのみ折りて置きや枯らさむ。(萬葉集、二〇九九)

(2) 連體形に連る場合

すさまじきのみにもあらず、わりなし。(枕草子)

かくてありなば思ひの亂るのみなり。

3 「のみ」が文の終りに用ひられることがある。

玉葛絶えぬものからさぬらくは年のわたりにたゞ一夜のみ。(萬葉集、二〇七八)

或る人のあなこゝろなと念ふらむ秋の長夜を寝ね臥してのみ。(萬葉集、二三〇二)

あちの住むすさの入江の荒磯松我を待つ兒等はたゞ一人のみ。(萬葉集、二七五一)

下に用言が略されてゐるとみなければ副助詞の性格を失ふことになる。

4 「のみ」と「ばかり」の區別に就いては、富士谷成章の「あゆみ抄」の中に、「のみ」は同一で外がまじらず、一すぢを改めず、事の心に就いていふとなし、「ばかり」は多くの中の一つをいひ、二つ三つには及ばず、物の

さまに就いていふとしてある。而して、この説に對する批判は「國語法論攷」(四四三頁—四四八頁)に詳しく見えてゐる。山田博士は「ばかり」は『のみ』と殆ど同じ意の助詞なるが、たゞ少しく異なる點は、他と區別して示す意あることなり。」「日本文法學概論」四五三頁—四五四頁)と言つてをられる。この程度の差別で十分であらう。

(五)ばかり

文語にも口語にも用ひられる副助詞である。事物の状態・數量等に就いてその範圍や程度を限り示す。口語に譯すれば「ほど」「たけ」等が當るやうである。

1 程度を示す場合。口語の「ほど」に當る。

有明のつれなく見えし別より曉ばかり憂きものはなし。(古今集)

梅の花餘所ながら見ん我妹が咎むばかりの香にもこそしめ。(後撰集)

殆ど出來上るばかりになつて失敗した。(口)

今歸つたばかりの所です。(口)

2 制限を示す場合。口語の「だけ」に當る。

深草の野邊の櫻し心あらば今年ばかりは墨染に咲け。(古今集)

今來むと言ひしばかりに長月の有明の月を待ち出づる哉。(古今集)

月影ばかりぞ八重葎にも障らすさし入りたる。(源氏物語、桐壺)

あの人は口ばかり上手で實がない。(口)

この頃は雨ばかり降る。(口)

休暇中私は晝寝ばかりしてゐた。(口)

あの人は人を叱るばかりで自分は何もしない。(口)

3 數量に關して大凡の範圍を示す場合がある。制限といふのも實は範圍の限界なのである。

敵はおおよそ百萬ばかりあり。

宵打すぎて子の時ばかりに、(竹取物語)

六尺ばかりの金銅のまきゑのづし。(宇津保物語)

私は一週間ばかり旅行に行つて來た。(口)

金が三百圓ばかり入用です。(口)

魚が五匹ばかり釣れた。(口)

4 「ばかり」が活用言に連る時には連體形につくのが普通であるのに終止形から連つた例がある。「源氏物語」にもその例が見える。

5 上位語及び下位語との關係

前例の「月影ばかりぞ」は主語の下についた例である。

又、「今來むと」「宵すぎて」「六尺ばかり」は格助詞の上にある例である。

たゞいたゞきばかりをそぎ、五戒ばかりをうけさせ奉る。(源氏物語、浮舟)(格助詞の上にあるもの)
心のなやましくてありつるとばかりいひ送りて侍りければ、(後撰集)(格助詞の下につく)

山の井のあさき心もおもはぬに影ばかりのみ人の見ゆるむ。(古今集)(他の副助詞と重なつたもの)
行く船をふり留みかね如何ばかり戀しくありけむ松浦佐用比賣。(萬葉集、八七五)(副修語の下につく)
斯くばかり戀ひつゝあらずは高山の磐根し枕きて死なましものを。(萬葉集、八六)(同)

表へなきものかも人は然ばかり遠き家路を還すおもへば。(萬葉集、六三一)

6 「ばかり」を口語では「ばつかり」「ばかし」「ばつかし」ともいふ。地方によつては「ばか」「ばつか」「ばら」などいふ。

7 「ばかり」は述語の一部分になることがある。

道のりは僅か二里ばかりです。(口)

人数は全部で五十人ばかりだ。(口)

右にも下に「です」「だ」といふ指定の特殊助動詞のあることに注意しなければならぬ。

(六)まで

文語でも口語でも範圍の及ぶ所を示して下の用言の意義を化裁する副助詞である。文語の格助詞「より」と相對の用法(歸着點を示す)があるので格助詞のやうにも考へられ易いが、山田博士の高説の通り副助詞に入れるべきである。格助詞と重用せられることがあるし、主語にも附くし、副修語にもつくことでその事が分るのである。

伊太利まで旅行せむ。

夜の十時まで待てり。

鳴かぬなら鳴くまで待たう時鳥。(口)

何處まで入らつしやるのですか。(口)

來年の春までかゝります。(口)

一人歩きの出来るまでに成長した。(口)

生徒は五十人まで入學を許します。(口)

1 上位語及び下位語との關係

うすくこき野への緑のわか草に跡まで見ゆる雪の村消。(新古今集)(主語の下につく)

博覽會は五月末日まで閉會せず。(同)

中將は大臣までになされたまひてなんありける。(枕草子)(格助詞の上につく)

會は九時までにすみます。(口)(同)

何處までが本當の話ですか。(口)(同)

夢がたりか。とまで大きく。(源氏物語、寄生)(格助詞の下につく)

い。つ。ま。で。か。の。べ。に。心。の。あく。が。れ。ん。花。し。散。ら。ず。ば。千。世。も。へ。ぬ。べ。し。(古今集)(副修語の下につく)

さ。ま。で。心。と。し。む。べき。事。の。さ。ま。にも。あ。らず。(源氏物語、夕顔)(同)

2 口語では文語と同様範圍の及ぶ所を示す外、元來ある事物の上に更に事物の加はることを示す用法がある。この用法は文語にはない所である。

父ばかりか常におとなしい祖母まで怒り出しました。(口)

風が出た上に空合まであやしくなつて來た。(口)

彼に非を悟らせようと私は喧嘩までして忠告した。(口)

愈々駄目なら絶交しようと思つてゐました。(口)

この場合で格助詞と重なるものは右の中にも一例が擧つてゐるが、なほ次の諸例はこれである。

氣候が悪い上に便利までが悪い。(口)

公式までを忘れるやうでは數學の進歩は覺束ない。(口)

彼は親友にまで見放されてしまった。(口)
親友はまだしも、親からまで見捨てられるやうではもうおしまひだ。(口)
なほ「まで」は格助詞「から」と相對して用ひられる事がしばしば有る。次はその例である。この場合は範圍を限ることを示す用法に限るのである。

朝から晩まで働いてゐる。(口)

起きるから寝るまで勉強してゐる。(口)

十八歳から二十歳まで應募出来る。(口)

江戸から長崎まで歩いて行つた。(口)

びんからきりまで西洋の話だつた。(口)

「口語法」(一九三頁—一九六頁)には「まで」を動作事情の至り及ぶ意味を示すもの、限る意味をあらはすもの、程度を表すものの三つに分けて例があげてあるが、その分け方は文法的範疇に正しくあつてゐない所もある。

3格助詞「の」と重なつて、上の語と共に下の語の形容詞的修飾語になる場合がある。

東京までの旅費を貰つた。(口)

來年までの辛抱です。(口)

失敗したら中止するまでの事だ。(口)

七など

文語にも口語にも用ひられる副助詞である。「なにと」の變つたものだといはれてゐる。「など」は從來「ども」と共に複數の意を示す接尾語だと考へられたこともあつたのであるが、山田孝雄博士は、「など」は事物を例として

示して、下の用言の意義を裝定するものであるとなし、次の理由を擧げてをられる。「など」が例示する意味をもつてゐる複數を示す語でないことは、複數を表す「ども」と重ねて用ひられることで分る。

いにしへゆくさきの事どもなどいひて、(伊勢物語)

はこのふたに草子どもなどいれてもてゆくこそ。(枕草子)

木どもなどはかばかからぬ中に。(枕草子)

「ども」で既に複數が表れてゐるのであるから、更に複數を重用する必要はないので、「など」が例示であればこそ「ども」と重用されるのである。一體一をあげてそれを例示するといふことは、これによつて自然に之に類似するもの他に存在することを言ふことがあるので、複數と誤られたのである。

おのれなどはさる事なし。

おのれどもはさる事なし。

前例が往々傲慢不遜の感を與へるのは自分を例として示すからであり、後例が専ら謹慎謙讓の意を表すのは自己を多數の中にかぞへたためである。更に、

庭などもいと蓬茂りなどこそせねども、(枕草子)

除目の程など内裏わたりいとをかし。雪ふりこほりなどしたるに申文もてありく。(枕草子)

などかくはあるごとと湯をせめて入るれば呑みなどして見などなほりゆく。(蜻蛉日記)

右の例はどう考へてもこれを複數といふわけにはゆかない。すべて例示である。又「など」が接尾語で無い證據は次の如く格助詞「へ」「に」の下に立つてゐることと分る。助詞の下に接尾語が來るといふ様なことはあり得ない。

京になど迎へたまひて後、(源氏物語、蜻蛉)
京へなど迎へ参らせたまへらむ後、(源氏物語、浮舟)

以上山田氏の理由とされるところによつて、「など」が例示する副助詞であることが根據づけられた譯である。この高説に従ふべきであると思ふ。

1 上位語及び下位語との關係

花などいまだ見えず。(主語の下につく)

もう月などあるものか。(口)(同)

若菜籠に入れて雉子など花につけたり。(土佐日記)(格助詞の代理)

書寝などするものか。(口)(同)

世ばなれたる海づらなどにはひかくれぬかし。(源氏物語、帯木)(格助詞の上)

人の噂などをしてはいけません。(口)(同)

「私は決して知りません。」などと言つてゐた。(口)(同)

こんな所からなど行けるものですか。(口)(格助詞の下につく)

パスになど乗つてはいけない。(口)(同)

おそくなどなると主人にすまない。(口)(副修語の下につく)

2 「等」を副助詞に入れてその用法は「など」と同じだとする説がある。意味と用法に於て似た所はあるが、格助詞の下に用ひられる用法があるであらうか。又活用言の連用形に附く場合があるであらうか。暫らく疑問として残しておく。

(八) やら

これは口語にのみ用ひる副助詞で疑問・不定・推量などの場合に**使はれる**。中古語では助詞「に」「や」に「あり」といふ動詞の未然形「あら」が連り、更に「む」といふ動詞の附いた「**にやあらむ**」といふ形であつた。これが平安朝時代の末に「**やらむ**」となつた。鎌倉時代には更に轉じて「**やらう**」となり、後遂に「**やら**」となつたものである。

されば、その別路の何とやらむ心にかゝりておぼえしが、かゝらむ事にこそ。(吉野拾遺)

さては、命の生きんするやらむ。(平家物語)

これを「疑問の助辭『や』と助動詞『らん』との連続せるもの」(大日本國語辭典)と説明してあるが、推量の「らん」といふ助動詞がすぐ「や」といふ助詞に連続することは無い。前述「にやあらむ」の約である。本居宣長が、この「やらん」を「詞の玉緒」で、「すべてやらんといふはいやしき辭にて、歌にも文にもふるくは見えす。今の世の人これをよき詞と思ふはひが心得也。」と言つてゐるのは、宣長の時代には新しい言葉と思はれた故であらうか。

1 上位語及び下位語との關係

誰やら分らぬ。(口)(主語の下につく)

何やら見える。(口)(同)

何やら見てゐる。(口)(格助詞の代理)

何時來たのやら少しも覺えがない。(口)(格助詞の下につく)

誰にやらやつてしまつた。(口)(同)

あの人の名は何とやら言つたね。(口)(同)
誰やらが話してゐた。(口)(格助詞の上につく)
何やらを貰つた。(口)(同)

誰やらにやつてしまつた。(口)(同)
どうやら雨も上りさうだ。(口)(副修語の下につく)

2 「やら」はその不定の意から、種々の事柄を並列する場合に用ひられることがある。
何やらかやらと忙がしいことばかりだ。(口)

泣くやら叫ぶやら大騒ぎだつた。(口)
併し、右のやうに用ひられた「やら」は副助詞の中で説くべきものではなくて、並立助詞として扱ふべきものである。この點橋本博士の高説に従ふべきである。(後節並立助詞の條参照)

(九)か

「か」は普通疑問を表す助詞として説いて次の様な例が擧げられてゐる。文語の助詞が口語に用ひられるのである。
これが葡萄の種か。(口)
それでいゝか。(口)

今呼んだのはお前か。(口)
だれも知りませんか。(口)
みんなで五十か。(口)
それだから言はないことか。(口)(反語)

次はいつにしようか。(口)

併し、右の諸例はいづれも終助詞の性質を有つてゐて、決して副助詞といふ譯にはゆかないのである。そこでこの「か」は山田氏も言はれるやうに、文語の係助詞から來たのであるが、口語では一方では右の様に疑問を表す終助

詞となり、一方では次に述べる様に不定の意だけを表して副助詞のやうになつてゐると説いた方が妥當であると思ふ。

1 上位語及び下位語との關係

何かあるだらう。(口)(主語の下につく)

誰かゐるでせう。(口)(同)

何か買はう。(口)(格助詞の代理)

どれか差上げませう。(口)(同)

誰かが来るでせう。(口)(格助詞の上につく)

何かに役立つでせう。(口)(同)

何處かへ行つてしまへ。(口)(同)

何處へか行つてしまつた。(口)(格助詞の下につく)

誰にか行つて貰はう。(口)(同)

何とか工夫を考へよう。(口)(同)

以上の例は「か」が他の副助詞と同様に使はれてゐることを示してゐる。併し、完全に副助詞になつてゐないことは山田博士の説の通りである。而してそれが決して疑問の意を表してゐないことに注意しなければならぬ。

2 「か」はその不定の意よりして二つ以上の事物を並べていふ時に用ひることがある。この場合も不定の意を表してゐることに注意しなければならぬ。

今年は山か海かへ行く豫定です。(口)

庭には梅の木か櫻の木かを植ゑませう。(口)
 あそここの家には犬か猫かが居ます。(口)
 併し、右のやうに用ひられた「か」は副助詞と見るべきものでなくて、前の「やら」に於ける同じ場合の如く並立助詞とすべきものである。(後節並立助詞の條参照)

(10)だけ

これも口語にのみ用ひる副助詞で、制限又は程度の意を表して下の用言の意義を化裁するのである。

1 制限を表す場合

私だけ後に残ります。(口)
 今年だけは海水浴に参りません。(口)
 巻紙はあるから封筒だけ買つて置かう。(口)
 見るだけなら構はない。(口)

2 程度を表す場合

家の高さだけ積みあげる。(口)
これだけ出来れば上乘だ。(口)
 食ふだけ稼ぐ。(口)

3 上位語及び下位語との關係

親だけ来ました。(口) (主語の下につく)
 頂上だけ見える。(口) (同)

子供だけ連れて行きます。(口) (格助詞の代理)
 君には本だけ上げよう。(口) (同)
 この薬は少し苦いだけだ。(口) (述語の一部分となる)
 私はたゞ行くだけですよ。(口) (同)
 負債だけが残る。(口) (格助詞の上)
 説明だけをませう。(口) (同)
 友達だけに通知した。(口) (同)
 親戚だけに招待しよう。(口) (格助詞の下につく)
 親にだけ話してある。(口) (同)
 知人へだけ挨拶状を出した。(口) (同)
 ちよつとだけ休ませて下さい。(口) (副修語の下につく)
 少しだけ差上げます。(口) (同)
 言ふだけ腹が立つ。(口) (活用言の下につく)
 讀まれるだけで書くことは出来ない。(口) (同)

(11)ぎり

口語だけに用ひられる副助詞である。「だけ」「ばかり」等と同じ様に分量或は程度を示す副助詞である。「ぎり」ともいふ。

本きり無い。(口) (主語の下につく)

これきりであとは無い。(口)(格助詞の上につく)
 取るきりで返さない。(口)(同)
 三つきりになつてしまつた。(口)(同)
 私と弟ときりだつた。(口)(格助詞の下につく)
 こゝからきりでほかからは見えない。(口)(同)
 口で言ふきり何もしない。(口)(活用言の下につく)
 年始に来るきりめつたに來ない。(口)(同)
 去年別れたきり逢はない。(口)(同)
 普通は「だけ」を用ひて「きり」「きり」は餘り使はない。用法も普通の副助詞より狭い。

(三)ぐらゐ

分量及び程度を示す口語だけの副助詞である。これは「位」の意味で其の位置程度を云ふのであらうとは「口語法別記」(三一四頁)の説である。「くらゐ」ともいふ。
 花ぐらゐ咲くよ。(口)(主語の下につく)
 酒ぐらゐ澤山あるよ。(口)(同)
 私でも書ぐらゐ書く。(口)(格助詞の代理)
 小學校ぐらゐ卒業しておけ。(口)(同)
 百圓ぐらゐが相當である。(口)(格助詞の上)
 大佐ぐらゐになるつもりだ。(口)(同)

三等ぐらゐを望んでゐる。(口)(同)
 千圓ぐらゐで十分です。(口)(同)
 大佐にぐらゐなれるだらう。(口)(格助詞の下につく)
 あの人とぐらゐ取組まれよう。(口)(同)
 すこしぐらゐ辛抱しなさい。(口)(副修語につく)
 ちよつとぐらゐ休んでもよろしい。(口)(同)
 私でも行けるぐらゐの所です。(口)(活用言の下につく)
 ビールを溢れるぐらゐ注いだ。(口)(同)
 憎らしいぐらゐ上手だ。(口)(同)

(三)づつ

接尾語とする説もあるが、その用法をみると接尾語とは思はれない點があるので、本講では假りに副助詞にしておく。分量を表す語の下についてその割當をいふ。
 十人づつ出かけよう。(口)
 三圓づつ上げよう。(口)
 右の「づつ」は格助詞の代理をしてゐる例である。
 一人に五つづつの分量しかない。(口)
 一人に三枚づつを遺ると四人でいくらになるか。(口)
 小使は一ヶ月二圓づつとしよう。(口)

一日三圓づつになる。(口)
右の「づつ」は格助詞の上に来てゐる例である。併し格助詞の下に來た例は無いから一般の副助詞とその趣を異にしてゐると思ふ。

これだけづつしかありません。(口)
一箱に五十ばかりづつ入つて居る。(口)

右の「づつ」は他の副助詞の下についたものである。若し接尾語であるならば決して助詞の下につくといふことはない。

〔四〕ころ・より

口語だけの副助詞である。ある事物・事情をあげて、更にそれ以上の程度・事物・事情のあることを示す助詞である。もとは名詞の「所」から變つて來て助詞となつたものであらう。完全に副助詞としての性質を發揮しないが、假りに副助詞としておく。

遊びどころの騒でない。(口)(格助詞の上につく)
忙がしくて旅行どころがありません。(口)(同)
内でどころか外でもおなじだ。(口)(格助詞の下につく)
晩までどころか夜通しです。(口)(副助詞の下につく)
たつたこれだけどころではあるまい。(口)(同)
多くは「か」といふ助詞の上について用ひられる。前例にもそれは出てゐるが次の如きはこれである。
叱られるどころか大いに褒められた。(口)

英語どころか日本語さへろくに話せない。(口)
百人どころか五百人は集つてゐる。(口)
寒いどころか汗が出るくらゐだ。(口)
覚えるどころか忘れる一方だ。(口)
返さないどころかことはりも言はない。(口)

〔五〕なり

文語の指定の助動詞の「なり」から轉じて來たものである。口語にだけ使はれる副助詞である。そのままに打任せた意を表す。「なり」としても用ひ、更に「り」を省いて「なと」として用ひることもある。

何なりあるだらう。(口)(主語の下につく)
誰なり來るでせう(口)(同)
どんな藥なり飲むがよい。(口)(格助詞の代理)
寝たなりがよい。(口)(格助詞の上につく)
出來たなりを見せてほしい。(口)(同)
それなりで結構だ。(口)(同)
先方から届いたなりにして置きなさい。(口)(同)
誰となり相談するがよい。(口)(格助詞の下につく)
歸るなり寝てしまつた。(口)(活用言の下につく)
行きなりとびこんだ。(口)(同)

た。る。なり。嘔。き。出。した。(口)(同)
 「なり」を類似の物事を列挙する場合に用ひることがあるが、その時は並立助詞で副助詞ではない。
 山なり海なり好きな所へ行くがよい。(口)
 母のなり姉のなり借りておいで。(口)

第五節 係助詞

係助詞は係になる助詞である。従来「係結」と稱せられた「係」の語をとつて助詞の名稱にしたもので山田博士の命名にかゝるものである。(萩原廣道は係辭と呼んでゐた。)こゝに係結といふのは語の呼應關係の一種であつて、あの上位語が下位語に對して結合する關係の中、下位語の陳述作用に關與する呼應關係をいふのである。即ち、係助詞とその結語(陳述語)との間に存する一定の呼應的規則をいふのである。上に或る係詞が來れば陳述語たる活用形は終止形を用ひ、他の係詞が來れば連體形を以て之に應じ、更に他の係詞が來れば已然形を以て結ぶといふが如き關係的規約をいふのである。必ずしも活用形の變化が係結の根本條件ではないが、陳述語に對する呼應は時によつてその活用形を動かす事實のあることは注意すべきである。係助詞が陳述語を支配する力があればこそ、或る場合には右の如き陳述語の活用形に對して特殊の制約を生ぜしめるのである。山田博士が「係とは述語の上においてその陳述の力に關與する義にして結とは係の影響をうけて陳述をして終止するをいふなり。」(日本文法學概論四七六頁)といはれたのはこの意味である。

この係結に就いての研究に組織を與へたのは本居宣長であつて、その著「紐鏡」(明和八年)、「詞の玉緒」(安永八年)である。而して、宣長は係を次の三種に分けてこれを三轉といひ、之に應ずる結は四十三種あるとしこれを四十三段

と稱した。

- 一 「は」「も」「徒」の係。
- 二 「ぞ」「の」「や」「何」の係。
- 三 「こそ」の係。

後、萩原廣道は「てにをは係辭辨」で「の」と「何」とを除いて「か」を加へて之を修正した。併し、同時に「徒」の係といふのは「は」「も」以外の一切の助詞であると曲解した。宣長のいふ「徒」の係といふのは「上に」「こそ」「や」「の」「や」「何」「は」「も」などいふ辭のなさを今かりに徒といふ。のであるから、係となるべき辭の無い場合をさしたもので、係助詞のない時にも係といふことは出来ても、それは係助詞としての問題には入らぬ意味に解しなければならぬ。

大槻文彦博士はその著「廣日本文典」(二七二頁—二八二頁)に於て「結法」を左の三種に分類された。

- 一 尋常の結法。
- 二 「ぞ」「なむ」「や」「か」の結法。
- 三 「こそ」の結法。

山田孝雄博士は、「著者の研究は助詞中にもこの係助詞とその他との比較に端を發したるものにして聊從來の誤謬を照破しえたりと信ず。思ふに本居宣長翁の詞の玉緒の眞意は百年後の今日著者によりて始めて明にせられたりといふを憚らず。」(日本文法講義二四九頁)と言つてをられる通り、宣長の「詞の玉緒」の所論を論理的に新しく組織しなほされたのが山田博士の研究であると思ふ。從來やゝもすれば格助詞や副助詞とその區別を明かにし得なかつた係助詞の區別を明瞭にされたのである。山田博士の立てられた係助詞は「は」「も」「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」

「な」と、口語にのみ用ひるものとして「さへ」「でも」「しか」「ほか」とで、合せて十二語である。橋本博士は口語の係助詞として「は」「も」「こそ」「さへ」「でも」「なり」と「しか」「ほか」の八語を擧げてをられる。

山田博士によればこの係助詞の特質は次の通りである。

- (一) 係助詞は用言に關係のある語に附屬してその陳述に勢力を及ぼす助詞である。
- (二) 係助詞は主として副助詞の様に用ひられるが、副助詞が主として下の用言の意義を修飾するのに反して、これは前に述べた様に陳述の力を支配するのである。即ち陳述の力の支配に當つて述語に一定の約束を生ずるのである。これが所謂前述の係結の法則である。これを文語でいへば「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」が係になる時には、これに對する結の活用形が一定してゐるは勿論のこと、「は」「も」の係に對して活用形の終止形で結ぶのも亦係結なのである。かくいふのは「は」「も」などの助詞が陳述の勢力に大なる關係を及ぼすからである。だから口語の係助詞「は」「も」は勿論「こそ」「さへ」「でも」「ほか」「しか」も結の活用形の變化を支配こそはしないが、陳述の勢力には大いに影響を及ぼしてゐるのである。この點前節の副助詞と大いに異なる點である。
- (三) 文語の係助詞の大部分は述語の下に附いて、それ／＼の意義を表して結となる事がある。文語の「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」が文の終止として結に用ひられるは勿論、文語の「は」「も」、口語の「は」「も」同様結となるのである。この特性は山田氏の創見にかゝるものだといふ。勿論文語では係にも用ひられたものが口語では結だけにしか用ひられなくなつて、終助詞となつてしまつたものもある。「な」「ぞ」等はこれである。(文語の場合に於ても意味の變つてゐるものは終助詞に扱ふべきが正しいかと思はれるが、暫く山田博士の説に従つておく。但し、山田博士のこの説に對して近時批判の論の見えることは注意すべきである。)
- (四) 係助詞が係として用ひられる時には、格助詞と重ねて用ひられることがある。その時には係助詞は必ず格助詞の

下についてそれ等の上に置かれることがない。この點は副助詞と係助詞の異なる點である。(副助詞は格助詞の上にも下にもつき得るのである。)

春日野の若菜つみにや。白妙の袖ふりはへて人の行くらむ。(古今集)「若葉つみやに」とはいはぬ。

秋萩の花をば雨にぬれせども君をばましてをしこそ思へ。(同)「花はを」「をしこそ」とはいはぬ。

さみだれの空もとどろに時鳥なにをうしとか夜たぐなくらむ。(同)「なにをうしか」とはいはぬ。

議論をこそ述べましたが攻撃はしません。(口)「議論こそを」とはいはぬ。

あの人の勢力には及ばない。(口)「勢力はに」とはいはぬ。

親にこそ言ふが他人には言はない。(口)「親こそに」「他人はに」とはいはぬ。

子供にさへ出来る。(口)「子供さへに」とはいはぬ。

乙よりは甲がよい。(口)「乙はより」とはいはぬ。

馬鹿とでも何とでも言ふがよい。(口)「馬鹿でも」と「何でも」とはいはぬ。

西洋からはまだ歸つて來ない。(口)「西洋はから」とはいはぬ。

船でしか行けぬ所だ。(口)「船しかで」とはいはぬ。

(五) 又係助詞が副助詞と重なる時には、その下にだけ附いて決して上に置かれることが無い。これ副助詞と格助詞とがお互に上下しながら重なるのは大に異なる點であつて、この點も副助詞と係助詞との區別の要點である。

春やとき花やおそきと聞きわかむ鶯だにも鳴かすもあるかな。(古今集)「鶯もだに」とはいはぬ。

住の江の岸による波よるさへや夢のかよひ路人めよくらむ。(古今集)「よるさへ」とはいはぬ。

夜中までなむおはせし。(夜中なむまで)「とはいはぬ。

私だけ。家に居ります。(口)「私はだけ」とはいはぬ。

これだけ。か入りません。(口)「これしかだけ」とはいはぬ。

こゝばかり。寒さ知らずです。(口)「こゝはばかり」とはいはぬ。

何處までも。追つかけて行きます。(口)「何處もまで」とはいはぬ。

少々遅いくらゐ。安全な點で辛抱するさ。(口)「遅いはくらゐ」とはいはぬ。

見るだけ。こそ見ておかなければならぬ。(口)「見るこそだけ」とはいはぬ。

君などでも。出来ることだ。(口)「君でもなど」とはいはぬ。

(六)係助詞と係助詞とが重ね用ひられることは餘り多くは無い。且つ、あつても慣例のあるものに限られてゐる。

春雨にぬれてたづねむ櫻花雲のかへしの嵐もぞ吹く。(金葉集)

我こそは新島守よ。(増鏡)

あれこそは大丈夫だらう。(口)

水さへも飲めぬとは情ない。(口)

(七)係助詞は格助詞の無いところに加へられることがある。

里はあれて人はふりにし宿なれや庭もまがきも秋の野らなる。(古今集)

ぬし知らぬ香こそ匂へれ秋の野にたがぬぎかけしふち袴ぞも。(同)

見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける。(同)

本でも読んで待つてゐたまへ。(口)

目こそ見えないが何でも知つてゐる。(口)

ぐうの音も出さない。(口)

片假名さへ書けない。(口)

姉はか存じません。(口)

(八)口語の係助詞「こそ」は(文語では「ぞ」「なむ」「や」「か」「な」皆さうであるが)接續助詞「ば」の下に附いて上の句と下の句との陳述の關係を緊密に結合せしめることがある。これ係助詞が下の述語の陳述の力に勢力を及ぼすからである。この性質は格助詞や副助詞には全く無いところである。この時文語では「は」「も」にこのことなく、口語では「こそ」にのみ行はれる。

心あてに折らばや折らむ初霜のおきまどはせる白菊の花。(古今集)

いにしへも今も心のなければぞうきをもしらで年をのみふる。(後撰集)

ものしつればなむきこえずなりける。(宇津保物語)

なみなみの人ならばこそあらゝかにもひきかなぐらめ。(源氏物語、帯木)

さうなることが分つてゐたればこそ注意したのである。(口)

短かければこそ足すのである。(口)

冷水浴をやつてゐればこそ風邪も引かないのです。(口)

お前のことを考へればこそ叱りもするのだ。(口)

(九)英語などに譯するとすれば、副助詞は大低副詞に譯されるのであるが、係助詞は之に當る適當の單語がない。橋本博士は「國語法要説」(六五頁)に於て係助詞に就いて次の如く言つてをられる。

これ等は主語・客語・補語・副詞的修飾語などの種々の關係に立つ語を、それら自己の表はす特殊の關係の意味を以て、下に

来る用言又は用言に準すべき語に結合させるものである。……この類は、副助詞と似た所があるけれども、副助詞には断続の意味が伴はないのに對して、係助詞には連續する意味がある事は、體言のやうな断続の意味を伴はない語に附いた場合を比較しても明かであり、(副助詞「私ばかり」「これだけ」には必ずしも連續の意味なく、係助詞「私は」「これさへ」には連續の意味が伴ふ)、又、副助詞は助動詞「た」を付けることが珍しくないに反して、係助詞は「た」を附けると異様に聞えるのを見ても明かである(「私ばかりだ」「これだけだ」は常に用ゐるが「私はだ」「これさへだ」は普通には用ゐられない)。

以下係助詞の各々に就いて意義と用法を概説しよう。

(一)は

文語にも口語にも用ひられ係助詞である。これはそのついである事物をとりたてて判然と指定し、他の事物と紛れないやうにする助詞である。差別を示すとか、排他的であるとか言はれるのも同じ意味である。これが係となつてゐる時は、結には活用言の終止形を以てすることはいふまでもない。

1 主語の下に附いて之を助けてゐる場合

吾背子はいづく行くらむ奥つ藻の名残の山を今日か越ゆらむ。(萬葉集、四三)

秋は來ぬ紅葉は宿にふりしきぬ道ふみわけてとふ人はなし。(古今集)

煙草は喫むが、酒は飲まない。(口)

これは大變役に立つ。(口)

「は」といふ助詞は前にも述べた様に、述語の陳述作用に勢力を及ぼす力と、右の如く上のものをとりたてて判定辨別する力とがあるので、往々主格を示す格助詞と混同されることがある。

「花が」咲く。

「花は」咲く。

に於て「花は」の格は「花が」と同じく主格には相違ないが、この主格は「は」といふ係助詞のために生じた格ではない。以前から主格であるが、(文語の主格は往々格助詞なしに示される事がある)その主格をとりたてて判然と指定したために、格助詞に代ゆるに係助詞を置いたまでである。主格の語についての助詞がすべて主格を決定するものとは限らないのである。

花も 咲く。

花まで 咲く。

花さへ 咲く。

花のみ 咲く。

花だけ 咲く。

花ばかり 咲く。

右の場合、「咲く」といふ語に對してその上の語が主語であるといふことは、「花 咲く。」の場合と毫も變らないのである。しかも、「も」「まで」「さへ」「のみ」「だけ」「ばかり」等の助詞は主語を示す助詞ではないのである。山田博士の例示の意味をかりて説明すれば、

「花が」咲く時

「花は」咲く時

の對比に於て「が」と「は」との意義用法が明瞭に區別されるであらう。「花が」は主語としてのみ「咲く」に關與するのであるから、それ以上の意味は「が」からは發生しない。即ち、「が」といふ語の勢力は「咲く」といふ語に及ぶだけでそれ以上には達しないのである。故に、

「花が」咲く時にはよい匂がする。 「花が」咲く時にはその色を見よ。

と言つても、「花が」と「咲く」との關係は少しも變らないのである。然るに「花は咲く時」といふ時は「花は」と「咲く時」とは分離して、「花は」に對しては何か別の語が來てそれを結ばなければ文勢の結末がつかないの

である。だから、

花は 咲く時にはよい匂がする。 花は 咲く時にはその色を美しく見せる。

といふ場合には、「花は」は「咲く時」に對する關係を保つてゐるのでなくて、「よい匂がする」「その色を美しくする」に關與してゆくのである。従つて、

花は 咲く時にはその色を見よ。

といふ場合には「花は」は「咲く」の主語ではなくて、「花をば」の意となつて副修格になるのである。かく「花は」といふ語の格が主格となつたり、副修格となつたりするのは、「咲く」といふ語が純然たる述格に居るか、形修格にゐるかに依つて起るのである。即ち「は」といふ助詞は「主格に附屬すといふことは本質的のものにあらずして偶然の現象たるに止まり、いつも下に陳述來らざれば決定せずといふことを認むべし。かくの如く考へ來てはじめて「は」といふ助詞は主格を示すことを本性とするものにあらずして、その本質は一定の陳述を要求すといふ點にある事の明白になるべきなり。本居宣長の『係り』といひしは實にこの意味にてありしにて『結び』と云ひしはそれに對する一定の陳述をさしたりしなり。」「日本文法學概論」四九二頁」と言はれるのである。

私が 山本です。

私は 山本です。

の二者を比較してみても同様のことは言ひ得るであらう。「が」と「は」とは混同してはならないのである。

2 上位語及び下位語との關係

畫はたがかきたるぞ。(枕草子) (格助詞の代理)

本は丁寧に扱へ。(口) (同)

忘れては夢かと思ふ思ひきや雪ふみわけて君を見んとは。(伊勢物語) (格助詞の下)

他人にはまけないつもりだ。(口) (同)

書齋からは一步も外へ出ない。(口) (同)

朝のでに米鳴くかほ鳥汝だにも君に戀ふれや時終へず鳴く。(萬葉集、一八二三) (副助詞の下)

これだけは見せられません。(口) (同)

たゞはすまされぬ。(口) (副詞の下)

よくは分らない。(口) (同)

君をのみ思ひこし路の白山はいつかは雪の消ゆる時ある。(古今集) (他の係助詞の下)

それはなむかのちごにとらせ侍りにける。(宇津保物語) (他の係助詞の上)

3 活用言の連體形に連ねて文の結に用ひることがある。この時は上のことを強く主張する意味を表す。

かゝるわざしたまひけるは。(落窪物語)

さてその文は殿上人みなみてしはとのたまへば。(枕草子)

融等も侍るは。

又、今日も雨が降るは。(口)

だん／＼寒くなるは。(口)

これは大變美しいは。(口)

現代の口語にも盛んに用ひられる。述語の下について辨別を表すと同時に感動も表すやうに思はれるが、山田博士のやうにやはり辨別を主とすべきであらうか。女子用の言葉として用ひられる「……わ」「……たわ」の「わ」

はこの「は」より轉じたものである。これになると一層感動の意が強いやうに思はれる。文の終りに用ひられる「は」「わ」は感動の意をもつた終助詞に扱ひたい氣がする。終助詞とすれば勿論係助詞ではない。「わい」は「わ」の轉化である。

室町時代の「抄物」には、

スハヨイハトテ追タソ。(史記抄)

富テ一州ヲ蓋フホトニナツタハソ。(史記抄)

の如く「は」が用ひてあるが、稀に「わ」もある。

サレハコソ汝南先賢僧ト云モアルワソ。(四河入海)

「狂言記」には多く「わ」となつてゐる。

近頃面目もない事があるわ。(抜鼓) いかう喜ぶわ。(萩大名)

まづ、そつちおしやつたがよいわ。(宗論)

徳川時代のものにも「は」と「わ」と兩方用ひられてゐる。

ム、やい、われが鼓はよう鳴るワ。

是はく咲いたわく軒の梅。

いかにも相談づくでさらふは。

4「は」が格助詞「を」の下に来る時は「ば」となる。

秋萩の花をば雨にぬれせども君をばましてをしとこそ思へ。(古今集)

蟹の刈る藻に住む蟲のわれからとねをこそなめ世をば恨みじ。(同)

又、「知らずはあるべからず」を「知らずんばあるべからず」と言ふが、この類推で「知らずば教へん」の「ば」を係助詞と連断してはならない。これは接續助詞の「ば」であるから混同は許されぬ。鎌倉時代以後の用法で、「若し叶はざる時は」を「若し叶はざる時んば」といひ、「今日は」を「今日た」、「久方のあめといふは」を「久方のあめといつば」と言つた如きはいづれも標準的のものではない。又、「讀みはしない」「有りはしない」「見はしない」を「讀みやしない」「有りやしない」「見やしない」と發音するのは發音の便宜に従つたものである。

5なほ「は」には次の如き用法もある。

降り[。]は[。]降[。]れ[。]ど[。]も

し[。]は[。]し[。]た[。]れ[。]ど[。]も

有[。]り[。]は[。]有[。]れ[。]ど[。]も

行[。]き[。]は[。]や[。]ら[。]れ[。]ず

交[。]り[。]は[。]せ[。]ぬ[。]ぞ

信[。]じ[。]は[。]せ[。]ぬ[。]ぞ

死[。]に[。]は[。]し[。]な[。]い

受[。]け[。]は[。]し[。]な[。]い[。]が

歸[。]り[。]は[。]し[。]な[。]い

冬[。]で[。]は[。]あ[。]る[。]が

嘘[。]で[。]は[。]な[。]い

生[。]か[。]し[。]て[。]は[。]お[。]か[。]ぬ[。]ぞ

6「ずは」に就いては既に否定の助動詞の條下で述べた。又「ぬに」の意味をもつ「ねば」に就いては佐伯梅友氏の「萬葉集講座」の説を本講(五六〇頁)にも引用しておいたが、氏は同じ意見を既にはやく「秋風も吹かねば」(「國文學誌」昭和六年十月號)といふ論文に於て發表してをられる。

(二)も

文語にも口語にも用ひられる係助詞である。「は」は多くの事物から或事物をとりたてて指示したのに反し、「も」は或事物が他の事物と同様であることを對比的に含蓄的に示す助動詞であるとされてゐる。事情の類似してゐるものを二つ以上合せて言ふといふ意味で、合説と言つてゐる人もあるのはこの本義によるのである。つまり二つ以上の事物の差別を示すのでなくて、一致或は類似を示すのが根本義である。「も」が係として用ひられる時に

は結には活用言の終止形を用ひることは勿論である。文語では古く「も」を用言の終止形につけて感動を表す結としたが口語では「も」を結として用ひることは決して無い。

1 上位語及び下位語との關係

ちはやぶる神代も聞かずたつた川から紅に水くくるとは。(古今集)(格助詞の代理)

これも差上げます。(口)(同)

男もすなる日記といふものを女もして見んとてするなり。(土佐日記)(主語の下)

何處にも行かず家に籠り居たり。(格助詞の下)

大阪からの歸りに神戸へも寄ります。(口)(同)

鬼すらも都の中と蓑笠をぬぎてやこよひ人にみゆらむ。(射恒集)(副助詞の下)

弟などもその仲間です。(口)(同)

いともゆゆしやとて、(源氏物語、松風)(副詞の下)

2 並列の意味を示すもの

雨も降り、風も吹く。

蛇もとらず、蜂もとらず。

山よりも高く、海よりも深し。

よいも悪いも結局一つだ。(口)

兄も兄なら弟も弟だ。(口)

3 感歎の意を示すもの

その後彼は影も形も見せず。

さる事は思ひもよらざりき。

紅葉二月の花よりも紅なり。

秋も秋、今宵も今宵、月も月、處も處、見る君も君。(後拾遺集)

飲みも飲んだし食ひも食つた。(口)

この「も」を例示的用法の中に入れて説く人もある。

4 結に用ひたもの

さなみの國つ御神のうらさびて荒れたる京見れば悲しも。(萬葉集、三三)

丈夫の輓の音すなりものふの大臣楯立つらしも。(萬葉集、七六)

天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも。(古今集)

世の中は常にもがもな渚漕ぐあまの小舟のつな手かなしも。(新勅撰集)

この終止の「も」は上代には多く用ひられたが今日では用ひられない。この用法に立てる「も」は感動の意を含んだ終助詞とすべき説がある。

(三) ぞ

文語だけに用ひられる助詞である。口語にも「ぞ」はあるが間投助詞になつてしまつてゐる。「ぞ」は或る一事物をとり出して強く指示す意味をもつてゐる。これが係となる時には活用言は連體形で結ぶのがきまりである。又、文の終止に用ひられることもある。「ぞ」は清音の「そ」としても用ひられる。「あれはたぞ」「誰をかれ時」の如

きはその例である。

1 上位語及び下位語との関係

人はいさ心も知らず故郷は花ぞ昔の香に匂ひける。(古今集)(主語の下)

朝霧の時間も待たぬけしきにて花に心を留めぬとぞ見る。(源氏物語、夕顔)(格助詞の下)

み吉野の山べに咲けるさくら花雪かとのみぞあやまたれける。(古今集)(副助詞の下)

大和には鳴きてか来らむ呼子鳥象の中山呼びぞ越ゆなる。(萬葉集、七〇)(用言の下)

まゐるもいとぞくるしき。(枕草子)(副修語の下)

一文字をだにしらぬものが足は十文字にふみてぞあそぶ。(土佐日記)

2 文の終止に用ひられるもの

この時にはその事を断言する意味を表す。指定の助動詞「なり」「たり」と同様のはたらきを「ぞ」自らがするものである。決して上に「なり」「たり」が省略されてゐるのではない。この場合には多く體言及び活用言の連體形に附く。

名にし負ふ壺の碑ぞ。

秋去らば今も見ゆる如妻戀ひに鹿鳴かむ山ぞ高野原の上。(萬葉集、八四)

つねに御なかはあしきぞ。(宇津保物語)

昨夜はいづくにかくれたまへりしぞ。(堤中納言物語)

千とせふる松の下葉のいろづくはたがしがらみにかけてかへすぞ。(拾遺集)

秋深き隣は何をする人ぞ。(芭蕉)

右のうち疑問の語の下についた「ぞ」は「ぞ」自身は疑問を表すのではない。たと強めるだけである。又、

遂にみまかりけりとぞ。

感じあへりとぞ。

の如く「ぞ」が結句を指定する格助詞「と」の下に来る時には、「ぞ」は係詞であつて結詞は省略されてゐると見るのが常である。

3 「ぞ」と「こそ」との區別に就いては富士谷成章の「脚結抄」の中に次の如く見えてゐる。

凡ぞはこれ、こそはこれそれをつづめたるあゆひなり。是をもととして見るに、みな事物を一すちにさしきだめていふ詞也。

たとへば石と玉とを人のもたるをまじへ置ながらは、「それぞ玉よ」とをしふる也。又玉をえりいだしてわが手にとりては、

「これこそ玉なれ」といふべし。ぞはひろくこそはせばし。ぞはひろき故に心ゆるくこそはせばき故に心つよき……

大體に區別の要をつくしてゐると思ふ。

四なむ

文語だけに用ひられる助詞である。「なむ」は「ぞ」に似てゐるけれども「ぞ」よりも語勢が緩かて婉曲である。奈良朝時代に用ひられた「なも」(三輪山を然もかくすか雲だにも情あらなもかくさふべしや。萬葉集、一八一)かみつけぬ乎度の多杵里が川路にも兒らは逢はなも一人のみして。萬葉集、三四〇五―他に對する希望欲求の意を表す語)の變化したものだと言はれてゐる。一つの事物を特に示して心持をこれに集注する意がある。これが係に用ひられる時には活用言は連體形で結ぶのが常則である。「なむ」は又文の終止として用ひられることがある。この時には用言の未然形に附いて他に對して希望を表す。「古今集遠鏡」では「してほしい」「くれかし」と譯してある。(この時には普通一人稱の希望を表さないのが常である。若し一人稱の希望を表したい時には「はや」を用ひるの

である。(次條「や」參照)

1 上位語及び下位語との關係

柿本人麿なん歌のひじりなりける。(古今集)(主語の下)

雨なん降らせける。(格助詞の代理)

ゆく人もとまるも袖の涙川みきはのみこそぬれまさりけれとなんよめる。(土佐日記)(格助詞の下)

男京へなむまかるとて。(伊勢物語)(同)

いとなむおそろしき。(宇津保物語)(副修語の下)

後をさへなむ思ひやりうしろみたりし。(源氏物語、帚木)(副助詞の下)

いつしか深崎といふ所渡らんとのみなん思ふ。(土佐日記)(同)

まして思ひなむやらる。(宇津保物語)(用言の下)

2 文の終止に用ひられるもの。これを詠の「なむ」ともいふ。

あかなくてまだきも月の隠るゝか山のはにげて入れずもあらなむ。(伊勢物語)

うつたへにわすれなん。(土佐日記)

よする波うちもよせなむ。(同)

小倉山峯のもみち葉心あらば今一度の御幸またなむ。(拾遺集)

春たてば消ゆる氷の残りなく君が心は我にとけなむ。(古今集)

右の「なむ」は普通助動詞として、係助詞のそれとは區別して考へてゐるのが常であるが、他の係助詞が文の結となるのと同様に考へて、山田博士は係助詞に入れてをられるのである。

3 次の三種の「なむ」を區別する必要がある。

この世にし樂しくあらば來む世には虫に鳥にも吾はなりなむ。(萬葉集、三四八)

死ぬる命いきもやするところみに玉の緒ばかりあはんといはなむ。(古今集)

さくら花山に咲くなん里にはまさると聞くを見ぬがわびしさ。(義孝集)

第一の「なむ」は完了の助動詞「ぬ」の未然形に推量(未來)の助動詞「む」のついたもの。活用言の連用形につく。

第二の「なむ」は係助詞の「なむ」の結に用ひられたもの。希望を表し活用言の未然形につく。

第三の「なむ」は係助詞の「なむ」の係に用ひられたもの。他の係助詞「ぞ」と置換へられる。強めの意。

4 「なむ」が係として用ひられて、しかも文の終に來る事がある。この時は下に結の詞が略されたと見るのである。

かねてより思ひかけし事になむ。(ある。)

昔の男は髪を結びけりとなむ。(いふ。)

一言かくなむ。(申す)

(五)や

文語のみに用ひられる係助詞である。疑問(反語)を表す。これが係になる時には結には活用言の連體形を以てすること「ぞ」「なむ」「か」と同様である。又、文の終止になつて疑問を表すことがある。

1 上位語及び下位語との關係

春やとき花やおそきと聞きわかむ鶯だにも鳴かすもある哉。(古今集)(主語の下)

いつもかく有明の月のあけがたはものや悲しき須磨の關守。(千載集)(同)

夜やくらき道や感へるほととぎすわが宿をしも過ぎがてに鳴く。(古今集)(格助詞の代理)
 もろともに秋をやしのふ霜枯の荻の上葉を照らす月影。(千載集)(格助詞の下)

山河のそきへを遠み愛しきよし妹を相見す斯くや嘆かむ。(萬葉集・三九六四)(副修語の下)

打ち忍びいざ住の江の忘れ草わすれて人のまたやつまぬと。(拾遺集)(同)

見てのみや人に語らむ櫻花手ごとに折りて家づとにせむ。(古今集)(副助詞の下)

かくばかり待つと知らばやほととぎすこす高くも鳴きわたるかな。(拾遺集)(接續助詞の下)

久方の月の桂も秋はなほ紅葉すればや照りまさるらむ。(古今集)(同)

われこそや見ぬ人戀ふる病すれ逢ふ日ならではやむくすりなし。(拾遺集)(他の係助詞の下)

春霞たつを見すてて行く雁は花なき里に住みやならへる。(古今集)(用言を重ねた間に入ったもの)

2 疑問の意は前例の中で分ると思ふが、反語の意は次の例で分るであらう。

妹が袖わかれてひさになりぬれど一日も妹を忘れて思へや。(萬葉集・三六〇四)

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つはもとの身にして。(伊勢物語)(尤もこの歌の解釋には異説もある)

忘れては夢かと思ふ思ひきや雪ふみわけて君を見むとは。(同)

うゑしうゑば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯れめや。(古今集)

右の例は文中若しくは文の最後に來て「や」のみで反語を表してゐるのであるが、次の例は下に係助詞「は」

「も」を伴つて「やは」「やも」となつて反語を表してゐるものである。この時も文中にあつたり文の最後にあつたりする。

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくる。(古今集)

吹く風をなきて恨みよ鶯は我れやは花に手に觸れたる。(同)

散る花の鳴くにしとまるものならば鶯におとらましやは。(同)

さよなみの志賀の大曲淀むとも昔の人に亦も逢はめやも。(萬葉集・三二)

山は裂け海はあせなむ世なりとも君に二心我れあらめやも。(金槐集)

3 次の「や」はいづれも係詞として用ひられたものと思はれるが、下には結の詞がない。これは省略されたと見るべきものである。(この時「やは」となることもある。反語の「やは」と區別しなければならぬ。)

谷風にとくる氷のひま毎に打出る波や春の初花。(古今集)

山吹の花色衣主や誰とへど答へすくちなしにして。(古今集)

手を折りて逢ひ見しことを數ふればこれ一つやは君が憂き節。(源氏物語・帯木)

又次の「たてるや」の「や」は完了の助動詞「り」の連體形に連つてゐる。これは「る」の下に體言「所」が略されてゐると見るか、「たてる」を準體言と見るか何れかに従ふべきであつて、下に結の詞の無いことは右と同様である。

春霞たてるやいづこみ吉野の吉野の山に雪は降りつ。(古今集)

4 文の終止に用ひられるものの例は前にも出てゐたが次はそれである。この時は活用言の終止形に附くのが常則である。

朝宮を忘れ給ふや、夕宮を背き給ふや、(萬葉集・一九六)

名にし負はばいざ言問はむ都鳥我が思ふ人はありやなしやと。(伊勢物語)

あこはうせにしもうとの顔はおぼゆや。(源氏物語・夢浮橋)

ニ違背セルモノト云フ可ラズ。殊ニ此格ノ行ハルルガ爲ニ、疑問法ノ語尾ハ終止連體兩様ナリシモノヲ、連體ノ一段ニ節約スルコトヲ得ルガ上ニ、疑問ノ有無ニヨリテ、ヤ^カヲ遣ヒ分クル不便ヲ避クルコトヲ得ベシ。又「聞くことを得や」「こゝに来や」「彼の事を爲や」ナド云フコトノ行ハレザルコト既ニ久シク、「家を建つや」「水を満つや」「木を植うや」ナド云フコリモ「家を建つるや」「水を満つるや」「木を植うるや」ト云フ方耳ダタマ世トナレル今日ニ於テハ、本項ノ如ク改定スベキハ正當ノ事ナリト云フベシ。

5「や」は動詞・助動詞の已然形につくことがある。前にあげた反語の例の中の「忘れて思へや」「枯れめや」「逢はめやも」「あらめやも」もそれであるが、次の例もこれを示してゐる。

明けばまた越ゆべき山の峯なれや空ゆく月の末の白雲。(新古今集)

もゝしきの大宮人は暇あれや櫻かざして今日もくらしつ。(同)

これは係詞に用ひられた「や」ではなく、疑問に多少詠歎の意を加へて上の文を結んだものと見るべきである。この場合これを詠歎の「や」と見て間投助詞に入れようとする説がある。併し、次の「や」は同じく活用言の已然形にはついてゐるが、係詞に用ひられた「や」であるから連體形の結が下にあることに注意すべきである。(尤もこの場合の「や」も結の「や」と見得る餘地はないでもない。)

もゝしきの大宮人は暇あれや梅をかざしてこゝに集へる。(萬葉集、一八八三)

うき草のうへは茂れる淵なれや深き心を知る人もなき。(古今集)

右の「あれや」「なれや」は普通解釋法として「あればや」「なればや」の意であるとしてゐる。

6「や」が接續助詞「ば」の下に附いて「ばや」となつて用ひられることは前にあげた例の中にもあるが、次もそれである。

忍びつゝ思へばくるゝ住の江の松のねながらあらはれなばや。(拾遺集)

こひするは苦しきものと知らすべく人を我が身に暫しなばや。(同)

衣しも多くあらなむ取りかへて着なばや君が面忘れたらむ。(萬葉集、二八二九)

心あらむ人にみせばや津の國のなにはわたりの春のけしきを。(後拾遺集)

これは所謂合成語と見るべきもので、常に終止にのみ用ひられて意味も希望を表すやうになつてゐるので、終助詞と見なすべきものである。活用言の未然形に附く。

7「や」は次に述べる「か」と共に疑問を表す助詞であるが、上に疑問の意味を持つてゐる語がある時には、文末でも中でも概ね「か」を用ひて「や」を置かないのが中古の語法である。

いづくにあるか。

いかでか知らむ。

誰をか知る人にせむ。

ところが今日では上に疑問の語があつても「や」を用ひる事が多数行はれてゐる。「文法上許容ニ關スル事項」の十四には次の様に定めてある。

上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをハ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ。

例 誰ニヤ問ハン。

幾何ナルヤ。

如何ナル故ニヤ。

如何ニスベキヤ。

若し「誰問ひたるや」等といふ時には(一)上の疑問の語あるに「や」を以て結びとし(二)活用言の終止形を受くべきに「たる」と連體形を受け、合せて二項の許容案に觸れたことになる。

「現今普通文法改定案調査報告之一」(一頁―九頁)ではその理由に就いて次の如き説明をのせてゐる。

中古文ニ於テハ、疑問ノヤヲ、疑ノ詞ノ下ニ用ケルコト無シト雖モ、現行普通文ニ於テハ、之ヲ以テ正格ト定ムベシ。但シ、ヤヲ輕義ノ疑問天爾乎波トシ、カヲ之ニ對スル重義ノモノトシテ、兩存シ叙述者ノ修辭上ノ採擇ニ委スベシ。

第一例

中古文

如何に心得るにか
何と聞きたるにか
如何なる事にかあらん
いづれの處にか住むべき

普通文

如何に心得るにや
何と聞きたるにや
如何なる事にやあらん
いづれの處にや住むべき

第二例

中古文

何なるか
誰に問ふか
いづれを選ぶか
何處にあるか
幾日になれるか
何故に來りしか
いかにすべきか

普通文

何なるや
誰に問ふや
いづれを選ぶや
何處にあるや
幾日になれるや
何故に來りしや
いかにすべきや

第三例

中古文

誰か聞く
いづれが正し
何事が起りたる
誰にか問ひし
何ぞ遅
誰ぞ來れ

普通文

誰か聞くや
いづれが正しきや
何事が起りたるや
誰にか問ひしや
何ぞ遅きや
誰ぞ來れるや

いかなる人々を招くべきか
何處の花か盛りならん
いかなる人々を招くべきや
何處の花や盛りならん

理由 此等ノ用格ニツイテハ「玉籠」ニ、

なにいかにいづれいくたれたかなどの下にかもじをおくつねなり。そはなにかいづれかたれかなど、やがてつづけてもおき、又中に詞をへだててもおくなり。そのつづけておく、かもじは、今の世にもさく誤ることはなきを中に詞をへだて、おくかもじをば誤りて、やもじをおくこと多し。たとへば、「いかなることにあらん」「たれにかあらん」などいふべきを、「いかなることにやあらん」「たれにやあらん」などいひ、又、「いく年月をやへぬる」「たが里よりやきぬらん」などいふ、かやうの類のやは、皆ひがことなり、古の歌文を見てわきまふべし。云々

トアリ。「廣日本文典」(第三六七節)ニ、

やか共ニ疑フ意ノ耳爾波ナレド、上ニ他ノ疑辭アルトキ、例ヘバ「幾何かある」「何をか取る」「誰なるか」「何とすべきか」「いづくにあるか」ナド、下ニ更ニかヲ置クハ常ナレド、斯ル場合ニ、ヤヲ置クコトナシ。

トアリ。落合直文ノ「文章の誤謬」(皇典講研所講演十一)ニ、

かとやとは、共に疑辭なれど、なにといふ詞の下におく疑辭には、必ずかといはねばなりません。やといふは皆あやまりであります。

道とはいかなる道なるやか

道とはいかなる者なるやか

神はいづくに坐するやか

かゝるところは、皆かとかゝねばならぬ。

トアリテ現時國文家ハ一般ニ誤格トシテ斥クルトコロナリ。抑モ「玉籠」ニ言ハレタルハ、主トシテ第一例ノ上ニ係ルモノ

ナリ。今其例ヲ物語ドモニ求ムルニ、「源氏」「枕草紙」ニハ勿論、鎌倉時代中頃ヨリ上ノモノニハ確カナルモ見當ラズ。
 (但普通の印本類、近來ノ活版類ナドニハ、「狭衣」「堤中納言」ニサヘ見エ、又「今昔物語」「寶物集」「平家物語」「十訓抄」
 「古今著聞集」等ニ涉リテ散見スレドモ、是等ハ、後ノ寫シ違ヘ、或ハ片假名本ヲ平假名ニ書キ替フルヲリニ、カヤを見誤
 レル疑モアレバ、時代確カナル證本ヲ得ルマデハ、之ヲ取ラズ。) サレドモ、鎌倉時代ノ後半頃ヨリ、用キ初メシト見エ、
 其頃ノ偽作ト覺シキ「住吉物語」、正シク其頃ノモノナル「沙石集」ナドヨリ、其例多キヨリ見ルトキハ既ニ六百餘年餘ノ
 昔ヨリ用キ慣レテ今日ニ及ベルモノナルコトヲ知ルベシ。サレバ、「源氏」「枕草紙」以上ノ古文ニ摸擬センニハ、之ヲ避ク
 ベキハ勿論ナリト雖モ、之ヲ以テ現行普通文ヲ律セントスルハ、當ヲ得タルモノト云フベカラズ。

少將すぎさまにしのたいをみればよしあるさまなればいかなる人のすむにやとゆかしくおぼして、
 (住吉物語普通印本類聚本校正本皆同)

姫君も何事にやと思ひ給へり。(同)

中納言どののしかくとおほせられしはなにごとによき給ふかといへば。(同)

人難モアリ災モキタラン時佛神ヲウラムル事アルベカラズイカナル方便ニヤアラン。(沙石集六ノ始元和活字)

荒々しくもなきは、いかなるにやとあやしきに。(名和長年へ下し給ふ勅書)

人も今さる人の中に思ひよそへらるゝは誰もかくおぼゆるにや。(徒然草慶長活字本)

いつの程にやとふしぎには侍りし。(宗良親王千八百和歌序)

いかなる人にやおほすらん。(芳野拾遺一)

又「廣日本文典」及ビ落合氏ノ説カレタル所ハ、多クハ第二例ニ係レルモノニシテ、今之レガ實例ヲ求ムルニ鎌倉ノ初ヨリ
 起レルモノノ如ク、コレヨリ以上ニハ絶ユテ見當ラズ、サレバ、中古文法ヲ基礎トスル上ハ、之ヲ斥クルハ當然ノ事ナルベ
 シ。唯現行普通文ニ在リテ第一例ト同ジク、既ニ習用久シク殊ニ右ニ比スレバ一層普通ノモノトナレルガ如クナレバ、今之

ヲ正格ト立ツベキハ多言ヲ要セザル可シ。

此上可^{キナル}爲^ニ何^ヤ様^哉由。(東鑑三)

アナ心ウヤ是ハイヅチヘトテワタラセ給フヤ。(平家三ノ末延慶本)

しづめて、いかなるやうの有るやと。(十訓抄中)

勝負いかやうにみゆるやのよし。(古今著聞集二十魚鳥、曆應本活版本)

コハ如何ニシテカカル所ニ有ルヤト思廻ラス程ニ。(沙石集三ノ上天文本、慶長本)

何事ノ御座マシ候ヤラン。(天文本、慶長本、活字本)

問て言く、如此殺罪は、何等の爲なるや。(日蓮遺文諸願成就鈔)

佛になるべき道を願ふに、何の相違あるべきや、成佛に何の智慧才覺入るべきや。(同十王贊歎鈔)

既ニ第二例ニシテ正格トスベキ上ニハ、第三例ハ無論ノコトニシテ、且ツ是レニツイテハ、未ダ曾テ文法家ノ論及セザルト
 コロナレバ、今更ニ舉グルニ及バザルガ如シ。サレドモ、元ト中古文法家ノ之ヲ禁セザル所以ハ、此例ノヤハカ^ンノ係リ
 ヲ連體形ニテ結び、而ル後ニ、歎ノヤヲ加ヘタルモノト爲セルニ在リ。然ルニ、此類ノヤハ中古ニ在リテハ、
 おとど、などさるけしき見給ひしや。(空穂物語藏開上)

かの君は、何のさえかおはするや。(同菊の宴)

いかにせんとぞおぼゆるや。(枕册子七)

ナドノ如ク、歎キノヤナルコト明カナレド、

東八箇國ノ殿原、誰人カ君ノ御家人ナラヌヤ。(參考盛衰記、史籍集覽本百十三)

いつかは、善人をもとひひたるや。(本願抄上)

三世の諸佛、いづれか多聞淨戒をはめ、破戒罪根をすて給はざるや。(同)

等ノヤニ至リテハ、當時既ニ疑問ノヤトシテ用キタルモノナルコト一見ノ上ニテモ著ルク、且ツ次項ニ舉ゲタルガ如ク、上ニ係リノ詞ナクシテ、此ヤヲ用キテ疑問ノ文ヲ成セルモノ、此處ノ諸例ト同時代ノモノニ存スルニテ明カナリ。サレバ本案ニ於テ第三例ヲ立テ正格トスルト、中古文法家ノ之ヲ許セルトハ、其結果ハ同一ニシテ、其趣意ハ相反セルヲ以テ、特ニ第三例トシテ此ニ舉ゲタルナリ。

8 などは「や」は類似せる事物を列挙する場合にも使はれる。併しこれは係助詞ではなくて並立助詞とすべきものである。
あり。

わりごや何やと……帷子や布やなど。(蜻蛉日記)

皆人は花や蝶やと急ぐ日も我が心をば君ぞ知りける。(枕草子)

口語では「や」はこの列挙の場合にのみを用ひて他は用ひないのが常である。

(六)か

文語にのみ用ひられる係助詞である。疑問を表す點は「や」と變りはない。又、これが係詞に用ひられた時には結に活用言を連體形を用ひることは「ぞ」「なむ」「や」と變りはない。又、これを體言又は活用言の連體形につけて結にすることがある。口語では前に副助詞の「か」の條下で述べた様に、一方では終助詞となり、一方では副助詞となつてしまつて、口語の係助詞「か」といふものは認めないのである。

1 上位語及び下位語との關係

花散らす風のやどりは誰か知るわれに教へよゆきて怨みむ。(古今集)(主語の下)

としごろは何事かしたまへる。(宇津保物語)(格助詞の代理)

誰をか。知る人にせん高砂の松も昔の友ならなくに。(古今集)(格助詞の下、他の係助詞の上)

君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る。(古今集)(格助詞の下)

かゝる路にはいかでかいまするといふを見れば、見し人なりけり。(伊勢物語)(副修語の下)

萬代の春の子の日にいでて見む松はいくたびおひかかはると。(元輔集)(用言と用言の中に入る)

散りか過ぎなむ。(用言と用言の中)

咲きかほこれる。(同)

いくばくの田をつくればか時鳥死出の田長を朝な／＼よぶ。(古今集)(接續助詞の下)

2 文の終りに用ひられるもの

春雨の降るは涙か櫻花散るを惜しまぬ人しなければ。(古今集)

こそ夏なきふるしてし時鳥それかあらぬかこゑのかはらぬ。(古今集)

船いそぎなれも沙干に行人か。(傳芭蕉)

右は體言の下について文の終りに用ひられたものであるが、活用言に附いて文を終止する時はその連體形に附くのが常則である。

世の中は昔よりやは憂かりけん我が身一つの爲になれるか。(古今集)

今は來じと思ふものから忘れつゝ待たるゝ事のまだもやまぬか。(古今集)

うつせみの世にも似たるか花櫻さくと見しまにかつ散りにけり。(古今集)

夢にだに見ざりしものをおぼほしく宮出もするか佐日の隈回を。(萬葉集、一七五)

二人見し雪は今年もふりけるか。(芭蕉)

3 「か」は「や」と同じく單獨にて或は係助詞「は」「も」と合して反語を表すことがある。反語の場合は文中に

あつて係詞となつてゐることもあれば、文の終に来て結になつてゐることもある。

眞野の池の小菅を笠に縫はずして人の遠名は立つべきものか。(萬葉集、二七二)
丈夫の思ひ侘びつゝ度遍く嘆く嘆を負はぬものかも。(萬葉集、六四六)
山科のおとはの山の音にだに人の知るべくわが戀ひめかも。(古今集)〔む〕の已然形に附いてゐることに注意すべきである。〕

聲たえずなげや鶯一とせに二たびとだに來べき春かは。(古今集)
咲く花は千草ながらにあだなれど誰かは春を恨みはてたる。(同)

何の恐るべき事がある。

尤も、次の「かは」は反語ではなくて單なる係にすぎないから混同しないやうにする必要がある。

花毎にあかす散らしし風なればいくそばくわがうしとかは思ふ。(古今集)

いかならむ岩ほの中に住まばかは世の憂きことの聞え來ざらむ。(同)

はちす葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく。(同)

4 上に疑問の語があつて下にも疑問の助詞を用ひる時には、「か」を用ひて「や」を用ひないのが常則であること、及び現代文ではこれに「や」を用ひる許容のあることは前にのべた通りである。

5 「や」と「か」との區別は堀秀成の「助辭音義考」の中に詳細に論じてあるし、又三矢重松博士の「高等日本文法」(五一八頁)にも論がある。試みに後者を引用してみよう。

「や」「か」の別、極めて言ひ難し。されどその差の語調にあるは疑ふべからず。「や」は軟に婉曲にて、其方より言へば意深し。「か」は硬く急に、其の方より言へば淺し。此の兩辭は「に」「ぬ」と「と」「つ」との関係に相似たり。されば

故郷のならしの岡の時鳥言傳やりき如何につげきや。(萬葉集)

を「告げしか」又は「か告げし」といひては全く作者の意と異なる者となる。「思ひきや」を「思ひしか」といふも當らず。「月かも」を「月やも」と言ふは、さる語もなく、よしありとも相應せず。「景色やな」を「景色かな」といふ時は強き様なれど意薄く聞ゆ。又「や」「か」の用法の差ある處よりも推量るべし。「や」は終止を自然にうけ、「か」は連體を體言として受く。「や」は命令に附けども、「か」は然らず。「や」は「に」に親しく「にや」といひ、その意にて「やらむ」より「やら」といふ語を作り、「か」は「と」に親しく「とか」と結合す。

6 「鉛筆かペンかを買はう。」とか「何とか彼とか言つてゐたよ。」とかの如く用ひられる「か」は口語に限るもので、且つ係助詞ではなく並立助詞に扱ふべきものである。

(七) こそ

前に述べた「ぞ」よりも一層強く指示する語で、多くの事物から特にある事物を選びあげて、これをとりたてて他と區別する意味を示す助詞である。「こ」も「そ」も事物代名詞の「こ」「そ」と同系の語であらう、同じ指示の意がはたらいてゐる。文語にも口語にも用ひられる助詞であるが、文語でこれが係に用ひられる時には、結は活用言の已然形で結ぶことになつてゐるが、口語ではこの規則はない。稀にあつてもそれは文語系の語が口語に混用されてゐるといふべきであらう。「こそ」も他の係助詞と同様の文の終に用ひられて結になることがある。この時には願望の意を表す。指示が願望に轉じたものであらうと考へられる。尤もかうして文の末尾にしか現れず、且つその意味も強調から希望に轉じてゐる「こそ」は係助詞と見るべきものでなくて終助詞と見るべきが合理的であるかも知れない。これは前にも一寸觸れたことであるが、こゝでは暫らく山田博士の説に従つておく。

1 上位語及び下位語との關係

色よりも香こそあはれとおもほゆれたが袖ふれし宿の梅ぞも。(古今集)(主語の下)

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくる。(同)(同)
雪こそ降らないが中々寒い日です。(口)(同)

この御手こそ久しく見ね。(宇津保物語)(格助詞の代理)

春のきるかすみの衣ぬきをうすみ山風にこそみだるべらなれ。(古今集)(格助詞の下)

思ふ心を今よりこそは心みるべかりけれ。(蜻蛉日記)(同)

茶をこそ飲んだが酒は飲まない。(口)(同)

こまなべていざ見に行かむ故里は雪とのみこそ花は散るらめ。(古今集)(副助詞の下)

いそのかみふるき都のほととぎすこそ昔なりけれ。(同)(同)

これだけこそ本物ちしい。(口)(同)

けぬがうへに又も降りしけ春霞立ちなば深雪まれにこそ見ゆ。(古今集)(副修語の下)

昔こそよそにも見しか吾妹子が奥津城と思へば愛しき佐保山。(萬葉集、四七四)(同)

ようこそ入らつしやいました。(口)(同)

立田姫たむくる神のあればこそ秋の木の葉のぬさと散るらめ。(古今集)(接續助詞の下)

秋の露いろくごとにおけばこそ山の木の葉の千種なるらめ。(同)(同)

遠慮會釋もあらばこそ、どんく入つて來た。(口)(同)

こよひ來む人にはあはじ棚機の久しきほどに待ちもこそすれ。(同)(他の係助詞の下)

うき事の思ひつらねて雁がねのなきこそわたれ秋の夜な夜な。(同)(用言の間に入る)

2 「こそ」が係となつてゐるに拘らず已然形で結ばないで連體形で結ぶ例が上代のものに見える。結が形容詞もし

くはそれに類する活用の助動詞の場合に限る。

一日こそ人も待ちよき長き日を斯くのみ待たばありかつましじ。(萬葉集、四八四)

うべしこそ見る人毎に語りつき偲びけらしき。(萬葉集、一〇六五)

難波人葦火焚く屋すしてあれど己が妻こそ常めづらしき。(萬葉集、二六五一)

山高み、河とほじろし、野を廣み、草こそ茂き。(萬葉集、四〇一一)

3 文の結に用ひられたもの。これも奈良朝時代のものには見えない。

鶯の待ちがてにせし梅が花散らすありこそ念ふ子がため。(萬葉集、八四五)

吾背子は相念はずとも敷妙の君が枕は夢に見えこそ。(萬葉集、六一五)

梅の花夢に語らく風流たる花と吾思ふ酒に浮べこそ。(萬葉集、八五二)

斯くしつづ遊び飲みこそ草木すら春は生ひつづ秋は散りゆく。(萬葉集、九九五)

右の「こそ」が願望の意をもつことは前に述べたが、これは上の用言の連用形に連つてゐることに注意しなければならぬ。尤も、左の例も「こそ」が文の最後に來て結になつてゐるやうには見えるが、これは連用形に附いてもをらず、願望の意もない。即ち、これは「こそ」が係詞に用ひられてゐるもので、結に相當する語が省略されてゐるのである。(萬葉集では左の外に四一六、七〇四、一三七七、三二一六の四首がこれに當る。)

この岳に小牡鹿ふみ起しうかねらひかかもすらく君故にこそ。(萬葉集、一五七六)

時つ風吹飯の濱に出でつづ贖ふ命は妹が爲こそ。(萬葉集、三二〇一)

4 「こそ」が係詞に用ひられた場合に活用言の已然形に附く例がある。この場合の解釋法として「こそ」の下に接

續助詞「ば」を入れて解釋すると通じはするが、必ずしも「ば」が省略されたのではなく、已然形のまゝで條件法を形成してゐる古格と見るべきものである。

古昔も然なれこそ現身も嬌を争ふらしき。(萬葉集、一三)

歎きつゝ丈夫の戀ふれこそ吾が髮結の漬ちてぬれけれ。(萬葉集、一一八)

後瀬山後も逢はむと念へこそ死ぬべきものを今日までも生けれ。(萬葉集、七三九)

5 この「こそ」と同類のものかと思はれる語に「こせ」「こす」といふ語がある。

芳野河行く瀬の早みしましくもよどむことなく在りこせぬかも。(萬葉集、一一九)

霞立つ春日の里の梅の花山のあらしに散りこすなゆめ。(萬葉集、一四三七)

うれたくも鳴くなる鳥か此の鳥も打ちやめこせね。(古事記)

右の外平安朝のものには左の如く命令形も見える。

飛ぶ雲の上まで往ぬべくは秋風吹くと雁に告げこせ。(伊勢物語)

折々はみ山を出づる鳥の聲ながめわびぬと人に告げこせ。(後撰集)

この「こせ」「こす」に就いては本居宣長の「古事記傳」をはじめ、橋守部の「雅言考」、鹿持雅澄の「古言譯通」、林國雄の「詞の緒環」、木村正辭博士の「訓義辨證」、近くは大槻文彦博士の「廣日本文典別記」(一二〇頁—一二一頁)、最近では石田春昭氏の「希望の『コソ』は動詞であつた」(鳥根縣中等教育研究會國語漢文部「國語漢文研究録」所載)、徳田淨氏「國語法査説」等の中に論ぜられてゐる。とにかく、この「こせ」「こす」は下二段活用に動いてをり、いづれも希望の意味を有し、活用言の連用形に連る點に於て一致し、且つ獨立に文の述語とはならない點からして助動詞と見るのが妥當ではあるまいか。これに文の結びに用ひられる「こそ」を加へるならば三段に

活用してゐたことになるが、連體形や已然形の例はない。コセ、コスが衰滅して行く間にコソのみが遺存し、その品詞も助詞になつて指示する語になつたと思はれる、といふ助動詞説に従ひたいと思ふ。

6 中古時代には係助詞「こそ」を呼掛に用ひた。即ち呼格體言の下につける用法である。

右近の君こそ、まづもの見たまへ。(源氏物語、夕顔)

おとゞこそこれなほ申し直したまへ。(狭衣物語)

人まによりきて「わが君こそまづ物きこえむ」。(枕草子)

右の用法にたつ「こそ」は係助詞の指示的用法の發展したものは相違ないが、係助詞と扱ふ譯にはいかない。間投助詞とすべきものであることは、「太郎よ、何處に行くか。」「お花や、一寸おいで。」の「よ」「や」と比較して見れば分るであらう。

7 以上の例中にも二三口語の用例は見えるが、次にそれを補つておかう。

落しこそすれ、拾つた事はない。(口)

田舎にこそゐるが、天下の大勢には通じてゐる。(口)

最後までこそ見なかつたが、大抵は分つたつもりだ。(口)

今度こそ弟を連れて参ります。(口)

押しても引いても動かばこそ。(口)

願ひも頼みも聞かばこそ。(口)

8 鎌倉時代から室町時代にかけて「ござんなれ」「ござんなれ」といふ語がある。前者は「にこそあるなれ」後者は「こそあるなれ」の約と言はれてゐる。

さては一家郎等ござんなれ。(保元物語)

世の中は今はいかにござんなれ。(平治物語)

内府が命を重んじて入道が仰をば輕うしけるござんなれ。(平家物語)

すでに十三日と申すは、これより殆ど鎮西へ下向ござんなれ。(同)

松尾捨治郎氏は「國文法論纂」(二二五頁—二二七頁)に於て感動詞と見るべきものだと言いつてをられる。これに類する語に「ござんめれ」といふ語もある。「めれ」は「めり」の已然形が出てゐるのである。

(八) な

禁止を表す係助詞である。現代の口語文では文の終止にだけしか用ひられないから、口語では終助詞に扱ふべきものである。古く文語では係にも結にも兩様用ひられてゐる。而して、その係に用ひられる時には、之に對する述語は動詞の連用形(動詞の下に助動詞を伴つてゐる時には、その助動詞も連用形)を以てし、その下に更に「そ」(この「そ」は係助詞「ぞ」の清音であると言はれてゐる。従つて禁止の意味は「な」にあつて「そ」にはないのである。)といふ語を加へて之に應ぜしめるのが常則である。これを普通「なその格」と言つてゐる。但し、その動詞が加行變格活用及び佐行變格活用である時には、未然形を以てする。この「なその格」といふは正しい形としては「な」と「そ」が相應するものに對して呼ばれた名稱であるが、その實際の現れ方は次の三様になつてゐる。

- (一) 「な」——(萬葉集時代に見える)
- (二) 「な」——「そ」(萬葉集時代にも古今集時代にも見える)
- (三) 「な」——「そ」(院政鎌倉時代に見える)

その實例は次の如くである。

吾大王ものな思ほし皇神の嗣ぎて賜へる吾がなけなくに。(萬葉集、七七) (一)

吾が船は比良の港にこぎ泊てむ沖へなさかりさ夜ふけにけり。(萬葉集、二七四) (一)

吾なしとなわびわが背子ほととぎす鳴かむ五月は玉を貫かさね。(萬葉集、三九九七) (一)

我が故に思ひな瘦せそ秋風の吹かむその月逢はむものゆゑ。(萬葉集、三五八六) (二)

命あらば逢ふこともあらむわが故にはたな思ひそ命だに經ば。(萬葉集、三七四五) (二)

吹く風をな來その關と思へども道もせに散る山櫻花。(千載集) (二)

此處に人あまたこゑなせそ。(源氏物語、夕霧) (二)

ちりぬとも外へはやりそ色々の木の葉めぐらす谷の辻風。(夫木和歌抄) (三)

牛の子にふまるな庭のかたつむり角あればとて身をばたのみそ。(同) (三)

さまんゝに契りしらるゝ身のうさにいとゞつらさを結びかためそ。(とりかへばや物語) (三)

(三)の式は略式であつて、禁止の語なくして禁止を現してゐるのは用ひられてゐても正しい格ではないと思ふ。かういふ表現法の出來た徑路に就いて松尾捨治郎氏は「一つはなせそ(足利期にはなしそとも)といふ語は、佐變將然形にな…そが附いたのであるが、其をなせ又はなしといふ佐行四段にそが附いたものと誤解して、他の語をも類化したやうに思はれる。」「國語法論攷」(八三三頁)と言つて居られるが、單純に省略法と考へてはどうであらうか。この禁止の「な」の語性に就いては、既に前章の否定の助動詞の條下でのべたやうに、(一)助動詞と見る説、(二)副詞と見る説、(三)係助詞と見る説があるが、本講では係助詞と見る説に従ひたいと思ふ。

なほ、この「な」が文の終止に用ひられて禁止の意味を表すことは、他の係助詞の終止的用法に準ぜられるべきものである。この時には活用言の終止形につくのが本則である。但しラ變動詞に限り連體形に附く。

1 上位語及び下位語との關係

格助詞の代理をしてゐるもの、格助詞の下に附いてゐるもの、用言と用言との間に介在してゐるもの等は前に擧げた例の中に發見することが出来る。その他のものを次にあげよう。

すきすきしきも人などがめそ。(源氏物語、須磨) (主語の下)

きりぎりすいたくな鳴きそ秋の夜長き思はわれぞまされる。(古今集) (副修語の下)

あたりよりだになありきそ。(竹取物語) (副助詞の下)

秋霧は今朝はな立ちそ佐保山のはその紅葉よそにても見む。(古今集) (係助詞の下)

2 文の終止に用ひられたもの

我が宿に咲けるなでし幣は爲むゆめ花散るないやをちに咲け。(萬葉集、四四四六)

我が背子が歸り來まきむ時のため命残さむ忘れたまふな。(萬葉集、三七七四)

冬の池にすむにほどりのつれもなくそこにかよふと人にしらすな。(古今集)

3 「な」と「な……そ」との區別は「あゆひ抄」の禁屬「な何そ」の條に見えてゐる。

(九さへ)

文語の助詞「さへ」は勿論副助詞であるが、口語の助詞「さへ」は係助詞である。それは他の係助詞がもつてゐる職能上の特質を備へてゐるからである。文語の副助詞が口語の係助詞に轉化したのである。従つて口語の係助詞「さへ」は文語の副助詞「さへ」の有する意味を表すのは當然であるが、更に文語の副助詞「だに」「すら」の意味

をも併せ表すやうになつてゐる。これは意味の上のことであるが、「さへ」の係助詞としての特質は次の通りである。

1 主格についた場合

旅行には金さへあればよい。(口)

雨さへ降らなければ結構だ。(口)

2 格助詞の代理をしてゐる場合

お茶さへ下さればよろしい。(口)

見ることさへ許さない。(口)

3 格助詞の下にある場合

これ位の事は子供にさへ出来る。(口)

小學校をさへ卒業しない。(口)

死んでしまはうとさへ思つた。(口)

東京へさへ行つたことがない。(口)

地震の原因はその道の學者でさへ分らぬ。(口)

右の「さへ」は決して格助詞の上に用ひられる事がない。これ他の係助詞と共に、係助詞の有つてゐる特質の一である。

4 副助詞の下にある場合

近所までさへ行けなくなつてしまつた。(口)

君だけさへ承知すればそれでよいのだ。(口)

右の「さへ」も副助詞の下には用ひるが、決して副助詞の上には用ひる事はない。これも亦前項同様係助詞の特質の一である。

5 他の係助詞と重ね用ひられる場合。

花さへも咲かない。(口)

聞いてさへもあされる。(口)

床の上でねがへりするさへも苦しい。(口)

言はないのさへも言つたといふ。(口)

かく他の係助詞と重ね用ひられることも係助詞の特質の一である。

以上の如く「さへ」は係助詞の有つ職能上の特質を具備してゐるので、意味の上では副助詞的の要素が多分にあつても、これを係助詞に入れるのである。

次に「さへ」の意味上の用法は次の通りである。

1 ある物事の一つを擧げて之を強く指示し、そのほかを推量させる意味を表し、それによつて陳述の上にある強調を加へるもの。

水さへ喉に通らなくなつた。(口)

聞く私さへ腹が立つ。(口)

一里の路さへ歩かれないのに、十里とは以ての外だ。(口)

彼の様な學者でさへこの問題には困つた。(口)

鬼にさへ人情はある。(口)

たゞ見るさへいやなことだ。(口)

言つて聞かせるさへ骨が折れる。(口)

右の用法は文語の「すら」に當る意味が主で、中には「だに」に當る意味を表してゐるものもある。なほ次の「さへ」は右と同じ用法に立つてゐるやうだが、意味は「まで」の意味である。

始は勿論終さへ立派に出來た。(口)

友人さへ彼を見限つて了つた。(口)

おしまひの一つさへなくなつた。(口)

2 二つの事物の上に他の事物の添加することを示し、それに依つて陳述の上に力を與へるもの。

風が吹くのに雨さへ降つて來た。(口)

兄が病氣である所へ弟さへ寢こんで了つた。(口)

英語が出來ないのに數學さへ分らぬ。(口)

これは文語の「さへ」の本義がそのまゝ口語で使はれてゐる例である。

3 「だけ」の意味を表すことによつて陳述の上に力を與へるもの。この場合は多く下に「なら」の意味の語が來るのが常である。

歴史さへ満點なら一番だつたのに。(口)

筆さへあればすぐ書いてあげませう。(口)

あなたさへ御承知なら結構です。(口)

もう一つさへあれば皆そろふ。(口)

あとは父の意見を聞きさへすればよいのだ。(口)

熱が低くさへなれば安心です。(口)

活用言につく時にはその連用形からする。

以上口語の「さへ」はすべて係としてのみ用ひられるのである。

107も

口語にだけ用ひられる助詞である。物事をその軽い方面に就いて擧げ示して他を類推させる意を表し、これによつて陳述の上に勢力を及ぼす助詞である。意味の方からいへば文語の「だに」に似てゐるので副助動とすべきであるが、職能上の用法から見れば、前項の「さへ」などと同様に係助詞としての特質を有つてゐるので係助詞とするのである。次に示すのは「でも」の係助詞としての特質である。

1 主格についてゐる場合

暇でも出来たらお伺ひしよう。(口)

友人でも来たら尋ねて見よう。(口)

2 格助詞の代理をしてゐる場合

湯でも水でも飲みたい。(口)

茶でも出ませうか。(口)

何でもしてみせる。(口)

3 格助詞の下についてゐる場合

君が要らないなら弟にでもやらう。(口)

これをでも買つておかう。(口)

誰とでも遊んで来なさい。(口)

いつからでも御越し下さい。(口)

右のやうに格助詞の下にはつくが、上には決してつかないところが係助詞としての特質なのである。

4 副助詞の下についてゐる場合

生徒などでもそれ位の論文は書けます。(口)

これだけでも買ふことにしよう。(口)

それくらゐでも間に合はう。(口)

右のやうに副助詞の下にはつくが、決して上にはつかないのが係助詞としての特質である。

5 副詞の下につく場合

ちよつとでもよいかを見せてほしい。(口)

少しでも御手傳ませう。(口)

「でも」の語源に就いては接続助詞の「ても」より来たとする説と、「にても」の約であるとする説と、格助詞「で」に係助詞「も」が附いて出来たものとする説とある。

この「でも」と同形であつて係助詞でない「でも」があるから混同しないやうに注意する必要がある。

1 接続助詞の「も」が同じ接続助詞の「て」に附いて「ても」となり、更にこれが上の語の音便で「でも」となつたものがある。

いくら大聲で呼んでも聞えなかつた。(口)
あなたの御恩は死んでも忘れません。(口)
嚙んでも嚙んでも嚙み切れない。(口)

右の「呼んでも」は「呼びても」の音便であり、「死んでも」「嚙んでも」は夫々「死にても」「嚙みても」の音便であつて、もとの「でも」ではない。

2 形容動詞の中止形の語尾「で」に接続助詞の「も」がついて出来た「でも」がある。

風は静かでも雨は烈しい。(口)
今日は穏かでも明日の事は分らない。(口)
顔は綺麗でも心は醜い。(口)

右の「静かでも」「穏かでも」「綺麗でも」は「静かで」「穏かで」「綺麗で」までが形容動詞の中止形であつて、下の「も」は接続助詞なのである。「静か」「穏か」「綺麗」といふ體言に「でも」といふ助詞が附いたのではなから注意しなければならぬ。「静か」「穏か」「綺麗」が體言で無いといふことは形容動詞の條で詳しく述べたところである。

3 格助詞「で」の下に係助詞「も」が附いて未だ一つの助詞「でも」となつてゐないものがある。

答案はペンでも鉛筆でも書ける。(口)

この問題は算術でも代数でも解ける。(口)

右の「で」は格助詞、「も」は係助詞で、「でも」は別々の意味で重なつてゐる二單語である。併し、答案はペンでも鉛筆でも書ける。(口)

この問題は算術でも代数でも解ける。(口)

となると、上の「で」は格助詞、下の「でも」は一つの係助詞である。従つて「でも」は一つの意味の下に使はれてゐる一單語である。前者と混同しないやうにすべきである。

4 指定の助動詞「だ」の中止形「で」の下に係助詞「も」の附いた「でも」がある。

この木は梅でも櫻でもない。桃の木だ。(口)

彼は兄でも弟でもない。叔父である。(口)

右の「で」は指定の助動詞「だ」の中止形であるから、その中に「である」「です」の指定の意味が含まつてゐる。而してその下に係助詞の「も」が附いたのである。故に「でも」は明かに二單語であつて係助詞の一單語であるのとは自ら別である。よく判別する必要がある。

(二) ほか、しか

口語だけの係助詞である。或る事物を擧げてそれ以外のものを排斥する(あるものを除いてその他のものを打消すのである。)意味を表し、その意味を以て陳述に勢力を及ぼす助詞である。これを受けて結ぶ述語は必ず打消の意味を表す語でなければならぬ。「ほか」の語源は「外」であらう。「しか」は「しきは」の約音であつて「しき」は「しきり」の意であらうといふ説や、「しか」の「し」は「身にあれば」などの如く「それ」と指す「し」であらうといふ説がある。前説は面白い。「しか」の代り「きり」といふ語の用ひられる所などと思ひ合せられる。

意味の上から考へると文語の「のみ」口語の「だけ」に當る。「しか」の代りに「だけ」を用ひて否定の述語を肯定の述語に變へると同意義になる。たとへば「私しか知らない。」は「私だけ知つてゐる。」と同意義である。以て「だけ」と似てゐることが知れよう。意味を有つてゐるので、副助詞とも思はれるのであるが、職能上の用法から

言へば他の係助詞と同様の性質があるので、これを係助詞とするのである。係としてだけ用ひられて結にはならない。

1 主格についてゐる場合

山^ほか^(しか)見^えない。(口)
この店には古^いもの^ほか^(しか)無^い。(口)

2 格助詞の代理をしてゐる場合

私^はこれ^{しか}(^ほか)持^つて^あり^ません。(口)
まだ流^{動物}しか^{(ほ}か)飲^めない。(口)

3 格助詞の下に用ひられる場合

三^圓の^{しか}(^ほか)無^い。(口)
この品は静^岡に^{しか}(^ほか)賣^つて^あり^ません。(口)
水^をほ^(しか)飲^まない。(口)
そんなことはうそと^{しか}(^ほか)思^はれ^ない。(口)
散歩には公^園へ^{しか}(^ほか)行^つた^こと^がない。(口)
寝^るより^ほか^仕方^がない。(口)
この品は米^國から^{しか}(^ほか)輸^入さ^れない。(口)
この品は東^京で^{しか}と^のへ^られ^ぬ。(口)

右の如く格助詞の下にはつくけれども、決して格助詞の上に来ることがないのである。これ係助詞の一つの特質である。

である。

4 副助詞の下につく場合

京^都ま^でほ^(しか)行^かない。(口)
五^十錢^銀貨^だけ^{しか}(^ほか)あ^りま^せん。(口)
私^には^これ^ぐら^ひほ^(しか)出^来ま^せん。(口)

右の如く副助詞の下にはつくが、その上には決してつかない。これも係助詞の一つの特質である。

5 副詞の下につく場合

ち^よつ^とし^か顔^を見^せな^かつ^た。(口)
少^しし^か讀^んで^をり^ませ^ん。(口)
暫^らく^ほか^(しか)滞^在出^来ない。(口)

次の例は副詞的修飾語に「ほか」「しか」のついた場合であるが、副詞に付いたものではない。

來^客は^三人^しか^{(ほ}か)無^かつ^た。(口)
未^だ一^度ほ^(しか)行^つた^こと^がない。(口)
僅^かし^か残^つて^あり^ません。(口)
稀^にほ^かや^つて^來ない。(口)

右の「三人」「一度」は數詞が副修となつたものであり、「僅か」は形容動詞の語幹、「稀に」は形容動詞の副詞形で共に副詞的修飾語となつたものである。

「しか」は發音上「しきや」「つか」となることがある。標準語では無い。

來客は三人しきや無かつた。(口)
未だ一度つか行つたことがない。(口)

(三) だつて

これは「だとも」の約略されたものであらう。それと同じ意味を表す口語だけの係助詞である。

1 主格の下につく場合

名譽心だつてある。(口)
雪だつて降るよ。(口)

2 格助詞の代理をしてゐる場合

英語だつて話せるし、何だつてやらうと思へばやれる。(口)

3 格助詞の下につく場合

お前にだつて出来る筈だ。(口)
琴をだつて弾きます。(口)
外國へだつて行つた事がある。(口)
どこからだつて入れる。(口)

決して格助詞の上に用ひられない所に係助詞の特質がある。

4 副助詞の下につく場合

どれだけだつて構はないから下さい。(口)
それくらゐだつて結構だ。(口)

決して副助詞の上に用ひられない所に係助詞の特質がある。

(三) なりと

口語だけの係助詞である。多くの事物の中から軽いものとして何か一つを選ぶ意を表す。係助詞の特質は次の用例で分るであらう。

1 主格の下にある場合

花なりと咲けばいんの。(口)

2 格助詞の代理をする場合

お茶なりと飲んで下さい。(口)
本なりと貸してくれ。(口)

3 格助詞の下にある場合

何處へなりと行つてしまへ。(口)
散歩になりと出かけよう。(口)

4 副助詞の下にある場合

一冊だけなりと買つてほしい。(口)

5 他の係助詞と重なる場合

友人なりとも来てくれればよいが。(口)

第六節 接續助詞

接續助詞は「廣日本文典」では第三類の助詞に入れてあるもので、動詞・形容詞・形容動詞及び助動詞に附いて、これを次の動詞・形容詞・形容動詞を有する文又は文の一部分に接續せしめる用をなす助詞である。山田博士の「日本文法學概論」(五三一頁—五三三頁)では、「接續助詞とは同等の資格を以て對立せる句を結合して一體たらしむる用をなすを本體とするものにして英獨語の文典などにいふ對立的接續詞、又は同列接續詞といはるゝものの文に屬するものに該當し、所謂接續詞の本體實にこゝに存せるなり。かくてこの類の助詞はこれによりて句と句とを相結合して一體とせるが、各句がその互に同等の資格を以て相合してその混一せる思想を表白したる文の連結をなすものなり。従來この類の助詞を以て用言を助くとせるは皮相の見にして、こは決して一の單語としての用言を助くるにあらずして、用言が述格として用ゐられたる時に限りて附屬するものなれば、思想と思想との結合をなすを本性とせるものなり。」と論じてある。

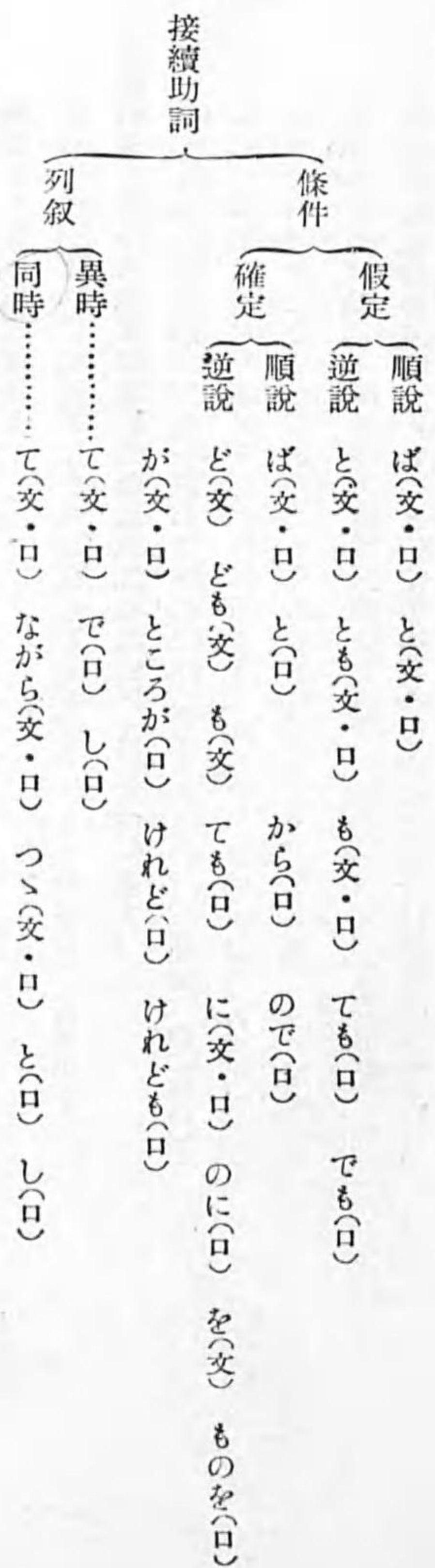
彼女は容貌美しけれども心醜し。
 右の例に於ける「ども」といふ助詞は「彼女は容貌美し」「ども」に接續するために「美し」の已然形「美しけれ」が出てゐる」と「心醜し」とを結びつけてゐるのである。即ち、上下二文の連続をつとめてゐるのである。且つ、逆説的で意味が反對になることを示してゐるのである。

斯くの如くにして、接續助詞に於ては次の三點に着目することが必要である。

- (一) 如何なるものと如何なるものとを結びつけてゐるか。
- (二) 如何なる意味に於て結びつけてゐるか。

(三) 如何なる品詞の如何なる活用形(形態)に結びついてゐるか。

従つて、接續助詞の分類に當つては右の着眼點を顧みる必要がある。即ち、(二)の立場より接續助詞を分類してみると次の如くなる。



又、(三)の立場から接續助詞を分類してみると次の如くなる。

- 1 未然形につくもの ば で と (形容詞及び形容詞型) とも(同上)
 - 2 連用形につくもの も (形容詞に限る) ても て でも つゝながら
 - 3 終止形につくもの と (動詞及び動詞型) とも(同上) けれど けれども し
 - 4 連體形につくもの も が に を のに ものを とところが から ので
 - 5 已然形につくもの ば ども
- 以下各語に就いてその意義と用法を概説しよう。

(一)ば

文語にも口語にも用ひられる。条件の順説を示す助詞である。「ば」は条件を示すのでなく、單に前後の連結にすぎないといふ説があるが、こゝではそれを顧みない。但しこの「ば」はもと係助詞の「は」であつたらうといふ説には十分の注意を拂つてよい。

1 文語の活用言の未然形に附いて未だ成立しない条件を假定的に表す。

獨りのみ著ぬる衣の紐解かば誰かも結ばむ家遠くして。(萬葉集、三七一五)
鶯の谷より出づる聲なくば春來ることを誰か知らまし。(古今集)
風靜かならば船出すべし。
いつまでか野べに心のあくがれむ花し散らすば千代もへぬべし。(古今集)

2 文語の活用言の已然形に附いて既に成立した条件を確定的に表す。

新しき年の始に思ふどちい群れて居れば嬉しくもあるか。(萬葉集、四二八四)
人はいさわれはなき名のをしければ昔も今も知らずとをいはむ。(古今集)
折りつれば袖こそ匂へ梅の花ありやとこゝに鶯のなく。(古今集)
風靜かなれば船出したり。

この時に既に条件の成立したものと假定する場合のあることを注意すべきである。

一旦緩急あれば義勇公に奉じ以て天壤無窮の皇運を扶翼すべし。

(なほ「ば」に就いては本講第四章動詞の條に於ける活用形の用法中未然形(二五一頁—二五二頁)及び已然形(二六七頁—二七一頁)を参照のこと。)

3 口語では活用言の假定形(已然形)に附いて未だ成立しない条件を順説的に假定する。

花が咲けば見に行かう。(口)

内容が面白ければ買ひませう。(口)

あの男は働かせればよく働くでせう。(口)

なほ次は假定形に附いてゐながら假定を表してゐない。文語の2に當る用法である。

見ればまだ年の若い人だ。(口)

それだけ覚えられれば十分だ。(口)

長ければこそ切るのだ。(口)

次も文語同様既に条件の成立したものと假定する場合である。

常に衛生に注意してゐれば心配はない。(口)

運動さへすれば健康になる。(口)

親が叱れば子は反抗する。(口)

4 次も口語ではあるが文語式口語であつて純粹のものではない。

見えも飾もあらばこそ。(口)

追はずばなるまい。(口)

その他「口語法」(二四二頁—二四六頁)に見える事情に比例するもの、事情に相應するもの、事が一緒に落合ふもの、因果的の意味を表すもの等はいづれも右のどれかで説明が出来るものである。

(二)と